

# 四国縦貫自動車道建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告

## 1

赤坂遺跡（Ⅰ）  
赤坂遺跡（Ⅱ）  
赤坂遺跡（Ⅲ）  
金蔵～上井遺跡  
天神山遺跡  
青谷遺跡

1993

徳島県教育委員会  
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター  
日本道路公団

# 四国縦貫自動車道建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告

## 1

赤坂遺跡（Ⅰ）  
赤坂遺跡（Ⅱ）  
赤坂遺跡（Ⅲ）  
金蔵～上井遺跡  
天神山遺跡  
青谷遺跡

1993

徳島県教育委員会  
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター  
日本道路公団



長峰台地東端の遺跡群と吉野川（北より）



赤坂遺跡（Ⅲ）全景（南より）

# 序 文

本センターは、平成元年4月1日に徳島県内における埋蔵文化財の調査及び研究を目的として設立されました。本年度で設立4年目をむかえ、平成元年度より徳島県から委託を受けました四国縦貫自動車道（徳島～脇間）の建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を主な業務としてまいりました。事業を実施するのに必要な体制を整えることができましたのは、徳島県教育委員会の御支援の賜であります。

本報告書は、平成元年度から3年度に調査を実施した阿波郡阿波町赤坂遺跡（Ⅰ）、赤坂遺跡（Ⅱ）、赤坂遺跡（Ⅲ）、板野郡土成町金蔵～上井遺跡、同郡上板町天神山遺跡、同町青谷遺跡の6遺跡について発掘調査の成果をまとめたものであります。これらの遺跡は阿讃山脈南麓に位置しており、赤坂遺跡（Ⅰ）からは弥生中期末～後期初頭の遺構等が、赤坂遺跡（Ⅲ）からは弥生中期の住居跡が検出されており、さらに金蔵～上井遺跡からは旧石器群がほぼ原位置で検出されるなど注目される遺物も出土いたしております。

本報告書が調査研究の資料として活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。なお、発掘調査の実施、報告書作成にあたり、日本道路公団及び関係諸機関並びに地元の皆様に多大の御援助、御協力を頂き、また研究者の方からは貴重な御教示を賜りました。ここに深く感謝の意を表します。

平成5年3月

財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

理事長 近 藤 通 弘

# 例 言

- 1 本書は平成元年（1989）度から平成3年（1991）度にかけて調査を実施した四国縦貫自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書には赤坂遺跡（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）（阿波郡阿波町所在）、金蔵～上井遺跡（板野郡土成町所在）、天神山遺跡・青谷遺跡（板野郡上板町所在）調査報告を収録した。
- 3 発掘調査は日本道路公団高松建設局から徳島県が委託を受け、徳島県からの委託により、財団法人徳島県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 遺構の表示は徳島県埋蔵文化財センターが定める発掘調査基準による略記号を用いた。

## 凡 例

S A	掘立柱建物跡	S E	井戸	S O	窯
S B	竪穴住居跡	S K	土坑（壙）	S P	柱穴
S D	溝	S T	墓	S X	不明遺構

- 5 方位は国土座標第Ⅳ座標系の北、高さは東京湾標準潮位（T. P.）を表す。
- 6 本書で用いた土層及び土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』1989年度版によった。
- 7 調査に当たっては、次の機関の指導・協力を得た。  
徳島県教育委員会 日本道路公団高松建設局 同徳島工事事務所 同脇町工事事務所  
徳島県土木部縦貫道推進局 同中央事務所 阿波町 土成町 上板町
- 8 本書の執筆は以下のとおりである。

I 菅原康夫 II 原 芳伸 III 久保脇美朗 IV-1・3 湯浅利彦 IV-2 平山  
義朗

なお、各章の構成はそれぞれの執筆者が担当した。遺物の写真撮影は島巡賢二、全体の編集は菅原が行った。

# 本文目次

1	調査に至る経緯	1
II	赤坂遺跡（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）	7
1	調査の経過	9
(1)	調査の経過	9
(2)	調査日誌抄	15
2	遺跡の立地と環境	17
(1)	地理的環境	17
(2)	歴史的環境	17
3	調査成果	20
A	赤坂遺跡（Ⅰ）	20
(1)	基本層序	20
(2)	遺構と遺物	20
B	赤坂遺跡（Ⅱ）	38
(1)	基本層序	38
(2)	遺物	39
C	赤坂遺跡（Ⅲ）	40
(1)	基本層序	40
(2)	遺構と遺物	41
4	まとめ	57
(1)	赤坂遺跡（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）の年代と性格について	
III	金蔵～上井遺跡	97
1	調査の経過	99
(1)	調査の経過	99
(2)	発掘調査の方法	99
(3)	調査日誌抄	99
2	遺跡の立地と環境	103
(1)	地理的環境	103
(2)	歴史的環境	103
3	調査成果	105
(1)	基本層序	105
(2)	遺構と遺物	106

A地区	106
B・C地区	106
① 第1遺構面の遺構と遺物	106
② 第2遺構面の遺構と遺物	114
③ 包含層出土遺物	115
4 まとめ	122
(1) 旧石器時代の石器群	122
(2) 弥生時代の遺構と遺物	122
(3) 古代・中世関係の遺構	123
IV 天神山遺跡・青谷遺跡	137
1 調査の経過	139
(1) 調査の経過	139
(2) 調査区割	139
(3) 試掘調査	140
(4) 調査日誌抄	145
2 遺跡の立地と環境	147
(1) 地理的環境	147
(2) 歴史的環境	147
3 調査成果	150
A 天神山遺跡	150
(1) 基本層序	150
(2) 遺構と遺物	152
① 弥生時代	152
② 近世	161
③ 遺構に伴わない遺物	161
(3) まとめ	163
B 青谷遺跡	165
(1) 基本層序	165
(2) 遺構と遺物	168
① 縄文時代	170
② 弥生時代	170
③ 古代・中世	173
④ 遺構に伴わない遺物	174
(3) まとめ	178

# 挿図目次

I	第1図	四国縦貫自動車道（徳島～脇）路線図……………	4	第38図	S B 1001出土石器実測図（1）……………	46	
II	第1図	赤坂遺跡（I）グリッド配置図……………	10	第39図	S B 1001出土石器実測図（2）……………	46	
	第2図	赤坂遺跡（III）グリッド配置図……………	11	第40図	S B 1001出土石器実測図（3）……………	47	
	第3図	赤坂遺跡（I）（II）（III）調査地位位置図……………	13	第41図	S B 1002実測図……………	48	
	第4図	赤坂遺跡（I）（II）（III）周辺の遺跡……………	18	第42図	S B 1002出土石器実測図……………	48	
	第5図	赤坂遺跡（I）遺構配置図……………	21	第43図	S B 1002出土石器実測図（1）……………	49	
	第6図	赤坂遺跡（I）土層実測図……………	23	第44図	S B 1002出土石器実測図（2）……………	50	
	第7図	S K 1001実測図……………	24	第45図	S B 1002出土石器実測図（3）……………	51	
	第8図	S K 1001出土石器実測図……………	24	第46図	S B 1002出土石器実測図（4）……………	52	
	第9図	S K 1003実測図……………	24	第47図	S K 1002実測図……………	53	
	第10図	S K 1003出土石器実測図……………	25	第48図	S K 1002出土石器実測図……………	53	
	第11図	S K 1003出土石器実測図……………	26	第49図	S K 1002出土石器実測図……………	54	
	第12図	S K 1004実測図……………	27	第50図	遺物包含層出土石器実測図（1）……………	55	
	第13図	S K 1004出土石器実測図……………	27	第51図	遺物包含層出土石器実測図（2）……………	55	
	第14図	S K 1005実測図……………	28	III	第1図	調査地位位置図……………	101
	第15図	S K 1005出土石器実測図……………	28		第2図	金蔵～上井遺跡周辺主要遺跡分布図……………	103
	第16図	S K 1007実測図……………	28		第3図	グリッド配置図……………	104
	第17図	S K 1007出土石器実測図……………	28		第4図	B・C地区内低湿地分布範囲略図……………	105
	第18図	S K 1007出土石器実測図……………	29		第5図	A地区S X 1001実測図……………	106
	第19図	S K 1008実測図……………	29		第6図	S X 1001出土石鏃実測図……………	106
	第20図	S K 1008出土石器実測図……………	30		第7図	A地区出土石棒実測図……………	106
	第21図	S K 1008出土石器実測図……………	31		第8図	基本層序……………	107
	第22図	S K 1009実測図……………	32		第9図	遺構配置図……………	109
	第23図	S K 1009出土石器実測図……………	32		第10図	S D 1001実測図……………	111
	第24図	S P 1067出土石器実測図……………	33		第11図	S O 1001実測図……………	112
	第25図	遺物包含層出土石器実測図……………	34		第12図	S O 1002実測図……………	112
	第26図	遺物包含層出土石器実測図（1）……………	35		第13図	S O 1003実測図……………	113
	第27図	遺物包含層出土石器実測図（2）……………	36		第14図	S O 1004実測図……………	113
	第28図	遺物包含層出土石器実測図（3）……………	37		第15図	S O 1006実測図……………	113
	第29図	遺物包含層出土遺物実測図（その他）……………	37		第16図	S K 2001実測図……………	114
	第30図	赤坂遺跡（II）柱状土層実測図……………	38		第17図	S K 2002実測図……………	114
	第31図	赤坂遺跡（II）トレンチ配置図……………	39		第18図	B・C地区出土古代・中世遺物実測図……………	114
	第32図	出土遺物実測図（須恵器）……………	35		第19図	B地区出土弥生土器実測図……………	115
	第33図	出土遺物実測図（旧石器）……………	40		第20図	B地区第15層出土石鏃実測図……………	115
	第34図	赤坂遺跡（III）土層実測図……………	42		第21図	B・C地区出土弥生時代石器実測図……………	116
	第35図	赤坂遺跡（III）遺構配置図……………	43		第22図	B・C地区旧石器出土範囲略図……………	117
	第36図	S B 1001実測図……………	45		第23図	B・C地区出土旧石器実測図（1）……………	118
	第37図	S B 1001出土石器実測図……………	45		第24図	B・C地区出土旧石器実測図（2）……………	119



第25図	B・C地区旧石器分布図	120	第22図	遺物包含層等出土遺物実測図(1)	162
IV 第1図	天神山遺跡調査区割・調査区・試掘トレンチ配置図	140	第23図	遺物包含層等出土遺物実測図(2)	163
第2図	青谷遺跡調査区割・調査区・試掘トレンチ配置図	142	第24図	青谷遺跡基本土層実測図	166
第3図	調査地位置図	143	第25図	青谷遺跡遺構配置図(1)	167
第4図	周辺の遺跡分布図	148	第26図	青谷遺跡遺構配置図(2)	168
第5図	天神山遺跡基本土層実測図	150	第27図	青谷遺跡遺構配置図(3)	169
第6図	天神山遺跡遺構配置図	151	第28図	S K 1027実測図	170
第7図	S B 1001実測図	153	第29図	S K 1027出土遺物実測図	170
第8図	S B 1001出土遺物実測図(1)	153	第30図	S K 1029実測図	170
第9図	S B 1001出土遺物実測図(2)	154	第31図	S K 1029出土遺物実測図	170
第10図	S B 1001出土遺物実測図(3)	155	第32図	S K 1038実測図	171
第11図	S K 1003実測図	156	第33図	S K 1020実測図	171
第12図	S K 1007実測図	156	第34図	S K 1040実測図	171
第13図	S K 1008実測図	157	第35図	S K 1040出土遺物実測図	171
第14図	S K 1008出土遺物実測図	157	第36図	S D 1004実測図	172
第15図	S T 1001実測図	158	第37図	S D 1006実測図	172
第16図	S T 1001出土遺物実測図	158	第38図	S X 1004実測図	173
第17図	S T 1004実測図	159	第39図	S X 1004出土遺物実測図	173
第18図	S T 1004出土遺物実測図	159	第40図	S K 1002実測図	174
第19図	S T 1005実測図	160	第41図	S K 1001実測図	174
第20図	S K 1001実測図	160	第42図	遺物包含層等出土遺物実測図(1)	175
第21図	S K 1001出土遺物実測図	161	第43図	遺物包含層等出土遺物実測図(2)	176
			第44図	遺物包含層等出土遺物実測図(3)	177

## 表目次

I 第1表	四国縦貫自動車道埋蔵文化財調査地一覧表	5	第3表	天神山遺跡 S K 1008出土遺物観察表	180
II 第1表	赤坂遺跡(Ⅰ)遺構一覧表	62	第4表	天神山遺跡 S T 1001出土遺物観察表	180
第2表	赤坂遺跡(Ⅲ)遺構一覧表	64	第5表	天神山遺跡 S T 1004出土遺物観察表	181
第3表	赤坂遺跡(Ⅰ)出土遺物観察表	67	第6表	天神山遺跡 S K 1001出土遺物観察表	181
第4表	赤坂遺跡(Ⅱ)出土遺物観察表	72	第7表	天神山遺跡遺物包含層等出土遺物観察表	182
第5表	赤坂遺跡(Ⅲ)出土遺物観察表	72	第8表	青谷遺跡遺構一覧表	183
III 第1表	出土遺物観察表(1)土器	125	第9表	青谷遺跡 S K 1027出土遺物観察表	187
第2表	出土遺物観察表(2)石器	125	第10表	青谷遺跡 S K 1029出土遺物観察表	187
IV 第1表	天神山遺跡遺構一覧表	179	第11表	青谷遺跡 S K 1040出土遺物観察表	187
第2表	天神山遺跡 S B 1001出土遺物観察表	179	第12表	青谷遺跡 S X 1004出土遺物観察表	188
			第13表	青谷遺跡遺物包含層等出土遺物観察表	188

## 写真目次

II 写真1	赤坂遺跡(Ⅰ)調査風景	15	III 写真1	試掘調査風景	100
写真2	赤坂遺跡(Ⅲ)調査風景	16			
			IV 写真1	天神山遺跡調査風景	145

## 図版目次

巻頭図版	長峰台地東端の遺跡群と吉野川 赤坂遺跡(Ⅲ)全景		図版18	出土遺物(2)	94
II 図版1	赤坂遺跡(Ⅰ)・(Ⅱ)・(Ⅲ)調査区遠景	77	図版19	出土遺物(3)	95
	赤坂遺跡(Ⅰ)調査前風景		図版20	出土遺物(4)	96
図版2	赤坂遺跡(Ⅱ)調査前風景	78	III 図版1	金蔵～上井遺跡調査区遠景 発掘調査風景	127
	赤坂遺跡(Ⅲ)調査前風景		図版2	S D1001検出状況 S D1001完掘状況	128
図版3	赤坂遺跡(Ⅰ)遺構検出状況全景	79	図版3	S O1001検出状況 S O1001完掘状況	129
	S K1001全景		図版4	S O1002・1003検出状況 S O1002・1003掘り下げ状況	130
図版4	S K1001遺物出土状況 S K1003全景	80	図版5	S K2002検出状況 S K2002完掘状況	131
図版5	S K1003遺物出土状況 S K1005全景	81	図版6	石棒出土状況 石核出土状況	132
図版6	S K1007全景 S K1007遺物出土状況	82	図版7	B・C地区出土旧石器	133
図版7	S K1008全景 S K1008遺物出土状況	83	図版8	遺物包含層出土遺物(1)	134
図版8	出土遺物(1)	84	図版9	遺物包含層出土遺物(2)	135
図版9	出土遺物(2)	85	IV 図版1	天神山遺跡調査区全景 天神山遺跡第1調査区A地区遺構完掘状況	191
図版10	出土遺物(3)	86	図版2	天神山遺跡S B1001完掘状況 天神山遺跡S K1003掘り下げ状況	192
図版11	出土遺物(4)	87	図版3	天神山遺跡S K1007掘り下げ状況 天神山遺跡S K1008掘り下げ状況	193
図版12	出土遺物(5)	88	図版4	天神山遺跡S T1001掘り下げ状況 天神山遺跡S T1005掘り下げ状況	194
図版13	赤坂遺跡(Ⅱ)調査風景 土層堆積状況	89	図版5	天神山遺跡S T1004 完掘状況	195
図版14	出土遺物	90	図版6	天神山遺跡出土遺物(1)	196
図版15	赤坂遺跡(Ⅲ)遺構検出状況全景	91			
	S B1001全景				
図版16	S B1002全景 S K1002全景	92			
図版17	出土遺物(1)	93			

図版 7	天神山遺跡出土遺物（2）	197
図版 8	青谷遺跡遠景	198
	青谷遺跡第 7・8 調査区調査前状況	
図版 9	青谷遺跡 S K1027掘り下げ状況	199
	青谷遺跡 S K1029・S K1037掘り下げ状況	
図版10	青谷遺跡 S K1038完掘状況	200
	青谷遺跡 S K1020完掘状況	
図版11	青谷遺跡 S K1040完掘状況	201
	青谷遺跡 S D1004完掘状況	
図版12	青谷遺跡第 2 調査区遺構掘り下げ状況	202
	青谷遺跡 S X1004・S D1007掘り下げ状況	
図版13	青谷遺跡 S K1002・S K1003掘り下げ状況	203
	青谷遺跡第 8 調査区完掘状況	
図版14	青谷遺跡出土遺物（1）	204
図版15	青谷遺跡出土遺物（2）	205

# I 調査に至る経緯

四国縦貫自動車道は「国土開発幹線自動車道建設法」及び「高速自動車国道法」に基づき、四国4県を連結する幹線道路として計画された。徳島県内では徳島～脇間については昭和48年（1973）10月19日「道路整備特別措置法」に基づき建設大臣から第7次の施行命令が出され（昭和54年3月2日整備計画変更、施行命令）、昭和55年12月19日実施計画の認可、昭和56年1月19日に路線発表がされた。

これは徳島市川内町の徳島I.Cを起点とし、吉野川に平行して西進し、板野郡板野町の沖積平野を横断した後、同郡上板町から阿波郡阿波町にかけて阿讃山麓を通過して脇I.Cを結ぶ、区間延長41.4km、用地取得面積259haに及ぶ事業である。

昭和61年4月24日道路局長通達により暫定施工に変更され、62年11月6日徳島～脇間の起工式が行われた。昭和63年5月31日には藍住I.C（追加I.C）の施行命令が出され、6月30日に実施計画が認可されている。

この間徳島県教育委員会（以下「県教委」という。）は昭和60～62年度にかけて脇～板野間、63年度には徳島～板野間の路線に係る分布調査を実施し、埋蔵文化財の実態把握に努めた。これと前後し、分布調査結果を基に県教委と協議を重ねた日本道路公団高松建設局（以下「公団」という。）は、昭和63年6月17日、文化庁に脇～板野間に係る58遺跡の取扱いについて協議を申し入れ、平成元年3月30日、工事の施工に先立って発掘調査を実施する旨の協議を終了した。

一方、県教委では供用が第10次5か年計画に取り入れられ、平成5年が目標となっていることを受けて、63年度に大規模開発に即応した調査体制の整備を図り、平成元年4月1日、財団法人徳島県埋蔵文化財センター（以下「センター」という。）を発足させ、調査に対応することとした。センター発足時には未確定であった徳島～板野間の調査については、平成2年1月22日に10遺跡の取扱いについての協議が終了し、路線内に68遺跡、約360,000㎡（暫定分約340,000㎡）、事業地区面積のほぼ13パーセントにあたる文化財対象地が確定した（第1図）。

県と公団との委託契約をふまえ、県とセンターとの委託契約は元年6月1日付けで締結された。センターでは発掘調査にあたって、機械掘削等工事請負方式と空中写真撮影図化を導入することによって、調査の迅速化に努める方針で臨んだ。しかし、文化財対象地があくまで分布調査結果に基づくものであり、特に工事請負として設計・発注するためには掘削土量の把握が不可欠であるため、試掘調査を先行し、遺構の遺存状態及び層厚の把握に努めた。また、用地取得状況を勘案しつつ、散布地・集落跡・古墳など、遺跡の性格・遺構の累積数

に応じた調査方法、調査工期について検討を行い、調査を実施した。

前述したように、試掘調査を先行する事によって層厚・調査範囲を絞り込んだことに加えて、徳島～板野間の沖積平野では現地表面下3m以深に遺跡が存在することから、遺物の採集が行われなくとも、慎重を期して微高地が調査対象地とされていたこともあり、最終の実掘面積は当初見込みに比べて減少した。

平成元年度には、14遺跡14,500㎡、2年度は33遺跡76,390㎡、3年度は30遺跡35,748㎡、4年度は残件であった14遺跡6,826㎡について、用地取得がなされた地区から調査を進め、当該区間の調査を完了した（第1表）。

それぞれの調査の進捗状況については、既刊の徳島県埋蔵文化財センター年報を参照されたい。

出土遺物の整理、調査報告書作成業務は平成3年度に一部着手し、4年度からは本格的な作業に入り、今後順次刊行の予定である。

なお、本書に収録した報告のうち、土成町金蔵～上井遺跡は元年5月30日、用地買収団体交渉が妥結し、事業地内の文化財対象地として最初に用地取得がなされた地区である。センターが県内ではじめて実施する工事請負方式の調査として、その可否とともに、以後の調査の進め方を問うものといえた。従来の直営発掘とは異なる調査担当者の分掌をはじめ、工程管理、土量管理、対外交渉など、組織を挙げての訓練の場となった。

ここにセンター調査報告書第1集として収録する次第である。

調査組織及び整理体制は以下である。

事務局長	日下 昭（平成元・2年度） 佐藤信博（平成3・4年度）
総務課長	吉田 寛（平成元・2年度） 木内正幸（平成3年度） 岡本一仁（平成4年度）
主 事	佐藤 馨（平成2～4年度）
研究補助員	扶川道代
臨時補助員	田村隆子 上田暁美 岸いくみ 大岸さとみ 福原幸恵 柴田みのり 藤川淑江

調査課長 桑原邦彦（平成元・2年度）  
羽山久男（平成3・4年度）  
調整係長 菅原康夫（平成元年度）  
島巡賢二（平成2～4年度）  
技 師 森長 進（平成元・2年度技術主任）  
堀江隆治（平成3・4年度）  
調査係長 島巡賢二（平成元年度）  
菅原康夫（平成2～4年度）

調査担当

### 金蔵～上井遺跡

研 究 員 久保脇美朗 結城孝典（当時）  
谷 匡人（当時） 高岡 裕（当時）

### 赤坂遺跡（Ⅰ）

研 究 員 松永住美（当時） 米倉康博（当時）  
中野健次  
研究補助員 佐藤誠二

### 赤坂遺跡（Ⅱ）

研 究 員 松永住美 中野健次  
研究補助員 佐藤誠二 十川道雄（当時）

### 赤坂遺跡（Ⅲ）

第1次調査  
研 究 員 松永住美 石川直章（当時）  
第2次調査  
研 究 員 松永住美 中野健次  
研究補助員 佐藤誠二

### 天神山遺跡

研 究 員 計盛真一郎（当時） 湯浅利彦  
安友克佳 平山義朗

## 青谷遺跡

第1次調査

研究員 計盛真一朗 湯浅利彦

安友克佳 平山義朗

第2次調査

研究員 高岡 裕 近藤隆弘(当時)

## 調査報告書作成業務

赤坂遺跡(Ⅰ)・(Ⅱ)・(Ⅲ)

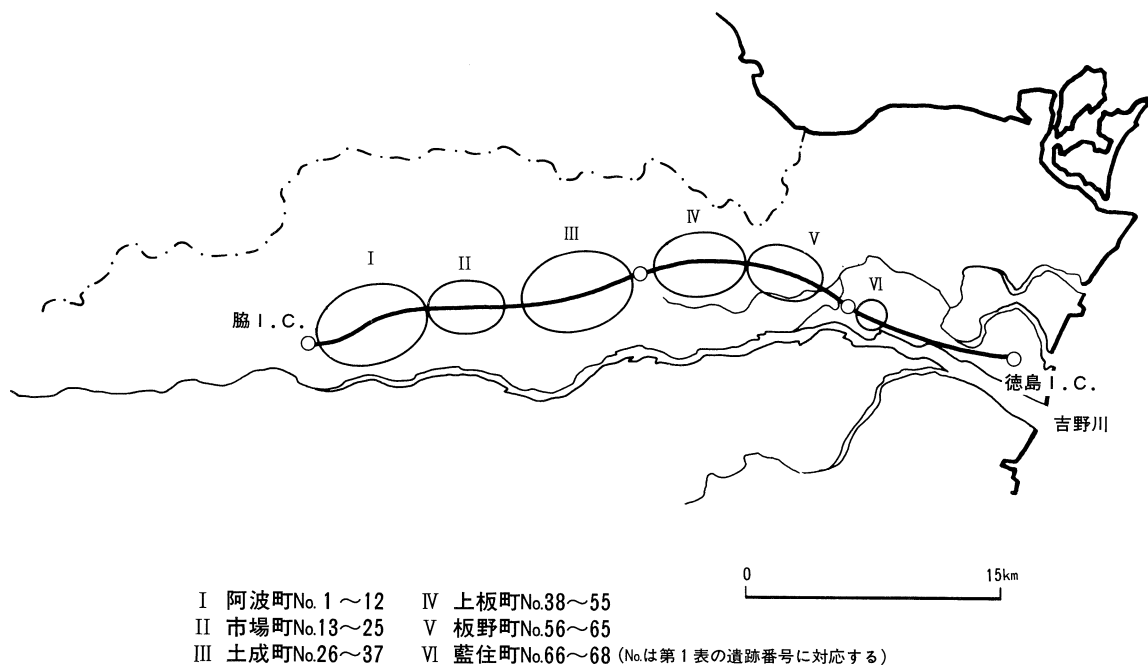
研究員 原 芳伸

金蔵～上井遺跡

研究員 久保脇美朗

天神山遺跡・青谷遺跡

研究員 湯浅利彦 平山義朗




第1図 四国縦貫自動車道(徳島～脇)路線図

第1表 四国縦貫自動車道埋蔵文化財調査地一覧表

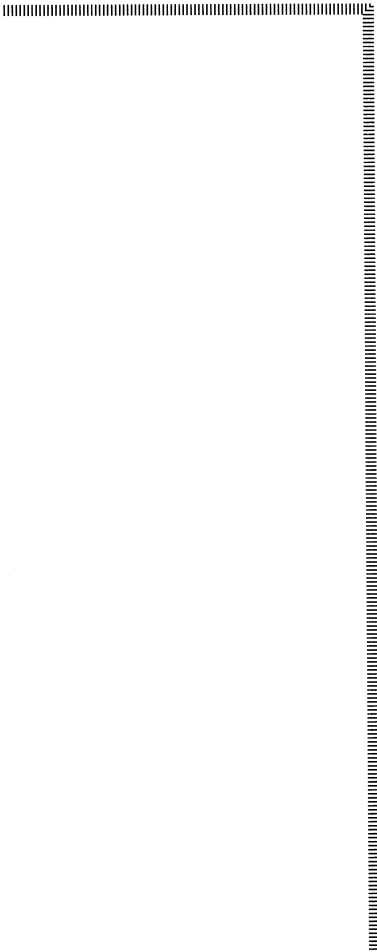
遺跡 番号	遺跡名	所在地	面積 (㎡)				備 考
			実掘面積	元年度	2年度	3年度	
1	西長峰遺跡	阿波郡阿波町西長峰	170	170			
2	中長峰遺跡	阿波郡阿波町中長峰	100	100			
3	東長峰遺跡	阿波郡阿波町東長峰	30		30		
4	日吉谷遺跡	阿波郡阿波町日吉谷	4,080	1,840	2,240		
5	赤坂遺跡 (Ⅰ)	阿波郡阿波町赤坂	800		800		本報告書所収
6	赤坂遺跡 (Ⅱ)	阿波郡阿波町赤坂	50		50		本報告書所収
7	赤坂遺跡 (Ⅲ)	阿波郡阿波町赤坂	1,600	600	1,000		本報告書所収
8	桜ノ岡遺跡 (Ⅰ)	阿波郡阿波町桜ノ岡	8,000	2,690	5,310		
9	桜ノ岡遺跡 (Ⅲ)	阿波郡阿波町桜ノ岡	240	240			
10	桜ノ岡～東正広遺跡	阿波郡阿波町小倉	1,000		1,000		
11	山ノ神遺跡	阿波郡阿波町山ノ神	10		10		
12	山ノ神～八丁原遺跡	阿波郡阿波町山ノ神	30		30		
13	上喜来遺跡	阿波郡市場町大俣	1,160		900	260	
14	大俣山路～大俣宇佐遺跡	阿波郡市場町大俣	250			250	
15	上喜来蛭子～中佐古遺跡	阿波郡市場町上喜来	12,560		11,720	840	
16	八坂遺跡 (Ⅰ)	阿波郡市場町尾開	11			11	
17	八坂遺跡 (Ⅱ)	阿波郡市場町尾開	360	360			
18	八坂遺跡 (Ⅲ)	阿波郡市場町尾開	114			85	29
19	八坂遺跡 (Ⅳ)	阿波郡市場町尾開	2,000	2,000			
20	日吉～金清遺跡	阿波郡市場町尾開	3,100	2,850	250		
21	古田遺跡 (Ⅰ)	阿波郡市場町切幡	60		60		
22	古田遺跡 (Ⅱ)	阿波郡市場町切幡	510	510			
23	坤山～観音遺跡	阿波郡市場町切幡	60			60	
24	乾山～観音遺跡	阿波郡市場町切幡	850			850	
25	乾山遺跡	阿波郡市場町切幡	2			2	
26	金蔵～上井遺跡	板野郡土成町浦池	2,730	2,730			本報告書所収
27	北原～大法寺遺跡	板野郡土成町土成	4,890		4,890		
28	前田遺跡	板野郡土成町土成	10,810		7,710	3,100	
29	椎ヶ丸～芝生遺跡	板野郡土成町吉田	3,550		3,550		
30	北門～涼堂遺跡	板野郡土成町吉田	200			200	
31	広坪～宮ノ下遺跡	板野郡土成町宮川内	60		60		
32	向山古墳群	板野郡土成町宮川内	50				50
33	葬ヶ丸遺跡	板野郡土成町高尾	1,400		1,400		
34	けやき原～林遺跡	板野郡土成町高尾	210		210		
35	西谷遺跡	板野郡土成町高尾	7,300		5,650	1,650	
36	法教田遺跡 (Ⅰ)	板野郡土成町高尾	10		10		
37	十楽寺遺跡	板野郡土成町高尾	430		430		
38	安楽寺谷墳墓群	板野郡上板町引野	2,140			2,140	
39	関堀窯跡	板野郡上板町引野	20			20	
40	天神山遺跡	板野郡上板町引野	1,330		1,330		本報告書所収
41	青谷遺跡	板野郡上板町引野	3,980		3,110	870	本報告書所収
42	明神池古墳群	板野郡上板町引野	194		80	114	



遺跡 番号	遺跡名	所在地	面積 (㎡)				備考
			実掘面積	元年度	2年度	3年度	
43	柿谷遺跡	板野郡上板町泉谷	8,930		3,280	5,650	
44	新池遺跡	板野郡上板町泉谷	31			31	
45	神宮寺遺跡	板野郡上板町神宅	15,649			11,507	4,142
46	菖蒲谷西山A遺跡	板野郡上板町神宅	460		130	330	
47	菖蒲谷西山B遺跡	板野郡上板町神宅	1,980			1,730	250
48	菖蒲谷東山古墳群	板野郡上板町神宅	115			115	
49	山田古墳群A	板野郡上板町神宅	2,200			2,200	
50	山田古墓	板野郡上板町神宅	8			8	
51	山田古墳B	板野郡上板町神宅	775			525	250
52	大谷古墳群	板野郡上板町神宅	30				30
53	大谷薬師遺跡	板野郡上板町神宅	180		180		
54	祝谷古墳	板野郡上板町神宅	90				90
55	聖天山遺跡	板野郡上板町神宅	115				115
56	黒谷窯跡	板野郡板野町黒谷	91				91
57	松谷遺跡	板野郡板野町松谷	900		40	860	
58	蓮華谷古墳群(Ⅰ)	板野郡板野町犬伏	353			65	288
59	蓮華池遺跡(Ⅰ)	板野郡板野町犬伏	340		340		
60	蓮華谷古墳群(Ⅱ)	板野郡板野町犬伏	1,220		1,220		
61	蓮華池遺跡(Ⅱ)	板野郡板野町犬伏	40	40			
62	黒谷川宮ノ前遺跡	板野郡板野町犬伏	10,580	130	10,450		
63	古城遺跡	板野郡板野町古城	10,000	240	8,920		840
64	西中富遺跡(Ⅰ)	板野郡板野町西中富	975			975	
65	西中富遺跡(Ⅱ)	板野郡板野町西中富	125			125	
66	東中富遺跡	板野郡藍住町東中富	760			550	210
67	前須遺跡	板野郡藍住町徳命	876			625	251
68	新居須遺跡	板野郡藍住町徳命	190				190
		計	133,464				



II 赤坂遺跡 (I)・(II)・(III)



- 1 本章は四国縦貫自動車道建設に伴う赤坂遺跡（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）発掘調査報告である。
- 2 発掘調査期間及び報告書作成の実施期間は次の通りである。
 

発掘調査期間	赤坂遺跡（Ⅰ）	平成2年5月17日～7月5日
	赤坂遺跡（Ⅱ）	平成2年9月17日～9月24日
	赤坂遺跡（Ⅲ）	第1次調査 平成2年1月6日～2月22日
		第2次調査 平成2年9月26日～11月1日
報告書作成期間	平成4年4月1日～平成5年3月31日	
- 3 遺物番号は各遺跡ごとに通し番号とした。また挿図番号及び図版番号は編集の都合上、赤坂遺跡（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）をまとめて通し番号とした。
- 4 第4図の地形図は建設省国土地理院発行の1/25,000の地形図「協町」「西赤谷」を転載したものである。

#### 遺跡抄録

遺跡名	赤坂遺跡（Ⅰ）	赤坂遺跡（Ⅱ）	赤坂遺跡（Ⅲ）
読み	あかさか		
所在地	阿波郡阿波町字赤坂65-1	同159-3	同165-1
種別	集落	散布地	集落
時代	弥生・中近世	旧石器・弥生・古墳・中近世	弥生
主な遺構	土坑	無	竪穴住居跡・土坑
主な遺物	弥生土器・石器	石核・須恵器	弥生土器・石器

# 1 調査の経過

## (1) 調査の経過

赤坂遺跡（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）は、四国縦貫自動車道建設予定地に弥生土器片、石鏃等の分布が認められたため、平成元年度・2年度に試掘調査を行い、弥生時代に位置付けられる遺構の存在が確認されたため、本調査の必要性があるとの結論に達した（第3図）。

### 赤坂遺跡（Ⅰ）

本調査は800㎡の調査区を設定し、平成2年5月17日から発掘調査を開始した。調査区割は5m×5mのメッシュを国土座標軸、X軸・Y軸の線の上に組み、X軸方向は西から東へ1～12の数字を、Y軸方向は南から北へA～Kの記号をつけて、それぞれグリッド名とした（第1図）。

遺構は調査区南部および東部に集中してみられ、長方形および方形の土坑と楕円形の土坑が9基、その他75基のピットが検出された（第1表）。

包含層から出土遺物の大半を占める弥生土器や石鏃、石庖丁の他、古墳時代の須恵器片などが出土しており、弥生時代を中心として古墳、鎌倉、江戸時代の各期にわたっている。

### 赤坂遺跡（Ⅱ）

50㎡の調査面積を設定し、平成2年9月17日～24日までの調査期間で試掘調査を行ったが、調査区の北半分は開墾による削平をうけて平らになっており、自然地形を残している南半分には2カ所、削平された部分に2カ所、その境界部分に1カ所トレンチの計5カ所を設定した（第31図）。

当該地は、赤坂遺跡（Ⅱ）は地元の伝承や「阿波町史」などで西林城跡の所在が想定されており、今回の発掘調査ではそのことを立証するものと期待された。

西林城跡は『古城諸將記』や『林町史』などによると、三橋上総守範清の子常陸介宗忠の居城で王子神社の後西北方、赤坂の丘陵上にあつたとされている。天正十年に長曾我部元親の奸言により脇城主武田上野介信顕援兵の為脇町へ出陣した留守中に落城したと伝えられている。

しかし、試掘調査の結果それに伴う遺物および遺構を検出することはできなかった。また出土遺物の点数も非常に少なく遺跡の存在の可能性が希薄なため、本調査は行わず試掘調査のみで本遺跡の発掘調査を終了することとなった。

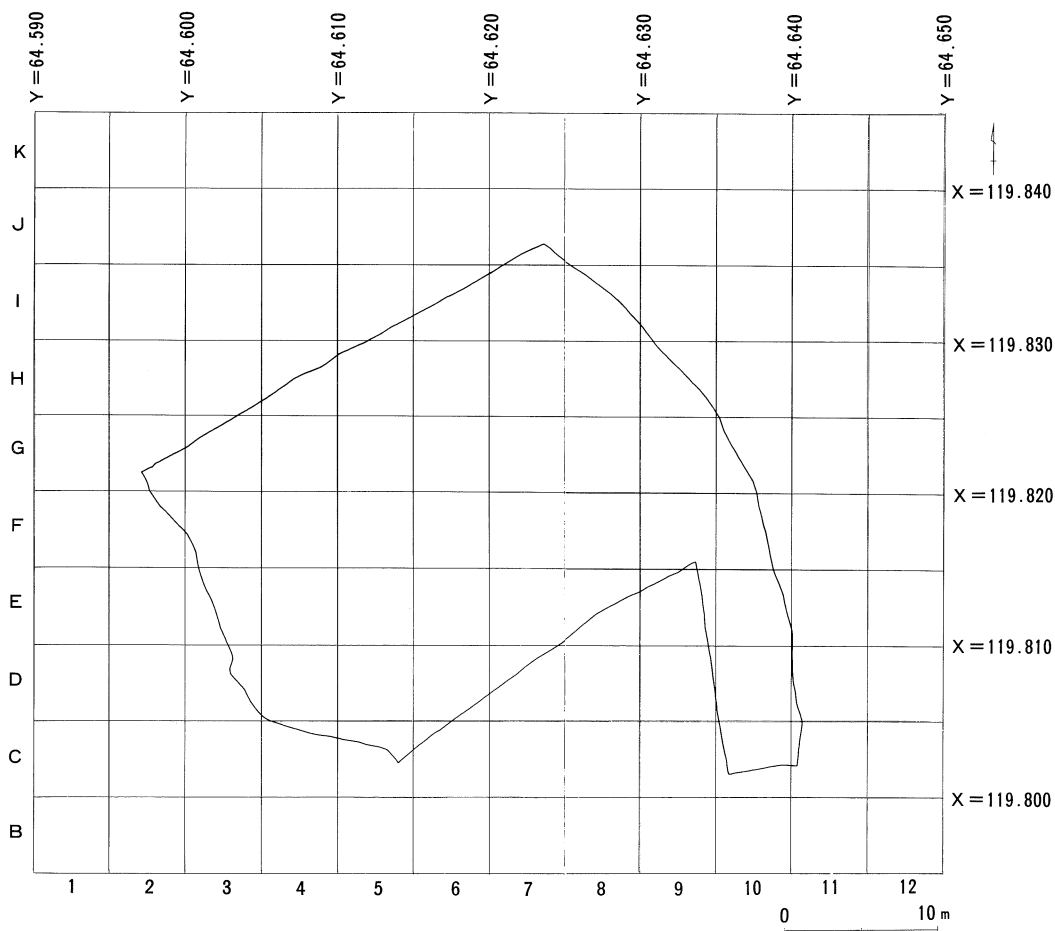
### 赤坂遺跡 (Ⅲ)

平成元年度に試掘調査を行った結果、弥生時代～中世に位置付けられる遺構の存在が濃厚であると予想されたため、引き続き600㎡の調査区域を設定し、1月6日から2月22日まで調査を行った。

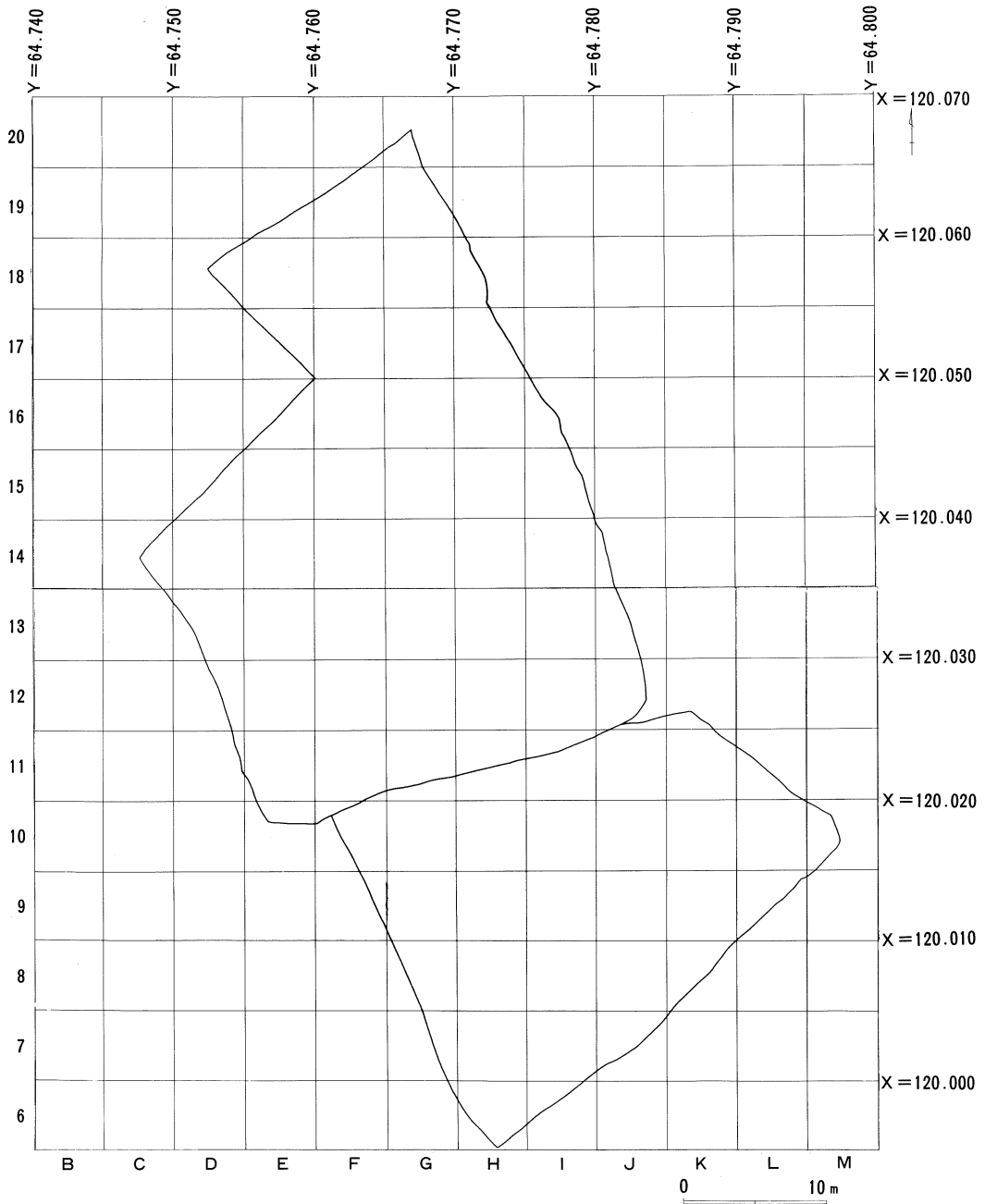
調査区域内のグリッド設定に際しては、5m×5mのメッシュを国土座標の座標軸、X軸、Y軸の線上に組み、X軸方向は西から東へA～Nの記号を、Y軸方向には南から北へと1～12の数字をつけてグリッドを設定した(第2図)。調査の結果、弥生土器片、瓦器片、サヌカイト剥片等が出土したが、良好な遺物包含層および遺構を発見することはなかった(第1次調査)。

平成2年度は、新たに前年度の調査区の北側に1,000㎡の調査区を設定し、9月26日より約1ヶ月間の調査を行った(第2次調査)。

調査区内のグリッド設定に際しては、前年度に続く記号・数字を付けてグリッドを設定し



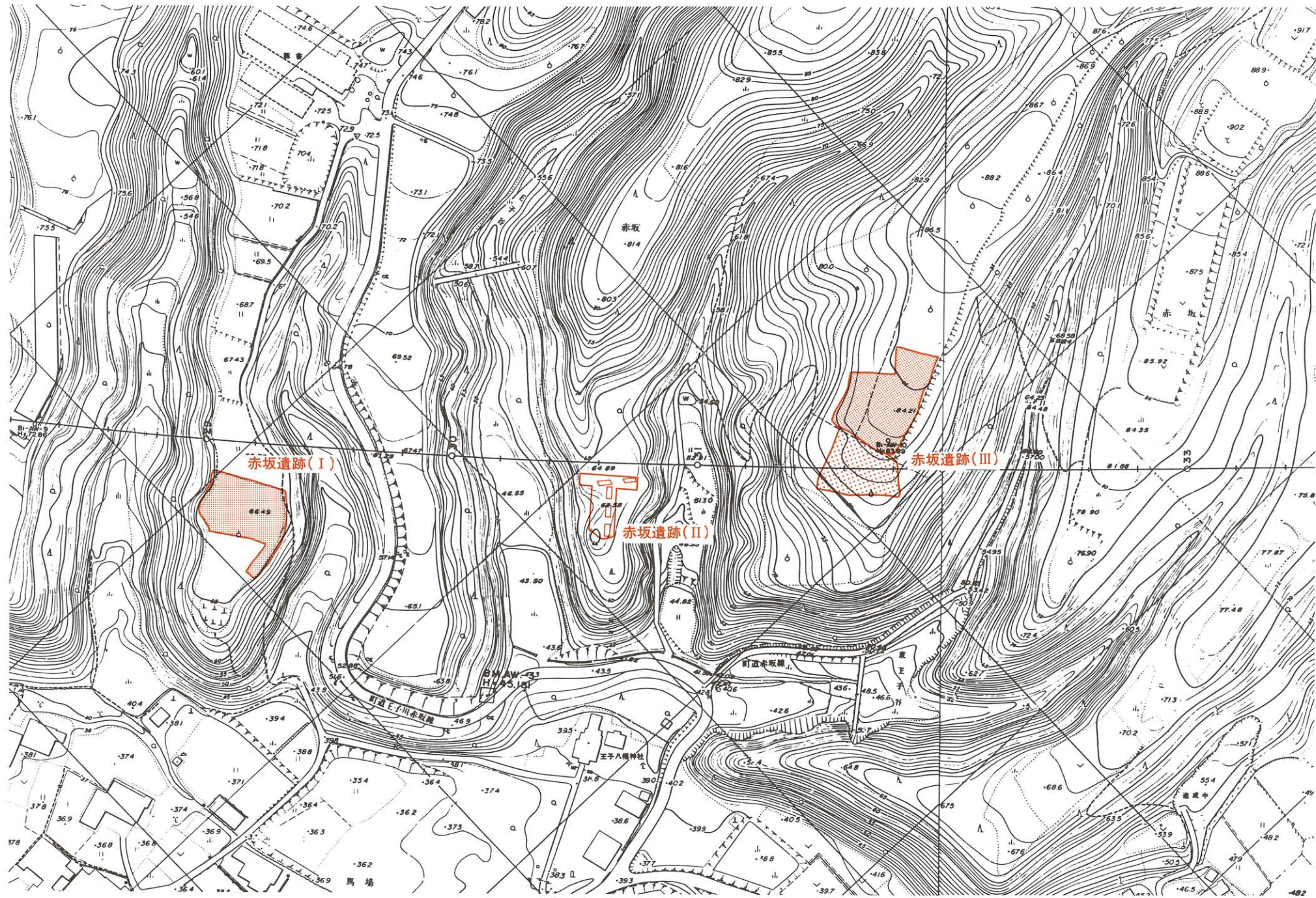
第1図 赤坂遺跡 (I) グリッド配置図



第2図 赤坂遺跡(Ⅲ)グリッド配置図

た（第2図）。

遺構は調査区の東部と西部で多く検出され、弥生時代中期の竪穴住居跡2、土坑5、溝2、ピット95基を検出した（第2表）。



平成元年度調査区  
 平成2年度調査区  
 試掘トレンチ

第3図 赤坂遺跡(I)・(II)・(III)調査地位置図





## (2) 調査日誌抄

### 赤坂遺跡 (I)

1990年

- 5月8日 試掘トレンチ設定。
- 5月10日 試掘トレンチ掘り下げ。弥生土器、サヌカイト片等を出土。
- 5月16日 本調査開始。調査区地形測量及びD7～F10グリッド第1層掘り下げ。
- 5月18日 プレハブ設置。資材搬入。
- 5月24日 D、E5グリッド第2層掘り下げ、及び遺構面精査を行う。ピット18、土坑1基確認。
- 5月28日 E7～F8グリッド遺構検出。E8～G10グリッドからサヌカイト石槍、弥生土器、須恵器等出土。
- 5月30日 D7～F10グリッド遺構検出状況写真撮影。G3～F10グリッド遺構配置図作成。G3～15グリッド第2層掘り下げ。弥生土器、サヌカイト片が出土。G7～I10グリッド遺構検出作業。
- 6月1日 G7～I10グリッド遺構検出状況写真撮影。F7～11グリッド東西セクション南壁及びD7～F7列南北セクション東壁の土層堆積状況写真撮影。のち土層断面実測。F3～6グリッド第2層掘り下げ。C3～F6、D10～F10グリッドの遺構掘り下げ。
- 6月5日 F3～6グリッド東西セクション西半分の土層堆積状況写真撮影

及び土層断面実測。南東部、北東部D7～H9グリッド土層断面実測。

- 6月7日 土坑(SK1001・1003・1005・1007・1008・1009)掘り下げ。写真撮影及び土層実測。

- 6月8日 遺構の平・断面実測開始。



写真1 赤坂遺跡 (I) 調査風景

- 6月12日 遺構及び調査区全景写真撮影。
- 6月14日 遺構の平・断面実測終了。
- 6月18日 第3層掘り下げ開始。
- 6月27日 第3層掘り下げ完了。
- 6月29日 調査終了。

### 赤坂遺跡 (II)

1990年

- 9月20日 試掘調査に入る。第1トレンチ、第2トレンチ完掘。弥生土器、須恵器等出土。
- 9月21日 第3～5トレンチ掘り下げ。第1～5トレンチ土層断面実測及び土層堆積状況写真撮影。試掘トレンチ配置図作成。試掘調査をもって発掘調査を終了。

赤坂遺跡（Ⅲ）

1990年（第1次調査）

- 1月5日 赤坂遺跡（Ⅲ）現地踏査。
- 1月8日 地形測量及び試掘トレンチ設定。
- 1月9日 トレンチ掘り下げ。試掘調査の結果、調査区を600㎡に拡大。
- 1月19日 掘り下げ開始。
- 1月22日 掘り下げ完了。
- 1月25日 遺構面精査開始。
- 1月30日 遺構面精査完了。少量の弥生土器が出土したが、確実な遺構と判断できるものはなかった。
- 2月5日 調査区全景写真撮影。

2月21日 調査区埋め戻し。

2月22日 現場撤収。

赤坂遺跡（Ⅲ）

1990年（第2次調査）

- 9月3日 地形測量開始。
- 9月4日 表土除去。
- 9月5日 掘り下げ。
- 9月17日 S B 1002検出。
- 9月19日 包含層掘り下げ完了。
- 10月11日 S B 1001検出。
- 10月22日 遺構検出状況写真撮影。遺構配置図作成。
- 10月31日 遺構完掘状況写真撮影。
- 11月1日 調査終了。

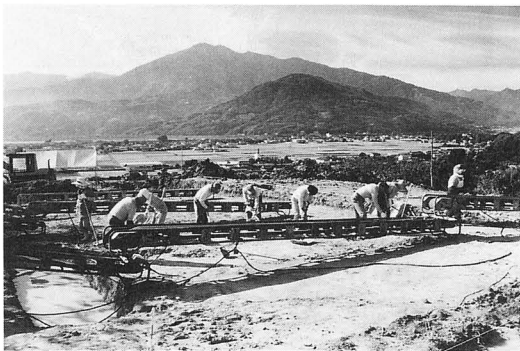


写真2 赤坂遺跡（Ⅲ）調査風景

## 2 遺跡の立地と環境

### (1) 地理的環境

四国東部に位置する徳島県は、山地が大部分を占めており、平野の部分は段丘・扇状地を含めても全県面積の二割ほどにすぎない。中央構造線と呼ばれる大断層に沿う吉野川下流域平野をはさんで北は阿讃山脈が連なり、南は四国山地・剣山地・海部山地がそれぞれ東西に併走しており、いずれの山地も西に高く東に低くなる傾向がある。また阿讃山脈と四国山地の二列の山脈の間を四国最大の河川である吉野川が直線的に東流して紀伊水道に注いでいる。その流域の北岸には扇状地が発達し、南岸には段丘地形がみられる。

赤坂遺跡（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）は、この吉野川左岸のほぼ中央部の阿波郡阿波町字赤坂に位置する。地形は中位砂礫台地であり、本流性の厚い砂礫層およびこれをおおう新規扇状地礫層よりなる。台地面は断層によって南北に階段状をなす他、南北方向の側刻崖を境として東西に階段状をなすこともある。北部には阿讃山脈が東西に連なり、徳島・香川県境をなす阿讃山脈の脊梁は西より北東へ連なっている。この山腹を蛇行削刻して小河川が数多く南北に流れており、日開谷川・曾江谷川といった先行谷が走り、山地から大量の土砂を流出させ、吉野川に押し出し多くの扇状地を形成する。その高位緩斜面の台地上には、多くの旧石器～古墳時代の遺跡が点在しており、3遺跡とも長峰台地と呼ばれる南北幅1～2km、海拔50～150mの緩やかな中位河岸段丘上に位置し、赤坂遺跡（Ⅰ）は標高65～66.5mに、赤坂遺跡（Ⅱ）は標高65m、赤坂遺跡（Ⅲ）は標高80～85mの丘陵先端部に位置している（第4図）。

阿波町の地質は白亜系和泉層群（内帯）からなる阿讃山脈とその阿讃山脈と吉野川との間にあって、第4系の種々の地層からなる平地との二つからできている。また中央構造線以南に分布する三波川変成帯（外帯）があり、切戸・岩津では三波川結晶片岩類の露頭がみられる。

### (2) 歴史的環境

本遺跡周辺には、旧石器～古墳時代の遺跡が数多く展開されている<sup>(1)</sup>（第4図）。

旧石器時代遺跡の展開は、主として吉野川北岸中流域、阿波町から上板町まで阿讃山脈裾に形成された扇状地に認められ、旧石器の宝庫となっている。

従来、阿波町で確認された旧石器資料・遺跡数は24地点を数える。しかしながら、これらはすべて表面採集によるものであった。

この中で四国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査により、阿波町内では日吉谷遺跡・桜ノ岡遺跡（Ⅰ）・（Ⅲ）の調査が行われ<sup>(2)</sup>、ナイフ形石器など多くの旧石器資料が出土したが、それでもなお層位的に安定した遺跡はごく僅かであり、石器組成を含め旧石器文化の実態の解明が今後の追求課題である。

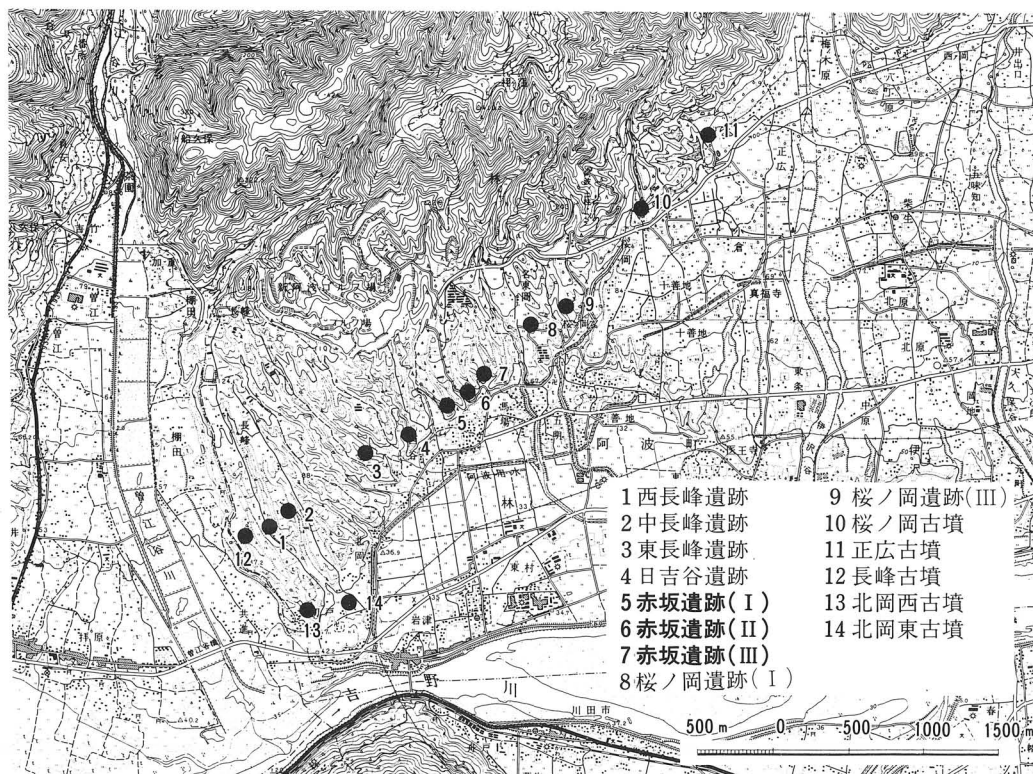
縄文時代の遺跡は、旧石器時代よりさらに希薄である。阿波町内では縄文時代の遺跡はまだ確認されておらず、表面採集された石鏃等があるのみである。

弥生時代では、曾江谷川左岸、段丘先端上に東西約2 kmの範囲に西長峰遺跡<sup>(3)</sup>、日吉谷遺跡、桜ノ岡遺跡（Ⅰ）など弥生時代中期中葉～後期初頭の遺跡群が形成されている。

一方「久勝町史」によると、明治15年頃、久勝地区の山王から銅鐸が出土したと伝えられているが、その出土地点および所在は不明である。

古墳時代では、阿波町内で確認されている古墳は、北岡西・東古墳、西林古墳、長峰古墳、桜ノ岡古墳、正広古墳、八つ塚古墳の七カ所で、他に古墳らしき形跡の認められるもの、伝承や地名から推定されるものが数カ所ある。

いずれも、古墳時代後期の6世紀から7世紀前半に造営されたと推定される小規模の横穴



第4図 赤坂遺跡（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）周辺の遺跡「脇町」「西赤谷」

式石室の円墳である。その多くは山麓丘陵部に位置している。

石室の構造については、北岡西・東古墳はいわゆる「段の塚穴型石室」であり、正広古墳は「忌部山型石室」の構造を呈している。本地域は、「段の塚穴型」・「忌部山型」の石室構造の異なる両グループが共存していることから、両グループの政治・文化の接点に当たるものとして、石室構造の違いの背後にある造宮氏族の領域を検討する上で重要である<sup>(4)</sup>。

古代～中世についてせ、文献以外の具体的な社会構造を解明するような調査事例は希薄である。文献などに7城の古城跡の存在が記されており、赤坂遺跡(Ⅱ)の所在する赤坂地区には西林城があったとされているが、それを実証する成果はあがっていない。

#### 注

- (1) 菅原康夫 『日本の古代遺跡 37 徳島』 保育社 1988
- (2) 徳島県埋蔵文化財センター 『徳島県埋蔵文化財センター年報V o 1. 2』 1991
- (3) 徳島県教育委員会 『西長峰遺跡現地説明会資料』 1990
- (4) 前掲注(1)

#### 参考文献

- 曾父江勝孝・野崎利夫 「第一編 自然」『阿波町史』 阿波町史編纂委員会 1979
- 岡 泰 『阿讃峠みち 地理・歴史編』 1985
- 香川県・徳島県 「国土調査 脇町」『阿讃山地開発地域 土地分類基本調査』 1977
- 東端節也・金岡慶男 「第二編 歴史」『阿波町史』 阿波町史編纂委員会 1979
- 天羽利夫・岡山真知子 『徳島の遺跡散歩』 徳島市立図書館 1985

### 3 調査成果

#### A 赤坂遺跡（I）

##### (1) 基本層序

赤坂遺跡（I）の基本層序は、次の通りである（第6図）。

1 にぶい黄褐色砂質土。ブドウ畑の耕作土である。当該地はブドウ畑であり、調査区全域にわたり確認される。

2 黄褐色砂質土。弥生～江戸時代の各期にわたる遺物包含層である。層厚は20cm前後であり、調査区の全域で確認される。出土する遺物の主体は弥生時代中期後半のものであり、古墳～江戸時代の出土遺物については戦後の農地開墾による削平などにより混入したものと思われる。石器はサヌカイト製の石鏃、結晶片岩製の石庖丁などが出土する。

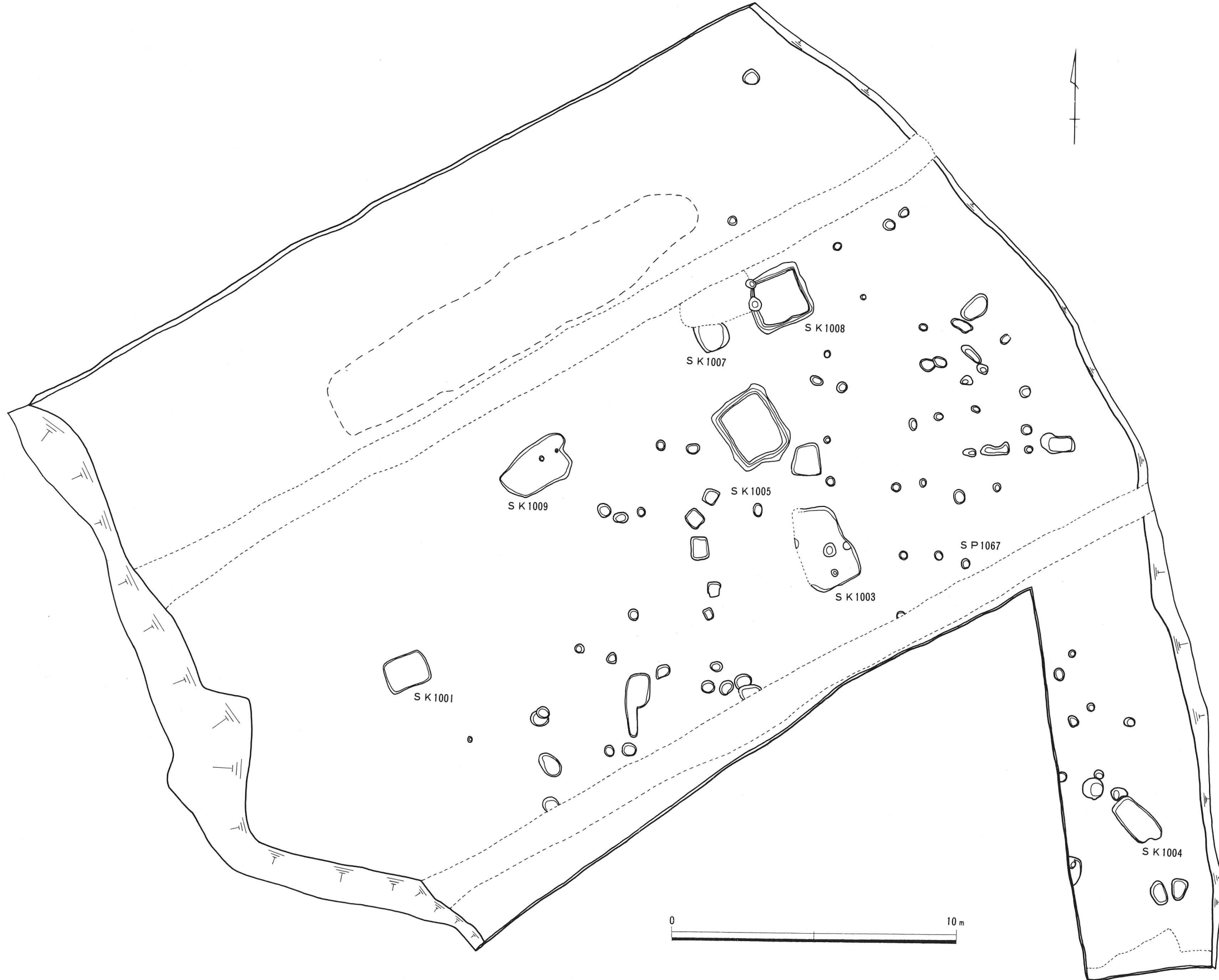
3 にぶい黄橙色砂質土。弥生時代の遺構面である。遺構は調査区南部及び東部に集中している。検出された遺構には、土坑、ピットなどがある。いずれも弥生時代中期後半を中心とした遺構である。遺物、遺構の重なりが少ないことから、弥生時代中期のごく短期間に存続していたものと思われる。

4 明黄褐色砂質土。いわゆる山土である。場所によって多少粘性が異なる。基本層序の確認ができる場所は、D～F－7列の南北セクション（東壁）とF列の東西セクション（南壁）である。おそらくこの基本層序は赤坂遺跡（I）のほぼ全域を覆っていたものと思われるが、戦後の農地開墾などの人為的活動にともない度重なる削平をうけている。地形測量図と現況より、ブドウ畑の開墾の際に丘陵地上方部（北側）を削平し、丘陵先端部（南側）および両端（谷側）へ客土していることがうかがえる。また調査区北側では、戦後まで行われていた瓦窯のにぶい黄橙色砂質土と暗赤褐色焼土層がみられる。

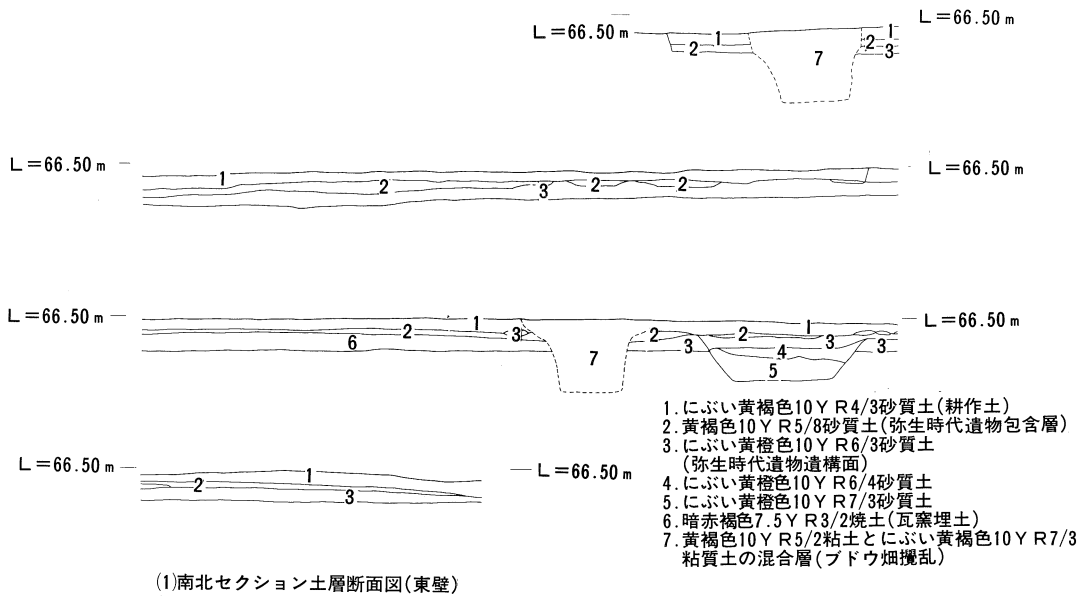
##### (2) 遺構と遺物

検出された遺構には土坑9、ピット75がある（第5図）。遺構は調査区南部および東部に集中しており、いずれも標高66m前後である。

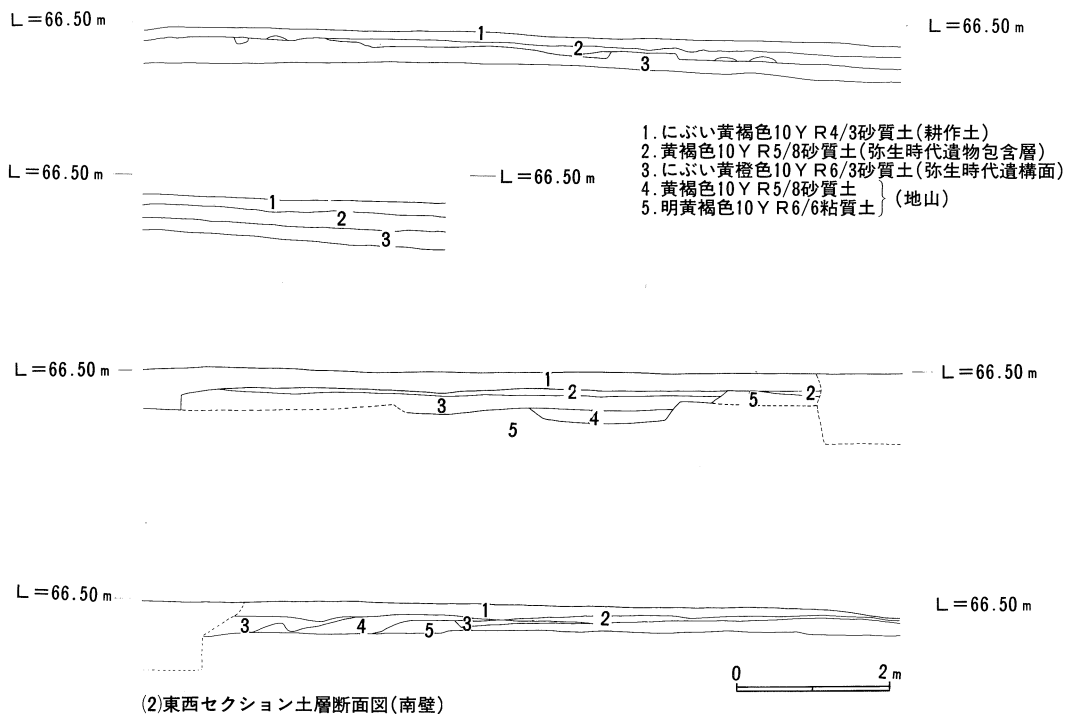
出土土器は全体に弥生時代中期後半から後期にかけての時期を示し、壺型土器、甕型土器等の口縁部に凹線文が施されている。土器類はいずれも小片となって出土しており、出土遺物で全体の器形の判明する個体は極めて少ない。



第5図 赤坂遺跡(I)遺構配置図



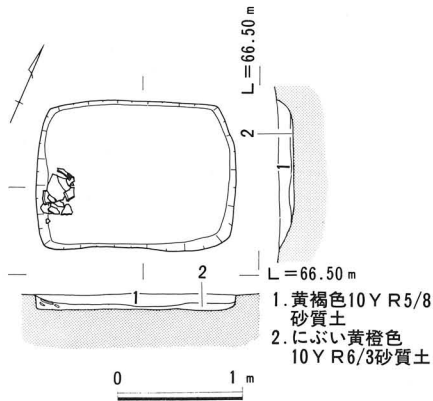
(1)南北セクション土層断面図(東壁)



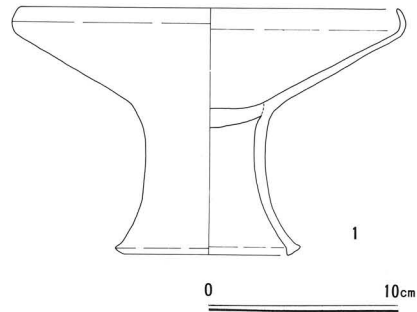
(2)東西セクション土層断面図(南壁)

第6図 赤坂遺跡(I)土層実測図





第7図 SK1001実測図



第8図 SK1001出土土器実測図

土坑1 (SK1001)

E-5グリッドで検出された土坑で、貯蔵穴と思われる。方形の平面プランを呈し、長軸160cm、短軸138cmの東西方向の主軸をもち、深さ12cmの浅い土坑である。断面形状は舟底状を呈する(第7図)。

埋土は2層に分層され、1 黄褐色砂質土、2 にぶい黄橙色砂質土である。底面から土器が壊れた状態で検出されたが、復元できる土器の個体数は少ない。底面には炭化物の薄い層が堆積<sup>(1)</sup>している。

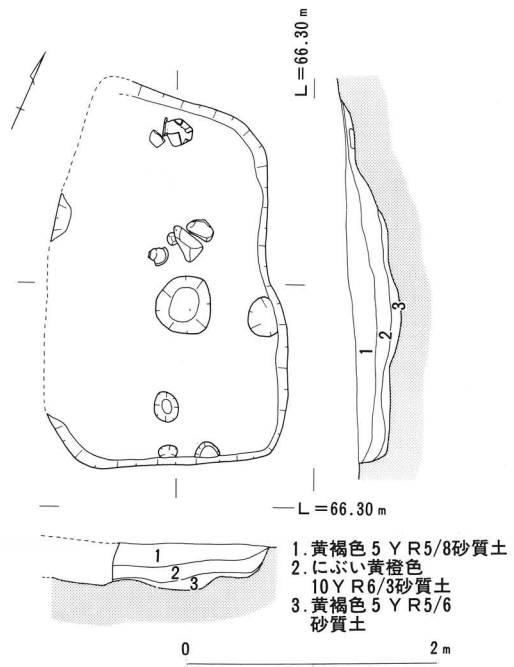
出土遺物

土器(第8図)

高杯形土器(1)が出土している。杯部は直線的に外方へのびる。口縁端部は内彎し、丸くおさめる。脚部はゆるやかに外下方へひろがり、端部を方形におさめる。杯部底面は円板充填技法が認められる。器体の内外面とも剥落が著しく、調整技法は不明である。

土坑3 (SK1003)

F-8グリッドで検出された方形の土坑である。長軸300cm、短軸180cm、深さ38cmを測る。断面形状は舟底形を呈すが、南北断面では北部分で一段



第9図 SK1003実測図

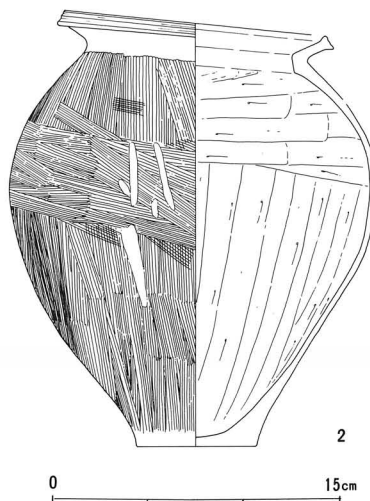
状の傾斜をもつ。主軸は南北方向である（第9図）。

埋土は3層に分層され、1 黄褐色砂質土、2 にぶい黄橙色砂質土、3 黄褐色砂質土となる。底面直上には炭化物の薄い層が堆積している。中央部よりに砂岩の礫が集中していた。底面直上より甕形土器が出土している。

#### 出土遺物

##### 土器（第10図）

甕形土器（2）。弥生時代中期末に属するものと思われる。口縁部が外反し、端部をわずかにつまみ上げる。口縁端部外面に2条の凹線文を施す。体部上位に最大径をもち、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は全体にハケが施され、体部上位と下位はタテハケ、体部中位はヨコハケである。底面はヘラミガキである。体部内面上部はヨコヘラケズリ、中～下部は上方向へタテヘラケズリである。



第10図 SK1003出土土器実測図

##### 石器（第11図）

叩き石（3）は砂岩の円礫を用いている。敲打痕はあまり顕著ではない。砥石（4）は砂岩の自然礫を用い、表面には研磨の使用痕による窪みがみられる。

#### 土坑4（SK1004）

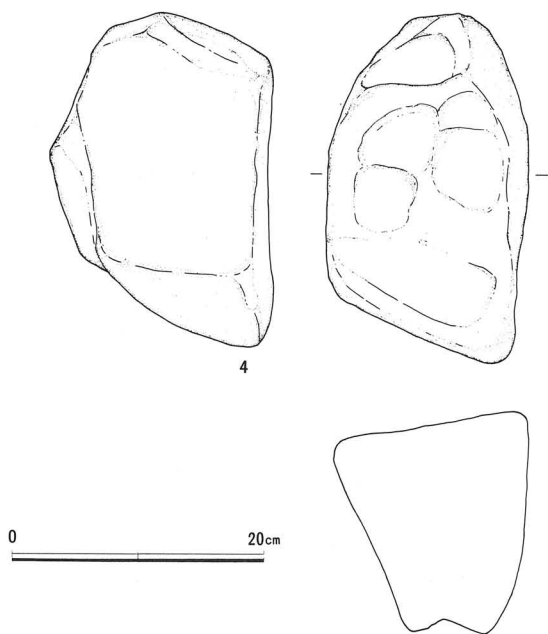
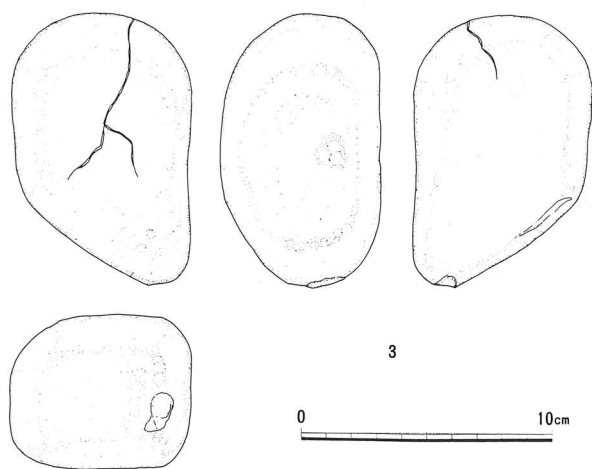
D-10グリッドで検出された不整形の土坑である。北東方向に主軸をもち、長軸100cm、短軸60cm、深さ26cmを測る。断面形状は舟底状を呈すが、南北断面では南部分で段状になっている（第12図）。

埋土は2層に分層され、1 黄褐色砂質土、2 にぶい黄橙色砂質土となる。他の土坑に比べ、出土遺物は少ない。底面直上で結晶片岩製の石庖丁が出土している。

#### 出土遺物

##### 石器（第13図）

薄手の剝片を素材とし、両側縁に調整加工を施し、直線状の刃部を作出した石庖丁で完形である（5）。

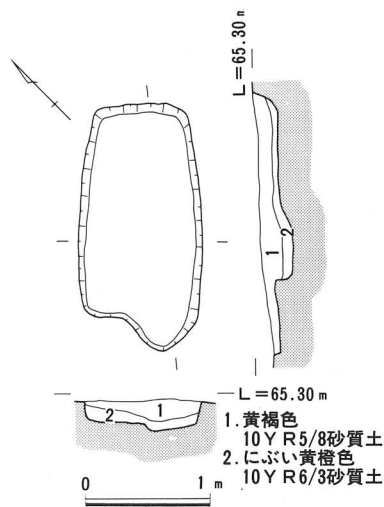


第11図 S K 1003出土石器実測図

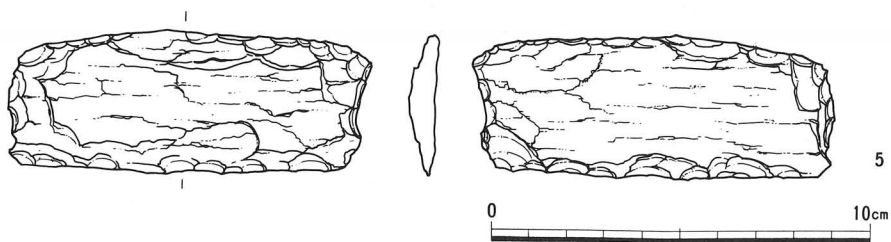
### 土坑 5 (S K 1005)

F・G-7グリッドで検出された方形の土坑である。南北方向の主軸をもち、長軸270cm、短軸21cm、深さ24cmを測る。断面形状は舟底状を呈す。底面には幅8~10cm、深さ5cm、断面形状U字形の周壁溝がめぐらされている(第14図)。

埋土は2層に分層され、1 黄褐色砂質土、2 にぶい黄橙色砂質土となる。また底面直上には薄い炭化物の層が堆積している。出土遺物は底面直上のものは少なく、埋土中より出土したものが多し。



第12図 S K 1004実測図



第13図 S K 1004出土石器実測図

### 出土遺物

#### 土器 (第15図)

壺形土器・甕形土器の口縁部などが出土している。

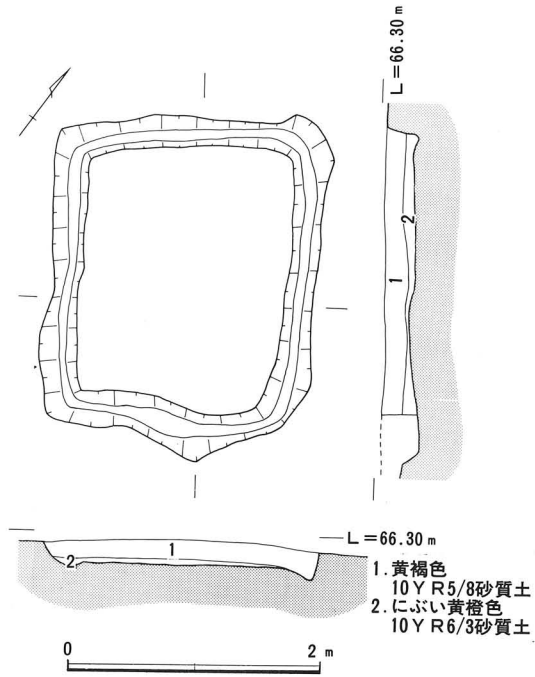
6は壺形土器の口~頸部である。口縁部は外反し、口縁端部をつまみあげている。頸部は直立気味に立ち上がる。調整は器面の剝落が著しく、不明である。

甕形土器(7~9)は口縁部が「く」の字状に外反する。7は口縁端部をつまみ上げて、丸くおさめる。口縁部外面には2条の凹線文が施される。口縁部外面タテハケのちヨコナデ、内面はヨコハケのちタテハケで調整する。8は口縁端部がわずかに上下に拡張する。口縁部外面には1条の凹線文が施されている。口縁~体部外面はナデ、口縁部内面はヨコナデで調整する。体部内面はヨコヘラケズリである。9は口縁端部を方形におさめる。調整技法は土器の内外面とも剝落が著しく、不明である。

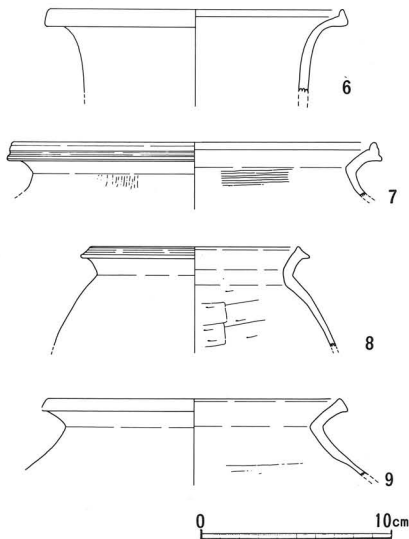
土坑 7 (SK1007)

G-7グリッドで検出された土坑である。遺構の一部がブドウ畑の濠堀りによる攪乱を受けており、全体の規模・形は不明であるが、残存部分で長軸80cm、短軸76cm、深さ28cmである。主軸方向は南北である(第16図)。

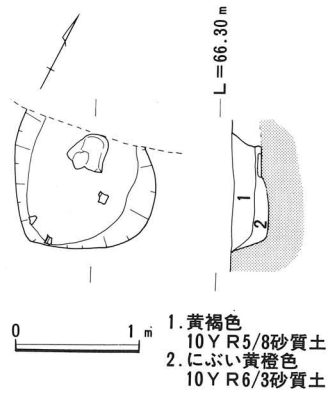
埋土は2層に分層され、  
1 黄褐色砂質土、2 に  
ぶい黄橙色砂質土である。  
出土遺物には、甕形土器の  
口縁部および底部などがあ  
る。



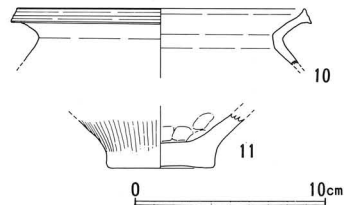
第14図 SK1005実測図



第15図 SK1005出土土器実測図



第16図 SK1007実測図



第17図 SK1007出土土器実測図

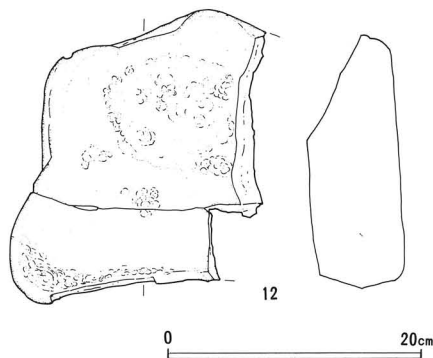
## 出土遺物

### 土器 (第17図)

甕形土器 (10・11) が出土している。10は口縁部である。口縁部は外反し、端部は上下に拡張する。口縁端部外面は2条の凹線文が施される。調整技法は口縁内外面ともヨコナデである。11は底部である。底部は直立し、内彎気味に立ち上がり、上方へのびる。底面はわずかに上げ底を呈する。底部外面はタテヘラミガキ、内面はユビオサエのちナデ、底面はナデで調整する。

### 石器 (第18図)

台石 (12)。被熱を受けており、一部赤褐色に変色している。砂岩の自然礫を用い、礫の表面中央部および稜部に激しい敲打痕がみられる。



### 土坑 8 (S K 1008)

G・H-7, 8グリッドで検出された  
方形の土坑である。長軸210cm、短軸200cmではほぼ方形を呈し、深さ28cmを測る。断面形状は舟底状を呈する。土坑5と同様に幅8~10cm、深さ5cm、断面形状U字形の周壁溝がめぐらされている (第19図)。

埋土は3層に分層され、1 黄褐色砂質土、2 にぶい黄橙色砂質土、3 黄褐色砂質土となる。また底面直上には薄い炭化物の堆積層がみられる。底面直上からは北西部のピットを中心にして、壺形土器や甕形土器など多量の遺物が出土している。

## 出土遺物

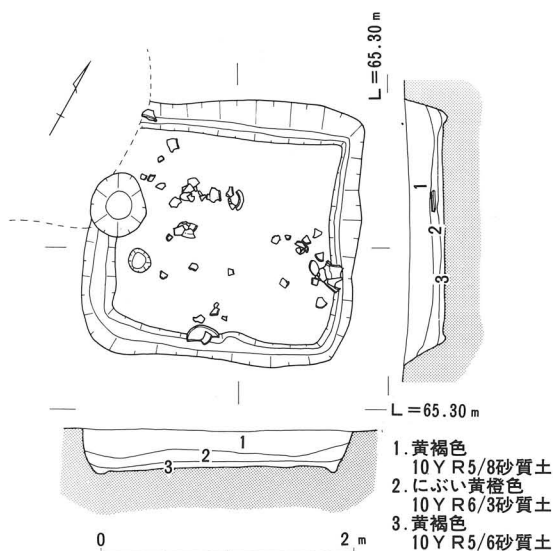
### 土器 (第20図)

甕形土器 (13~21) を中心として、鉢形土器 (22)、高杯形

第18図 S K 1007出土石器実測図

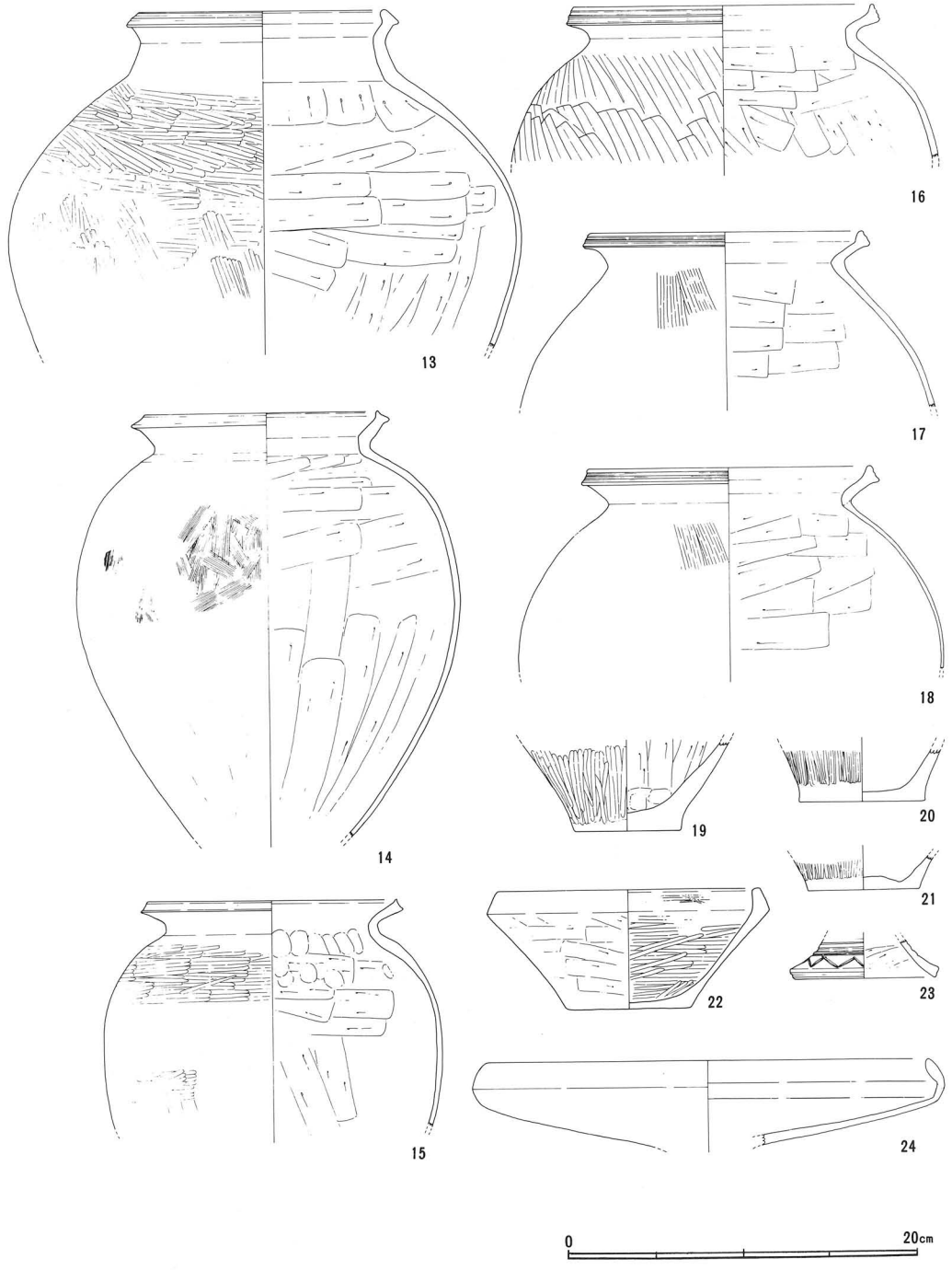
方形の土坑である。長軸210cm、短軸200cmではほぼ方形を呈し、深さ28cmを測る。断面形状は舟底状を呈する。土坑5と同様に幅8~10cm、深さ5cm、断面形状U字形の周壁溝がめぐらされている (第19図)。

埋土は3層に分層され、1 黄褐色砂質土、2 にぶい黄橙色砂質土、3 黄褐色砂質土となる。また底面直上には薄い炭化物の堆積層がみられる。底面直上からは北西部のピットを中心にして、壺形土器や甕形土器など多量の遺物が出土している。



1. 黄褐色  
10 Y R 5/8砂質土
2. にぶい黄橙色  
10 Y R 6/3砂質土
3. 黄褐色  
10 Y R 5/6砂質土

第19図 S K 1008実測図



第20図 S K 1008出土土器実測図

土器（23・24）のほか壺形土器などが出土している。

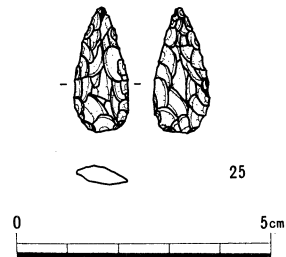
甕形土器はやや肩の張った体部を呈し、内面のヘラケズリは明瞭である。外面はナデまたはヘラミガキで調整している。口縁部は内外面をナデで仕上げる。13は器体の下半部を欠損するが、口縁部はわずかに内傾して立ち上がり、外反する。口縁端部は内側につまみ上げて丸くおさめ、上下に拡張する。口縁端部外面には2条の擬凹線文<sup>(2)</sup>を施す。体部中位上部に最大径がくる。14は底部を欠損するが、ほぼ完形である。口縁部は外反し、口縁端部を鋭くつまみ上げている。倒卵形の体部をもち、体部中央部に最大径がくる。体部中位外面に一部ハケが残存し、下位はイタナデを施す。15は口縁部がやや立ち上がり外反し、端部を方形状におさめる。口縁端部外面はやや凹みをもつ。体部上位に最大径がくる。体部外面は部分的にヨコヘラミガキを施す。内面は口縁部と体部との境にユビオサエが顕著である。16は口縁部がやや立ち上がり外反する。口縁端部を内側につまみ上げ平坦面を作出し、外面には3条の凹線文を施す。体部外面は幅1cm単位のイタナデの痕跡が顕著である。17・18は口縁部が「く」の字状に外反し、端部をつまみ上げ、丸くおさめる。体部外面に一部ハケ調整が残存する。18はやや肩の張った体部をもつ。17は口縁端部外面に2条の凹線文、18は3条の凹線文を施す。底部（19～21）の底面はいずれも平底である。19の体部はやや直立して上方に外反し、20・21はゆるやかに上方に外反する。底部外面はヘラミガキをおこなったのち底部最下部をヨコナデで仕上げる。

22は鉢形土器である。鉢体部は直線気味に外上方へひろがり、鉢口縁部は内彎する。口縁端部は方形状におさめる。

23・24は高杯形土器である。23は脚部で、脚裾部は外下方にひろがり、端部は方形状におさめる。脚裾部に3条の沈線文、その下に鋸歯状の沈線文が施される。脚端部には1条の沈線文が施される。24は杯部である。口縁部は直線的に外方へのびる。口縁端部は肥厚な粘土帯を貼り付けて作出し、上方へ立ち上がり内彎している。口縁端部は丸くおさめる。調整技法は土器表面の剥落が著しく不明である。

#### 石器（第21図）

サヌカイト製の石鏃である(25)。両面とも押圧剝離によって器体が整えられ、基部は円基式で丸みを帯びる。最大幅は器体の下位1/3にくる。



第21図 S K 1008出土石器実測図

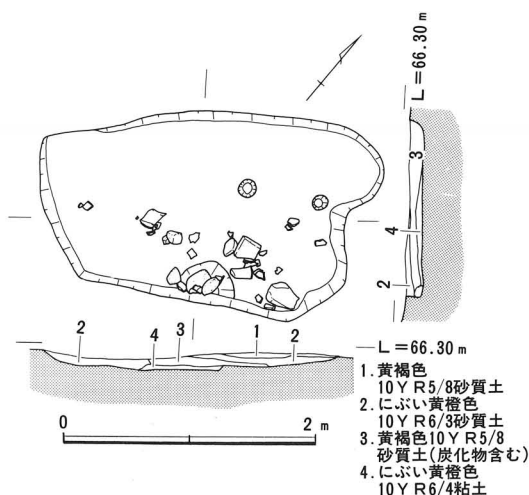
#### 土坑9（S K 1009）

F・G-6グリッドで検出された楕円形の土坑である。いびつな楕円形の平面プランを呈する。北東方向の主軸をもち、長軸244cm、短軸152cm、深さ14cmの浅い土坑である。断面形



状は舟底状を呈する（第22図）。

埋土は4層に分層され、1 黄褐色砂質土、2 にぶい黄橙色砂質土、3 黄褐色砂質土、4 にぶい黄褐色粘土となる。底面直上には薄い炭化物の層が堆積している。底面からは壺形土器、甕形土器などの土器片が出土している。完形のものではなく、投棄されたものと思われる。

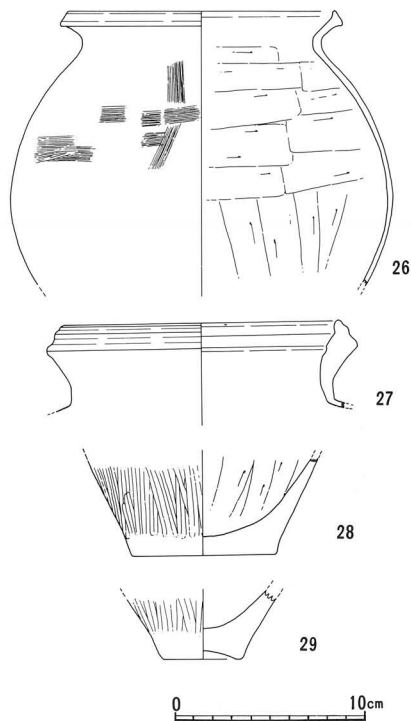


第22図 S K 1009実測図

### 出土遺物

#### 土器（第23図）

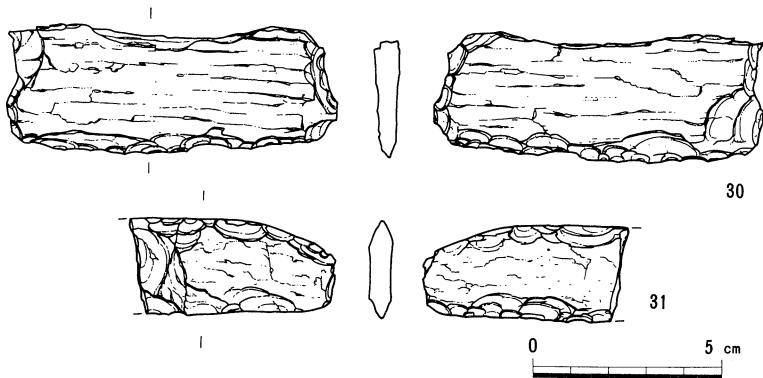
甕形土器(26~28)、壺形土器(29)が出土している。26は球形に近い体部を呈し、最大径が体部中央にくる。口縁部は外反し、端部をつまみあげる。口縁端部外面は平坦で、やや凹みをもつ。体部内面のヘラケズリは明瞭である。27は口縁部が直立気味に短く立ち上がり、端部は肥厚し外反する。口縁端部外面および口縁部内面に2条の凹線文を施す。28・29は体部が直線的に立ち上がり、上外方にのびる。28の底面は平底、29はあげ底である。



第23図 S K 1009出土土器実測図

#### ピット67（S P 1067）出土遺物（第24図）

ピット67からは結晶片岩製の石庖丁が2点出土している。30は完形品である。素材となる剥片の一侧縁に調整加工を施し刃部を作出している。31は器体の一部を欠損している。素材となる剥片の両側縁に刃部を作出している。



第24図 S P 1067出土石器実測図

### 遺物包含層出土の遺物

本遺跡では遺物包含層および表採の遺物も多量に出土している。出土遺物は各時代に渡っており、その中で図化し得る主な遺物を提示したい。

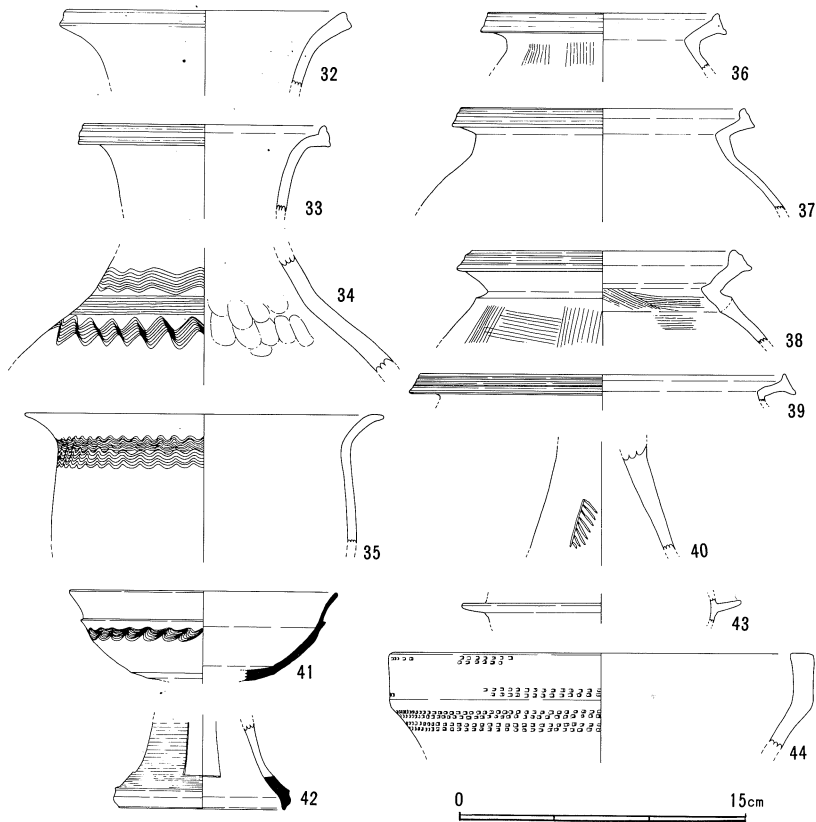
#### 土器（第25図）

##### 弥生時代

32・33は壺形土器の口縁部である。口縁部はゆるやかに外反する。32は口縁端部が、やや肥厚して方形状におさめ、端部外面に1条の凹線文が施される。33は口縁端部が上方に拡張し、端部外面に2条の凹線文が施される。32・33ともに内外面はヨコナデで調整する。34は壺形土器の体部である。頸部と体部の境に櫛描直線文、その上下に櫛描波状文が施されている。調整は内外面ともナデである。35～39は甕形土器である。35は如意形の口縁部を持ち、口縁部と体部との境に2種類の櫛描波状文が施されている。内外面ともヨコナデで調整する。36～39は口縁部が「く」の字状に外反する。36・38・39は口縁端部が上下に拡張し、39は端部を鋭くつまみ上げる。口縁端部外面に36は2条の擬凹線文、38は3条の凹線文、39は3条の擬凹線文が施されている。37は口縁端部が上方に拡張し、口縁端部外面に2条の凹線文が施されている。38は口縁部と体部の境に粘土紐痕がみられる。調整は36～39は口縁部内外面ともヨコナデである。38は体部内外面を部分的にハケで調整する。40は高杯の脚部で、外面は鋸歯状の文様がみられる。外面にはイタナデ、内面は無調整である。

##### 古墳時代

41は無蓋高杯の杯部である。口縁部はやや外反し、端部は丸みを持つ。口縁部と底部を分ける稜は鋭く、その下には波状文を巡らす。内外面は回転ナデ調整、底部は回転ヘラケズリ



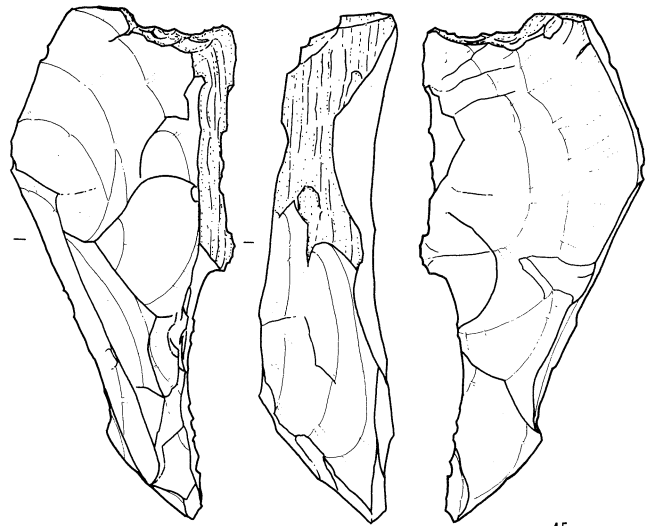
第25図 遺物包含層出土土器実測図

調整である。42は高杯の脚部で二方に透窓を有している。脚注部はやや外下方へひらき、裾部でさらに外下方へひらく。脚端部はやや肥厚して内彎する。脚端部の段は鋭く尖る。調整技法は脚部外面はカキ目調整、内面は回転ナデ調整である。脚部端部外面は回転ナデ調整である。

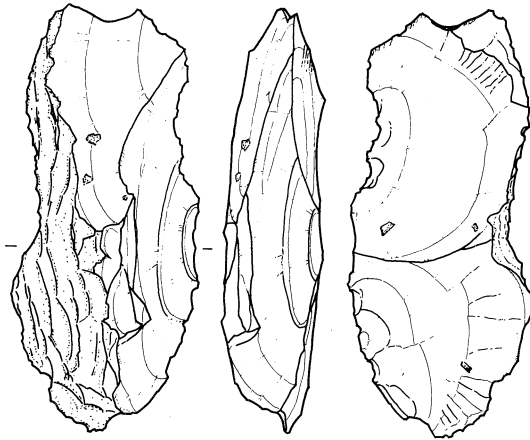
ともに陶邑編年TK-23段階<sup>(3)</sup>に位置付けられるものと思われる。

中～近世

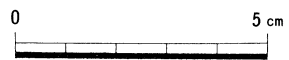
43は須恵質土器の羽釜である。鏝は口縁端部より1.3cmの幅で横方向にのびる。内外面をヨコナデで仕上げる。44は江戸時代のものと思われる焼き締め陶器の火鉢である。口縁部は段をもち、外面には櫛先状の工具による列点文が施されている。内外面および口縁端部をヨコナデで仕上げる。



45



46



第26图 遺物包含層出土石器実測图 (1)

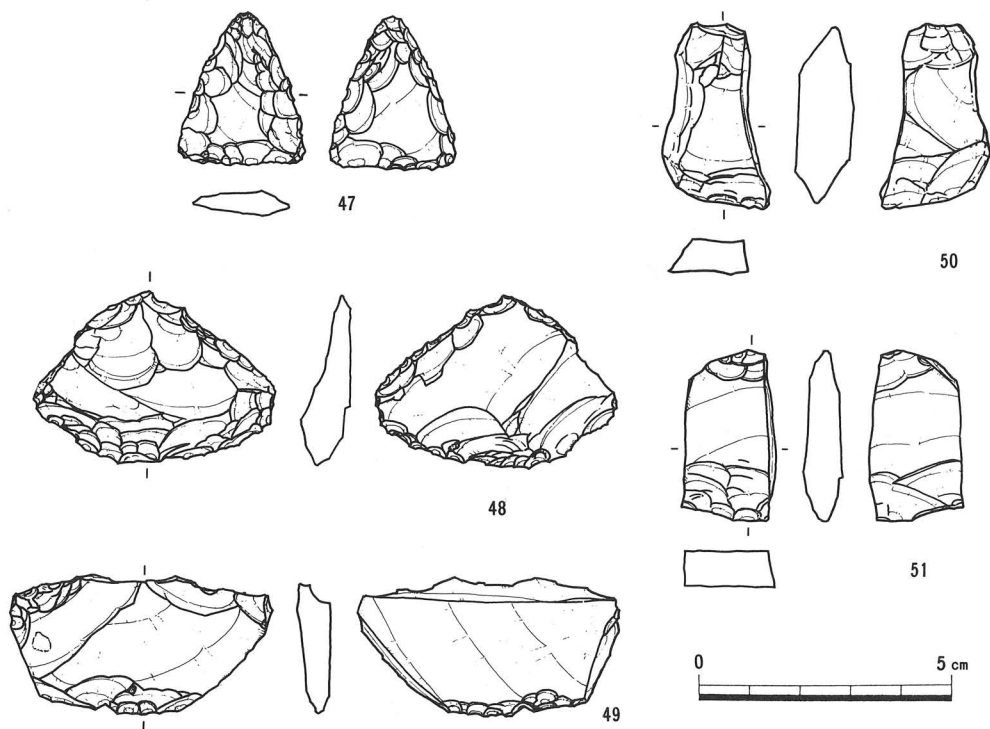
## 石器

### 旧石器時代（第26図）

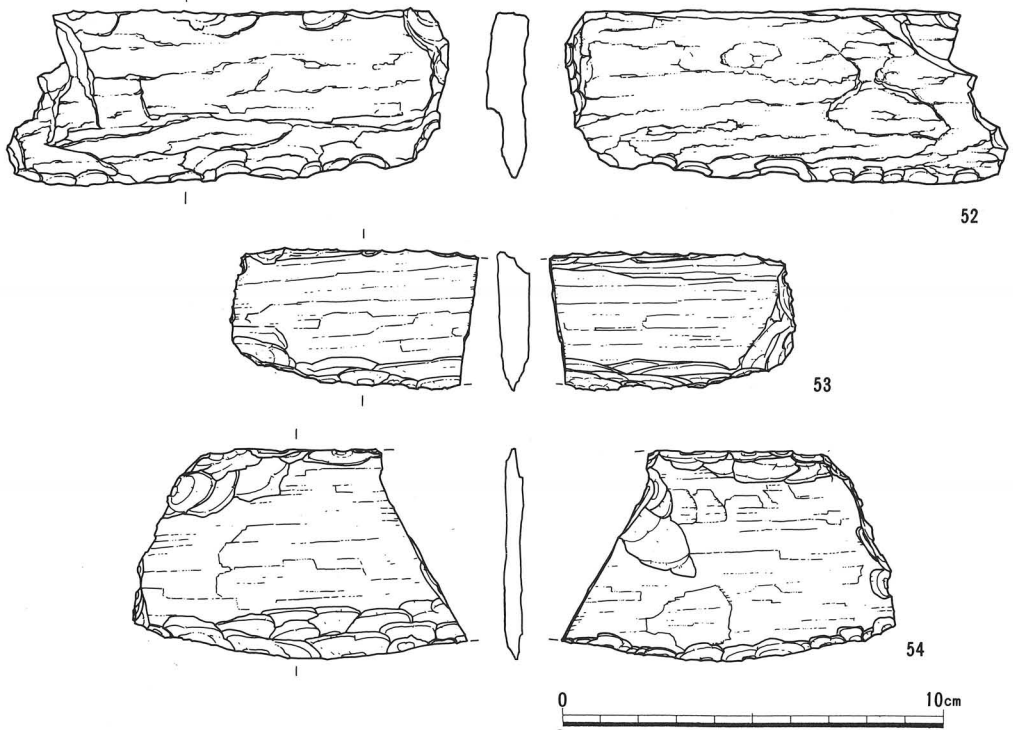
石核が2点出土している。石材はサヌカイトで風化が著しい。45は横長剥片石核である。打面転移が行われており、定形的な剥片剥離技術はみられない。46も横長剥片石核である。打面転移はみられず連続的に剥片を剥離している。

### 弥生時代（第27・28図）

47はサヌカイト製の石鏃である。両面とも調整加工が施されている。形態はやや細身の二等辺三角形であり、基部は平基式で直線状を呈する。48はサヌカイト製のスクレイパーである。幅広の剥片を素材とし、ほぼ全周縁に調整加工を施す。49は石庖丁である。サヌカイト製の幅広の剥片を素材として用い、剥片の両端および上部を折断し器形を整えている。粗雑な調整加工により刃部を作出している。50・51は楔形石器である。石材はサヌカイトである。ともに横長剥片の両端を折断し、器形を整えている。縦断面形は凹レンズ状を呈する（第27図）。52～54は結晶片岩製の石庖丁である（第28図）。いずれも横長の剥片を素材とし、両



第27図 遺物包含層出土石器実測図 (2)

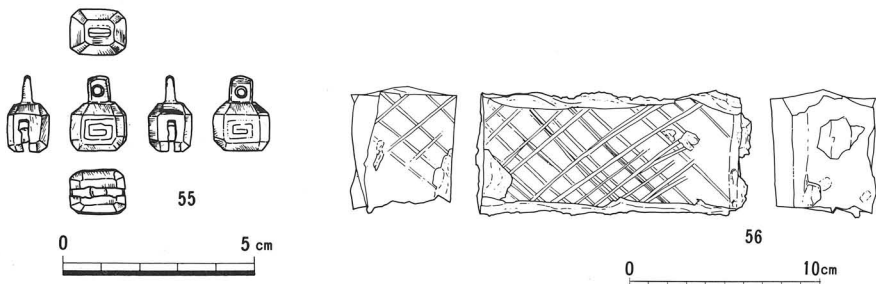


第28図 遺物包含層出土石器実測図 (3)

側縁に直線状の刃部を作出している。

その他の遺物 (第29図)

55は青銅製の鈴である。正面および裏面に雷文がみられる。56は磚である。表面および側面に格子目の模様がみられる。いずれも時期は不明であるが、近世 (江戸時代以降) のものと思われる。



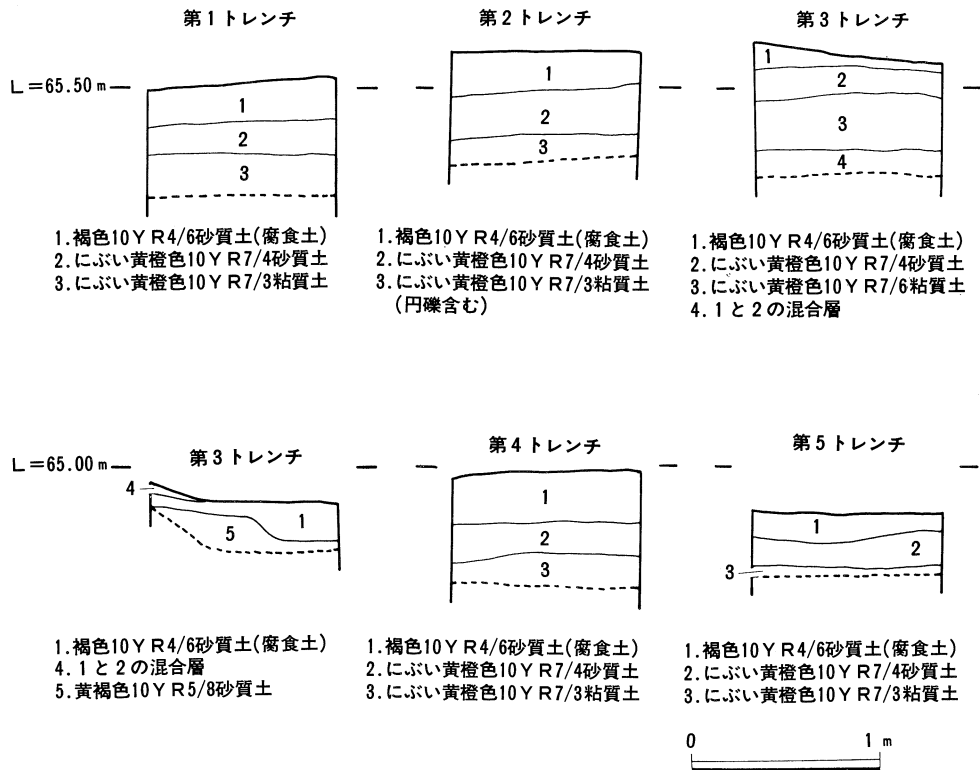
第29図 遺物包含層出土遺物実測図 (その他)

## B 赤坂遺跡（Ⅱ）

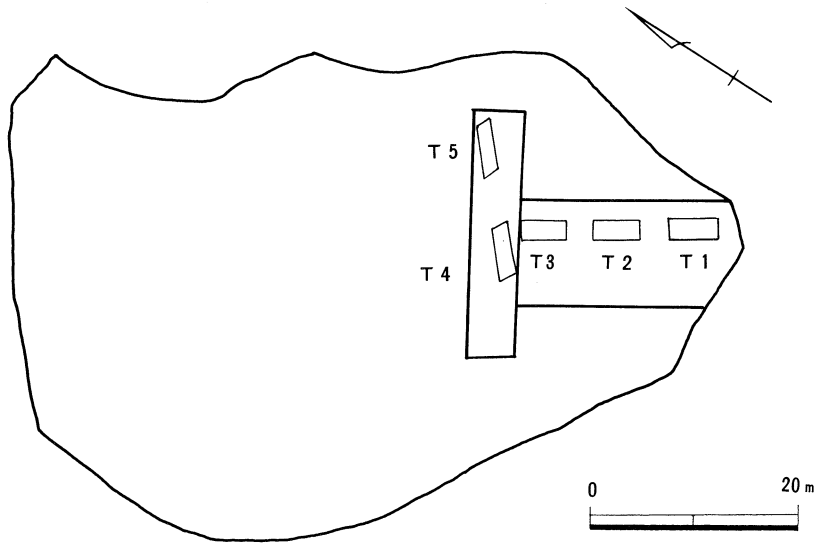
### (1) 基本層序

赤坂遺跡（Ⅱ）における基本層序は、1 褐色砂質土。腐食土である。調査区全域で確認される。2 にぶい黄橙色砂質土。遺物包含層である。層厚は20cm前後である。出土遺物にはサヌカイト製ナイフ形石器、チャート製石核、弥生土器片、須恵器杯蓋、瓦片など各期に渡っているが、出土点数は17点と少量である。3 にぶい黄橙色砂質粘土。地山。いわゆる山土であり、調査区全域で確認されている。場所により多少粘性が異なる（第30図）。この堆積は丘陵先端部に向かってやや傾斜して厚くなっている。

この基本的層序は調査区の全域を覆っていたと思われるが、調査区北半分は戦後の農地開墾による大幅な削平をうけている。この調査区現況から、自然地形を残している南半分に2カ所、削平されている北半分に2カ所、その境界部分に1カ所の合計5カ所に試掘トレンチを設定し、調査を行った（第31図）。



第30図 赤坂遺跡（Ⅱ）柱状土層実測図



第31図 赤坂遺跡（Ⅱ）トレンチ配置図

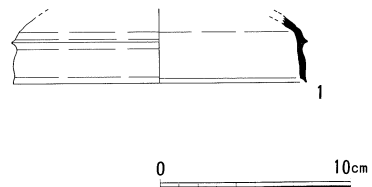
(2) 遺物

今回の調査では少量の遺物は出土したが、遺構および遺構面を検出することはできなかった。出土遺物にはサヌカイト製ナイフ形石器、チャート製石核、弥生土器片、須恵器杯蓋、瓦片など各期に渡っているが、出土点数は17点と少量でいずれも小片ばかりである。その中で図化し得る主な遺物を提示したい。

出土遺物

土器

1は第1トレンチの2層中より出土した須恵器の杯蓋である（第32図）。口縁部は直立し、端部は尖り内面に面を有する。天井部の稜は鋭く、断面形は三角形を呈する。調整技法は内外面ともナデである。小片であるため詳細は不明であるが、陶邑編年TK-43段階に位置付けられるものと思われる。

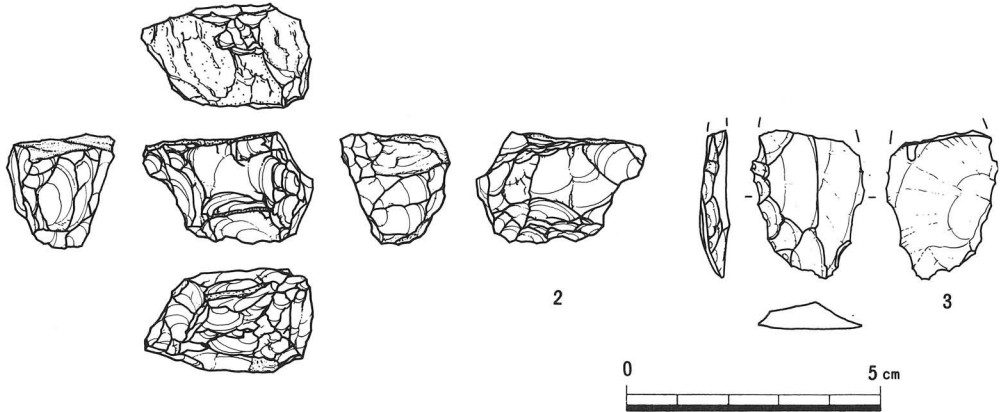


第32図 出土遺物実測図（杯蓋）



## 石器

旧石器時代の遺物が出土している（第33図）。



第33図 出土遺物実測図（旧石器）

2は第2トレンチの2層中より出土したチャート製の石核である。形態はサイコロ状を呈する。一部に自然面が残存している。打面転移により剥片が剥離されており、剥片剥離が進行するにしたがい小形化している。打面転移による交互剥離が施されているような石核は瀬戸内海の櫃石島、井島などで認められ、宮田山期<sup>(4)</sup>以後の所産と考えられている。3は第1トレンチの2層中より出土したナイフ形石器の下半部である。石材はサヌカイトである。横長で薄手の剥片を素材とし、裏面より打点側の一侧縁に調整加工を施している。これらの旧石器は瀬戸内海との関係でいえば、井島Iの段階に相当するものと思われる。

## C 赤坂遺跡（Ⅲ）

### (1) 基本層序

赤坂遺跡（Ⅲ）における基本層序は、次の通りである（第34図）。

1 にぶい黄褐色砂質土。ミカン畑の耕作土である。当該地はミカン畑であり、調査区全域に渡り確認される。1層からは江戸時代のものと思われる遺物が少量出土している。

2 黄褐色砂質土。弥生時代の遺物包含層である。層厚は20cm前後であるが、削平を受けており、安定した堆積はしていない。出土する遺物は弥生時代中期後半のものが主体である。土器は壺、甕類が出土しているが、完形のものはないいずれも破片ばかりである。また調整技法も土器表面の剥落が著しく、ほとんど不明である。石器はサヌカイト製の石鏃、スクレ

イパー、楔形石器、石錐や結晶片岩製石庖丁などが出土する。

3 明黄褐色砂質土。弥生時代の遺構面である。遺構は調査区東部および西部で集中して検出されている。検出された遺構には、住居跡、溝、土坑、ピットなどがある。いずれも弥生時代中期後半を中心とした遺構である。遺構内からは弥生土器の他、サヌカイト製の石鏃、スクレイパー、楔形石器、石錐、結晶片岩製の石庖丁や磨製柱状片刃石斧、大型の磨製蛤刃石斧など多種多彩な石器が出土している。住居跡は調査区東側の斜面で検出されている。遺構の重なりは少なく、弥生時代中期のごく短期間に存続していた小集落と考えられる。

4 黄橙色粘性砂質土。地山。いわゆる山土である。場所によって多少粘性が異なる。

1～3層はいずれも遺物を包含している。この基本層序は赤坂遺跡（Ⅲ）の調査区のほぼ全域を覆っている。しかし、後世の農地開墾などの人為的活動にともない削平をうけている場所も多く、特に調査区東側ではその影響が大である。

## (2) 遺構と遺物

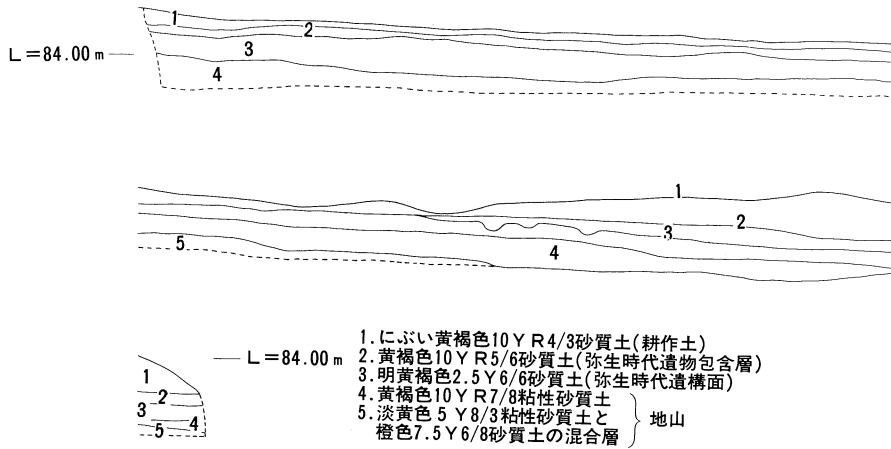
元年度に行われた1次調査では遺構を検出することができなかったが、2年度の2次調査では弥生時代中期後半の遺構を検出することができた。検出された遺構には竪穴住居跡2、溝2、土坑5、ピット95がある（第35図）。遺構は調査区の東部および西部で集中して見られ、いずれも標高84.5m前後に位置する。

### 1号住居跡（S B 1001）

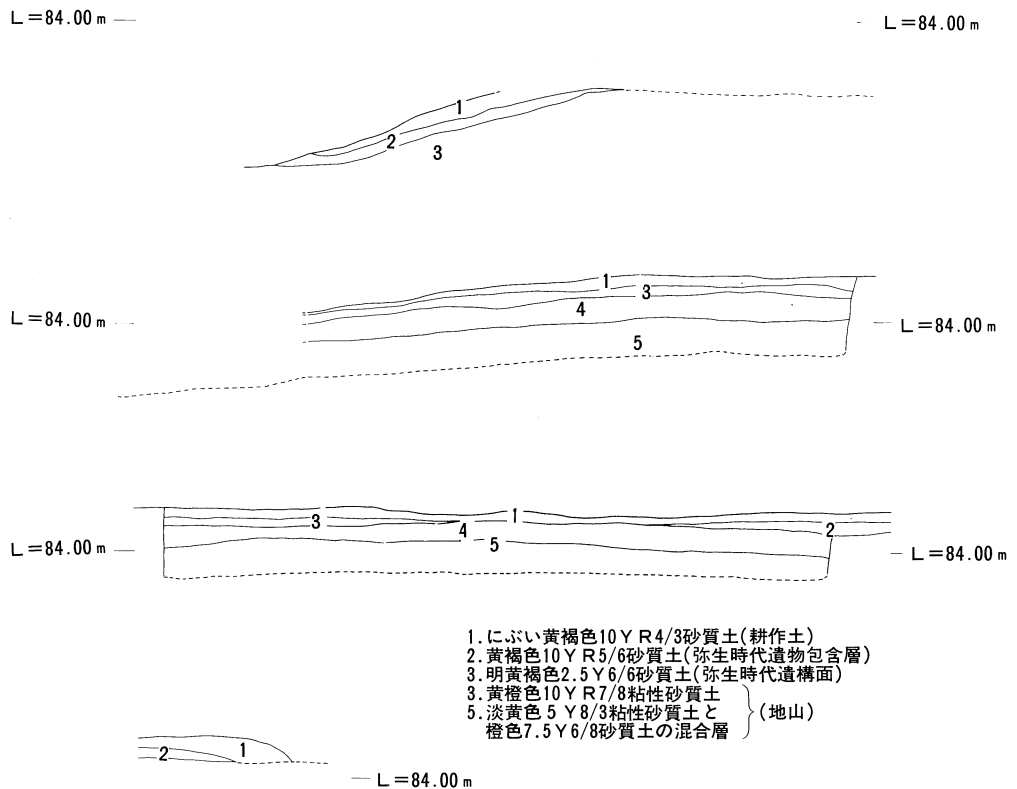
I-14・15グリッドで検出された円形の竪穴住居跡である（第36図）。調査区東端に位置し、一部調査区外へ伸びている。東側は農地の開墾による削平をうけており、遺構全体の規模は不明である。本住居跡は約1/2程度が遺存している。復元径約5mを測り、床面までの深さは18cmである。住居跡内の堆積土は、黄褐色砂質土の一層である。

床面より、深さ20～30cmのピットが7カ所検出された。主柱穴と思われるP1とP2の柱心間距離は約1.4mを測り、6～8本主柱の構造と推定される。周壁溝は検出されなかった。また炉跡は確認できなかった。住居の南端には長方形の10cm程度の浅い落ち込みがあるが、これが住居に伴うものであるのか、その性格は不明である。

床面の遺物には土器類は壺形土器の底部、甕形土器の体部などが出土しているが、いずれも完形復元できるものではなく、また土器表面の剝落が著しく詳細は不明である。石器類は砥石、局部磨製石ノミ、磨製柱状片刃石斧などが出土している。覆土の出土遺物には弥生土器片、サヌカイト製の楔形石器、スクレイパー、結晶片岩製石庖丁などがある。



(1)南北セクション土層断面図(東壁)



(2)東西セクション土層断面図(南壁)

第34図 赤坂遺跡(Ⅲ)土層実測図

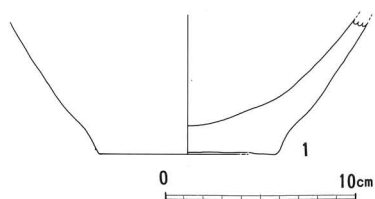


第35図 赤坂遺跡(Ⅲ)遺構配置図

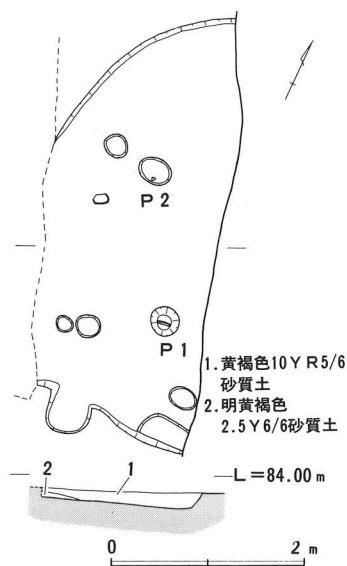
## 出土遺物

### 土器 (第37図)

数点の土器が出土しているが、いずれも破片であり、実測可能なものは1点のみである。1は壺形土器の底部である。底面は平底であり、上外方へ体部がのびている。調整技法は土器の内外面とも剥落が著しく不明である。



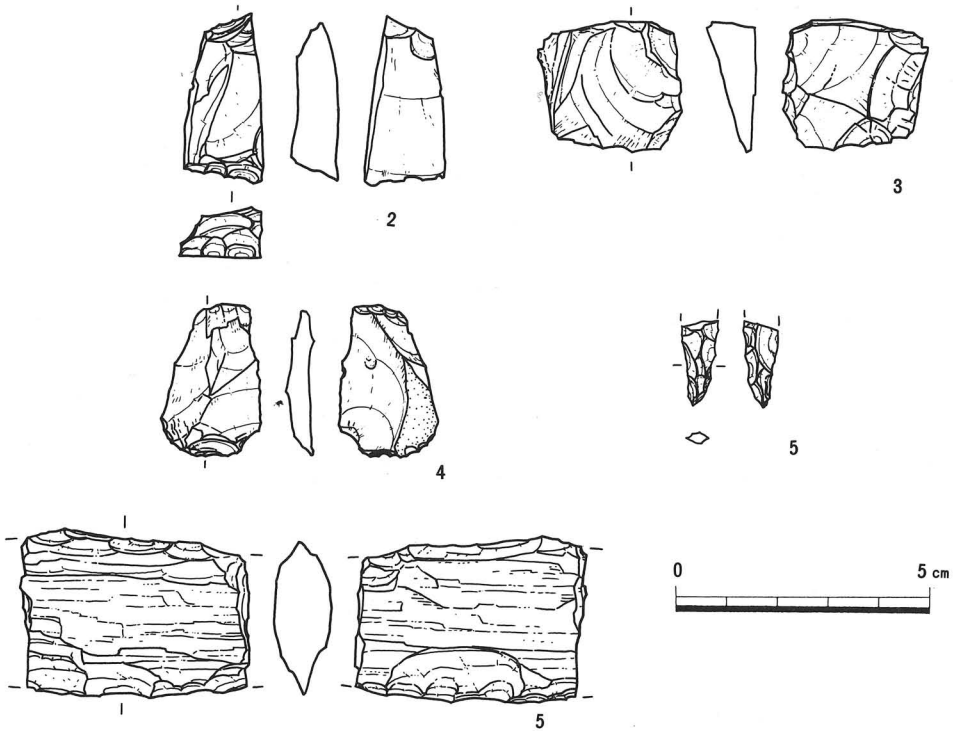
第37図 S B 1001出土土器実測図



第36図 S B 1001実測図

### 石器 (第38・39・40図)

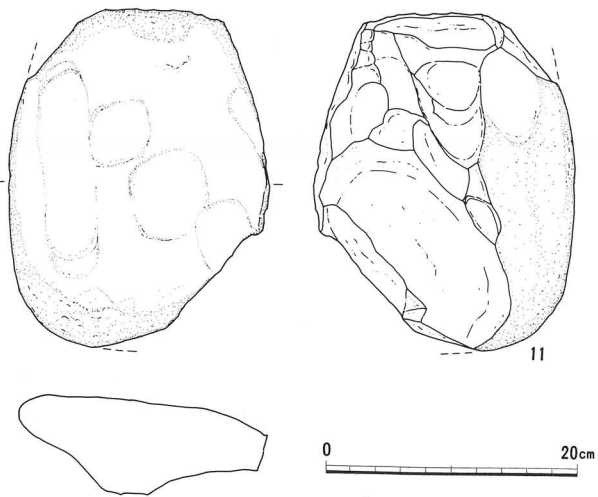
1号住居跡からは多数の石器が出土している。2はサヌカイト製のスクレイパーである。厚手の横長剥片を素材とし、両端を折断して器形を整えている。剥片の端部に調整加工を施し刃部を作出する。3・4はサヌカイト製の楔形石器である。3は厚手の横長剥片を素材とし、折断によって器形を整えている。縦断面形は三角形を呈する。4は両極打法によって素材となる剥片を作出している。一部に自然面が残存する。5は石錐の先端部である。石材はサヌカイトである。細かな調整加工により、鋭い刃部を作出している。横断面形は菱形を呈する。6は片岩製の石庖丁で両端は欠損している。厚手の剥片を素材とし、一側縁に刃部を作出している。縦断面形は凸レンズ状を呈する(第38図)。7は局部磨製石ノミである。石材は片岩である。厚手の剥片を素材とし、片岩の片理面と直交する表裏面を研磨している。横断面は四角形である。8は片岩製の磨製ノミ状石器である。器体全面を研磨している。先端部は両面とも丁寧に研磨されており、鋭利な刃部を形成している。9は片岩製の磨製石斧である。裏面側は欠損している。全面を研磨しており、正面は短軸方向に、側面は長軸方向に研磨している。10は打製の柱状片刃石斧である。石材は結晶片岩を用いている。体部は激しい敲打痕が顕著にみられ、石斧の未製品と思われる(第40図)。11は砥石である。被熱をうけており、一部赤褐色に変色している。砂岩の自然礫を用い、表面には研磨の使用痕による直径3 cm程度の窪みがみられる(第39図)。



第38図 S B 1001出土石器実測図 (1)

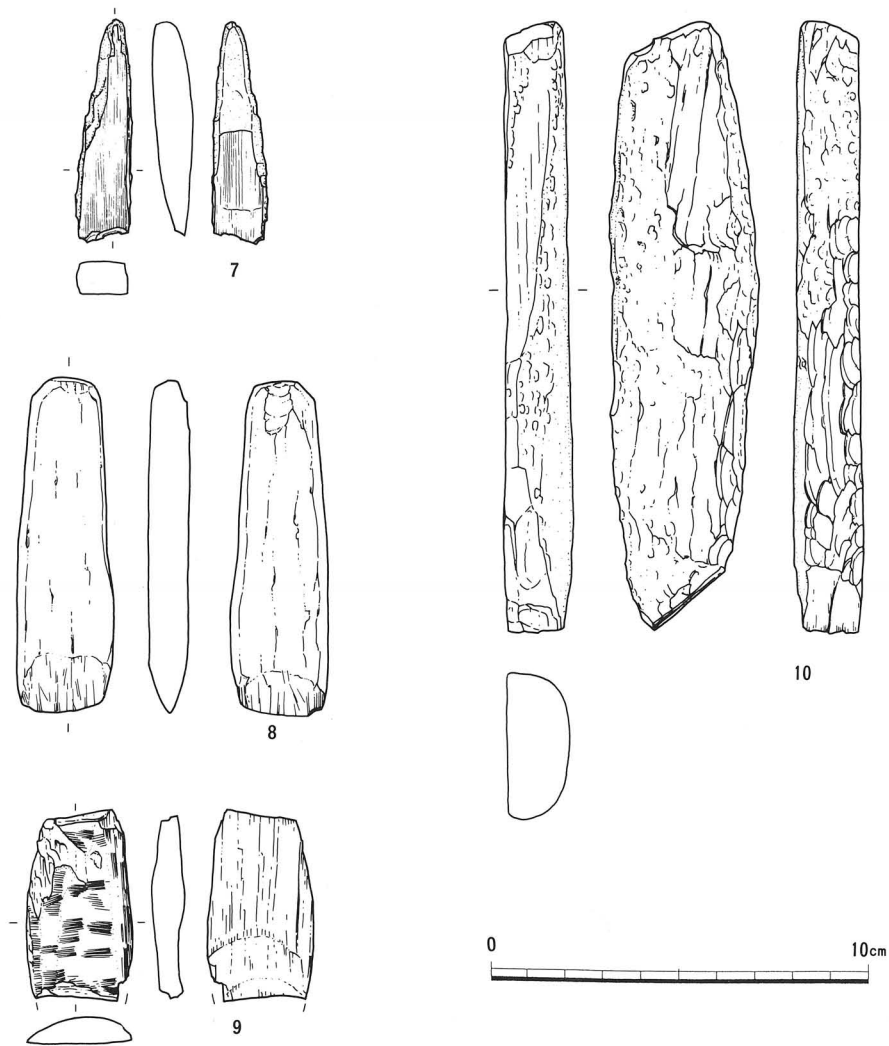
2号住居跡 (S B 1002)

G, H-17, 18グリッド  
 で検出された不整円の平面  
 プランをもつ円形の竪穴住  
 居跡である(第41図)。調  
 査区の東端に位置し、遺構  
 の一部が調査区外にかっ  
 ているため、全体の規模は  
 不明である。復元径約7m  
 を測り、床面までの深さは  
 25cmである。住居跡内の埋  
 積土は、1 灰黄褐色砂質  
 土、2 黄褐色砂質土であ  
 る。



第39図 S B 1001出土石器実測図 (2)

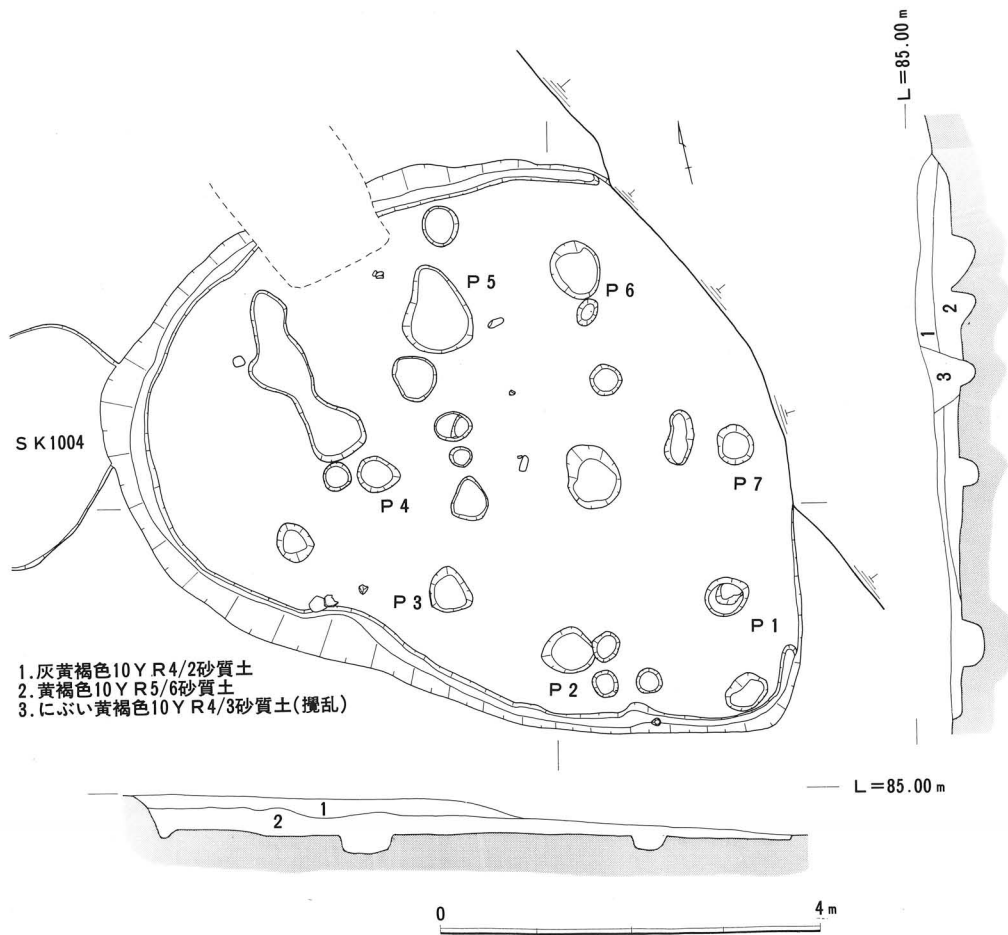
床面では24カ所の柱穴が



第40図 S B 1001出土石器実測図 (3)

検出され、このうち支柱穴は7本であると思われる。各柱心間距離はP 1 - P 2 : 1.4m、P 2 - P 3 : 1.5m、P 3 - P 4 : 1.4m、P 4 - P 5 : 1.6m、P 5 - P 6 : 1.6m、P 6 - P 7 : 2.4m、P 7 - P 1 : 1.4mを測り、8本支柱の構造と推定される。周壁溝は幅15~20cm、深さ5~15cm、断面形U字状を呈する浅いものが、住居周縁にめぐらされている。また炉跡は確認できなかった。

床面出土の遺物には、土器類では壺形土器の底部、甕形土器の体~底部などが出土しているが、いずれも完形復元できるものではなく、また土器表面の剝落が著しく詳細は不明であ



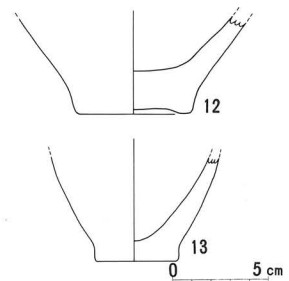
第41図 SB1002実測図

る。石器類はサヌカイト製の石鏃、楔形石器、スクレイパーのほか結晶片岩製の石庖丁、太形の蛤刃石斧、磨石、砥石など多種多様である。覆土からは弥生土器片、サヌカイト製の石鏃、楔形石器、スクレイパー、結晶片岩製の石庖丁などが出土している。

出土遺物

土器（第42図）

弥生土器は数点出土しているが、いずれも破片ばかりであり、実測可能なものは2点しかない。12は壺形土器の底部で、輪台技法によって制作されている。底面はドーナツ状の上げ底（5）を呈し、体部はやや直立して上外方にのびる。底面外部および底部内外面ともナデ調整である。13は甕形土器の



第42図 SB1002出土土器実測図

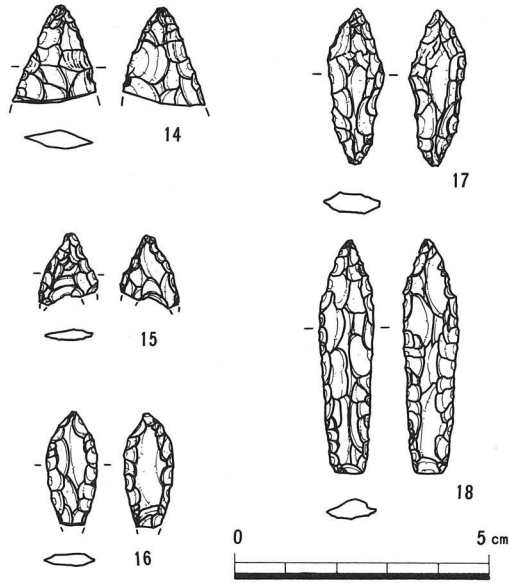
体～底部である。底面は平底で、体部は底面から直立し、やや内彎しながら上外方へのび



る。外面はナデ、内面はヘラケズリのち下部をナデ調整で仕上げる。

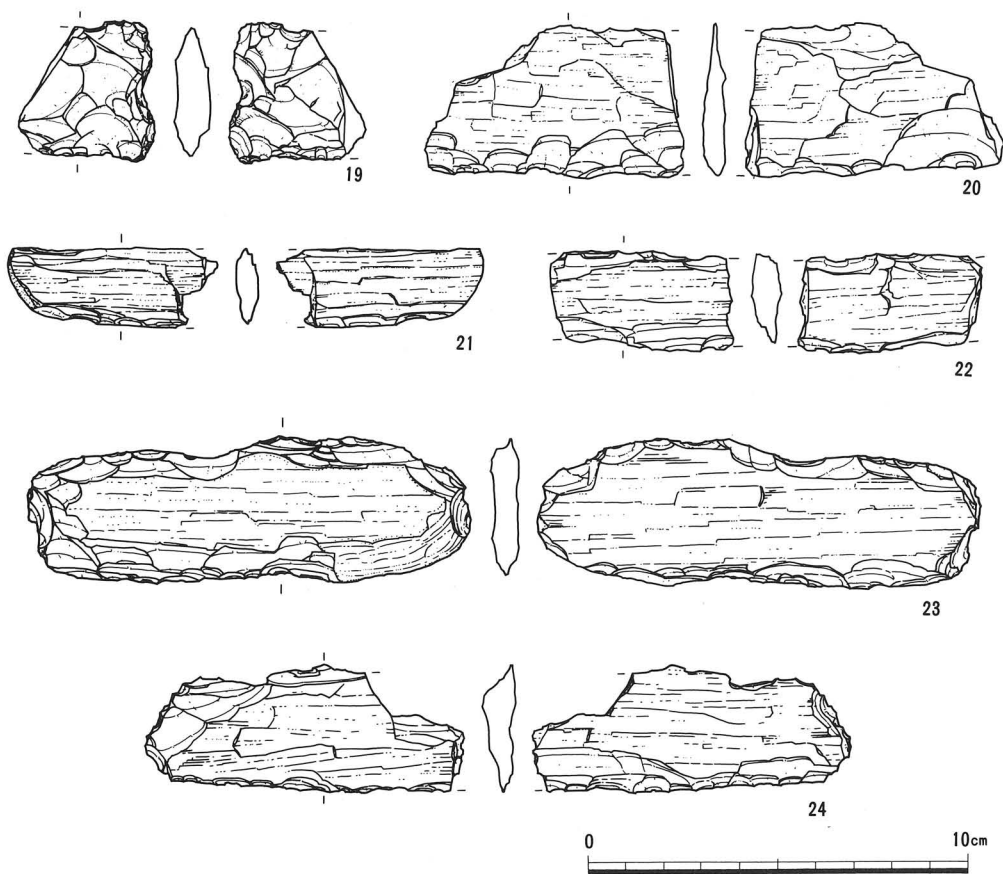
石器 (第43・44・45・46・47  
図)

サヌカイト製の石鏃(14~18)  
である。いずれも表裏面とも細  
かな押圧剝離による調整加工が  
施される。14は石鏃の先端部  
である。横断面形は凹レンズ状  
を呈する。15は小型の石鏃  
である。基部は無茎の凹基式  
である。16は無茎の石鏃  
である。最大幅は器体の上半  
部1/3のところにくる。17  
は無茎で細身の菱形を呈す  
る。最大幅は器体上半部1/3  
のところにあり、肩が張った  
形状を示す。18は細身の柳葉



第43図 S B 1002出土石器実測図 (1)

をなす無茎の石鏃である。最大幅は器体の上半部1/4のところにある(第43図)。石庖丁(19~24)である。いずれも薄手で横長の剝片を素材としており、19はサヌカイト、20~24は結晶片岩を石材として用いている。完形品は23のみであり、19~22・24はいずれも器体の一部を欠損する。19・22・23は素材となる剝片の両側縁に、20・21・24は一侧縁に細かな調整加工を施し、直線状の刃部を作出している。21・23は自然面が一部残存している(第44図)。サヌカイト製のスクレイパー(25~29)である。25は厚手の横長剝片の打点側を折断し、器形を整えている。剝片の端部に急斜度な調整加工を施し、刃部を作出している。26~29は器体の一部を欠損する。26は薄手で横長の剝片を素材とし、縁辺に刃部を作出している。27は薄手で横長の剝片を素材とし、全周にわたって調整加工を施し、刃部を作出している。28は厚手の剝片を素材としている。全周にわたって調整加工を施し、刃部を作出している。29は薄手で横長の剝片を素材と、端部に鋸歯状の刃部を作出している。30はサヌカイト製の楔形石器である。両極打法によって剝離された厚手の剝片を折断し、器形を整えている。縦断面形は凸レンズ状を呈する。31はU. F. である。厚手の横長剝片を素材とし、石材はサヌカイトである。端部に使用痕がみられる。風化が著しく旧石器時代のものであると思われる(第45図)。磨製石斧(32・33)である。32は大型蛤刃石斧である。横断面形は楕円形を呈する。砂質片岩の礫を素材として用いている。基部側半分を欠損する。33は刃部を一部欠損する。



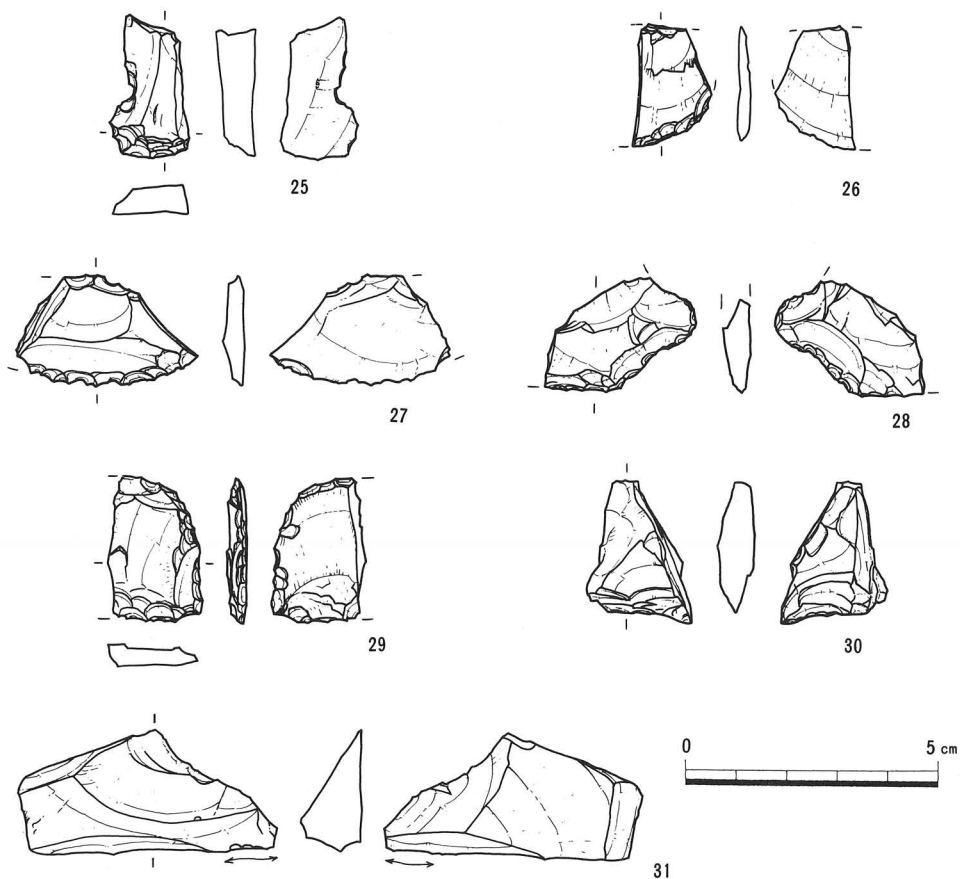
第44図 S B 1002出土石器実測図 (2)

片岩の礫を素材とし、器体全面を長軸方向に研磨している。一部敲打痕があり叩石としても使用していたものと思われる。34は磨石である。偏平な砂岩の楕円礫を用い、ほぼ全面に長軸方面に擦痕がみられる。また器体の両側面および正面には、叩石としても使用されたとと思われる激しい敲打痕がみられる。35は偏平な砂岩の礫を用いた砥石である。表裏面とも研磨による使用痕がみられ、直径2～3cmの凹みが切り合っている（第46図）。

#### 土坑2 (S K 1002)

F-19・20で検出された楕円形の土坑である。遺構の一部は調査区外にかかっており、全体の規模は不明である。残存部分で長軸208cm、深さ28cmを測る（第47図）。

埋土は黄褐色砂質土の1層である。出土遺物には壺形土器や片岩製の石庖丁などがある。



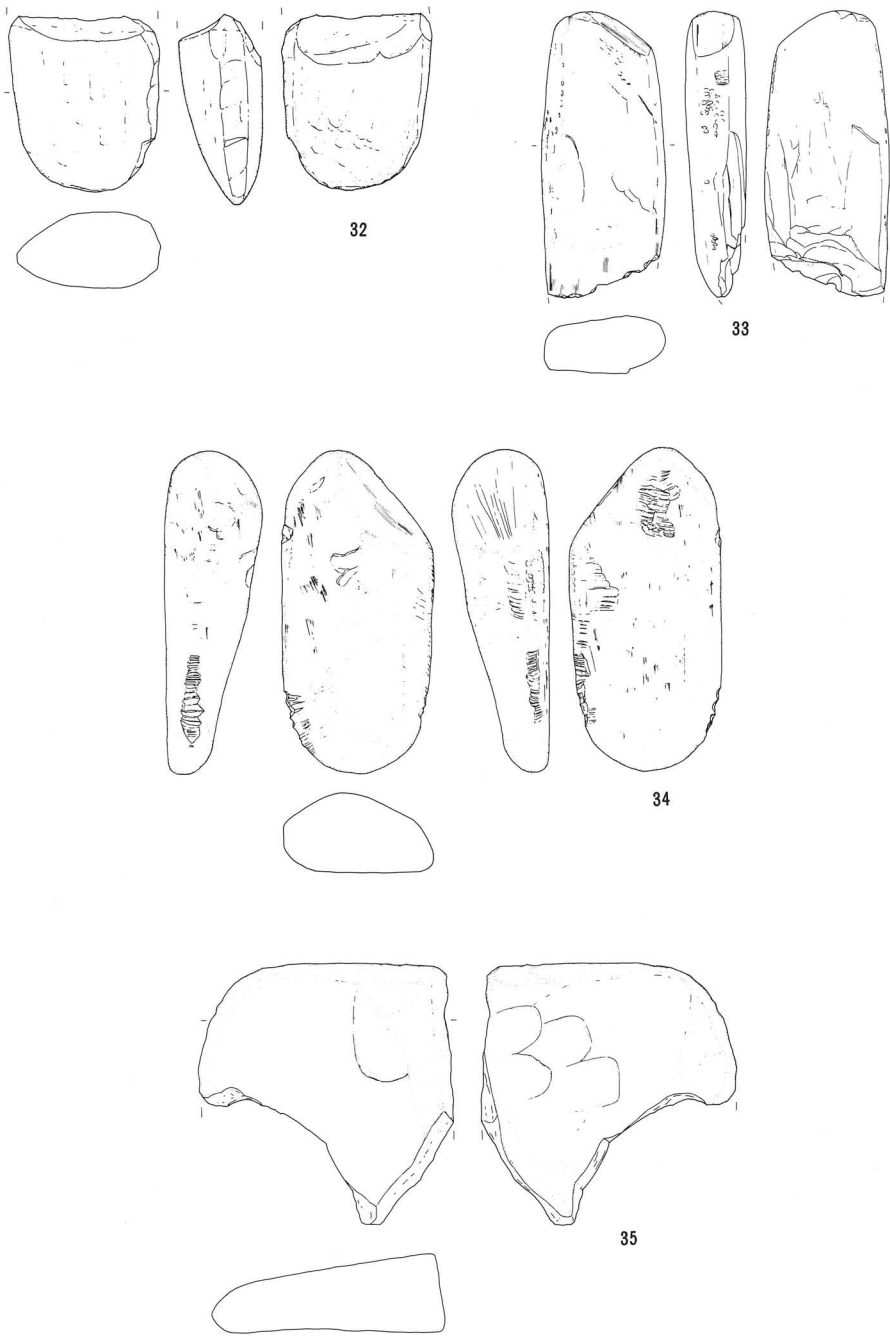
第45図 S B 1002出土石器実測図 (3)

出土遺物

土器 (第48図)

土坑2からは壺形土器(36~40)のほか甕形土器等が出土しているが、いずれも破片ばかりであり、実測可能なものは少ない。

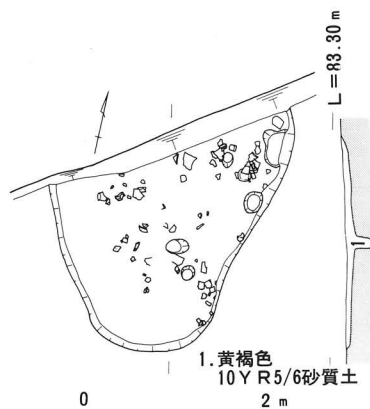
36は口縁~頸部である。ゆるやかに外方へ開き、口縁端部は方形状におさめている。土器の内外面とも剥落が著しく、調整は不明である。37は体~底部である。底面はわずかにあげ底であり、体部は底部よりやや内彎しながら上方へひろがっている。体部外面の調整はナデ、内面は剥落が著しく不明である。38~40は底部で内外面ともナデ調整する。38は平底、39はわずかにあげ底である。38の体部は底面よりやや内彎して外上方に、39は底面より直立し上外方へのびる。40は輪台技法によって製作されている。底面はドーナツ状のあげ底を呈し、体部は底面より、外上方へひろがる。



第46图 S B 1002出土石器实测图 (4)

石器 (第49図)

片岩製の石庖丁 (41~43) である。いずれも器体の一部を欠損する。41は片岩の円礫を分割して生じた剥片を素材とし、一側縁に直線状の刃部を作出している。自然面が残存している。42・43は薄手の横長剥片を素材としている。42は剥片の両側縁に、43は一側縁に直線状の刃部を作出している。44は不明石器である。一部自然面が残存している。形態は槍先形を呈し、先端部は研磨されている。基部~体部は調整加工が施され、細身に仕上げられている。



第47図 SK 1002実測図

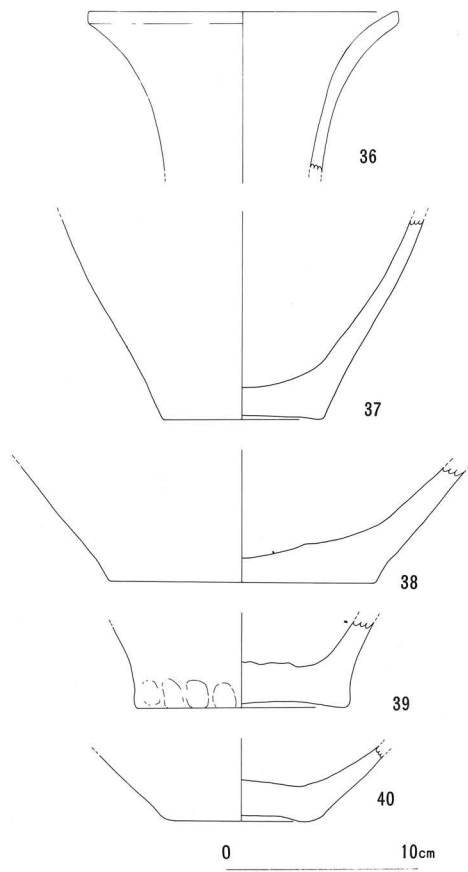
遺物包含層出土の遺物

本遺跡からは弥生土器片、石器など遺物包含層出土の遺物があるが、いずれも小片である。その中で図化し得た主なものを提示したい。

石器 (第50・51図)

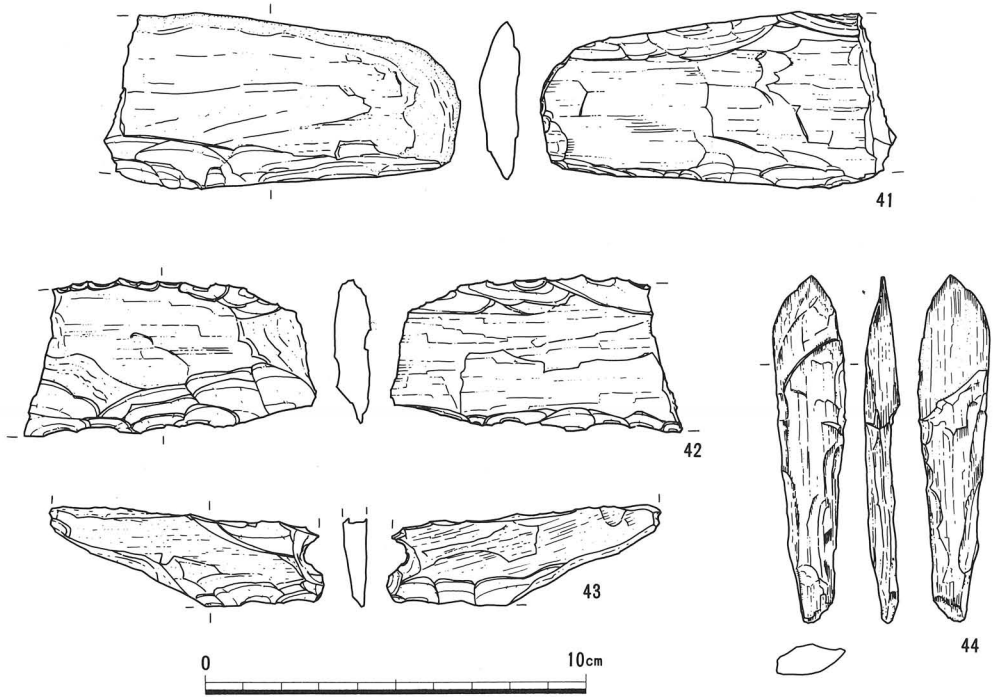
本遺跡では遺物包含層からの出土、あるいは表採の石器も多い。

45・46は結晶片岩製の石庖丁である。45は大形の剥片を素材とし、両側縁に刃部を作出している。46は器体の一部欠損している。素材となる剥片の両側縁に調整加工を施し、刃部を作出している (第50図)。サヌカイト製の石鏃 (47~49) である。47は細身の木葉形であり、基部は無茎の平基式である。両面とも押圧剥離による調整加工が施され、断面形は凸レンズ状を呈する。48は両端を欠損している。剥片の両側縁に調整加工が施され



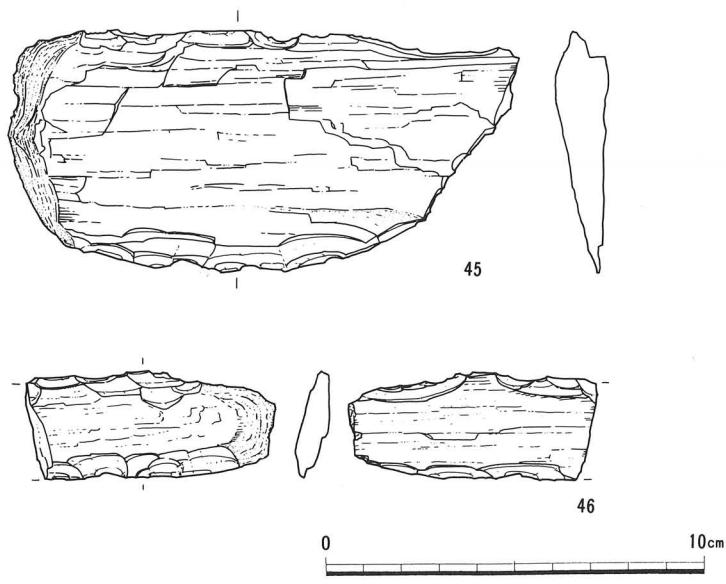
第48図 SK 1002出土土器実測図

ている。49は石鏃の未製品である。両面とも押圧剥離による調整加工が施され、一部自然面が残存している。50は石錐である。石材はサヌカイトである。素材となる剥片の縁辺を抉る

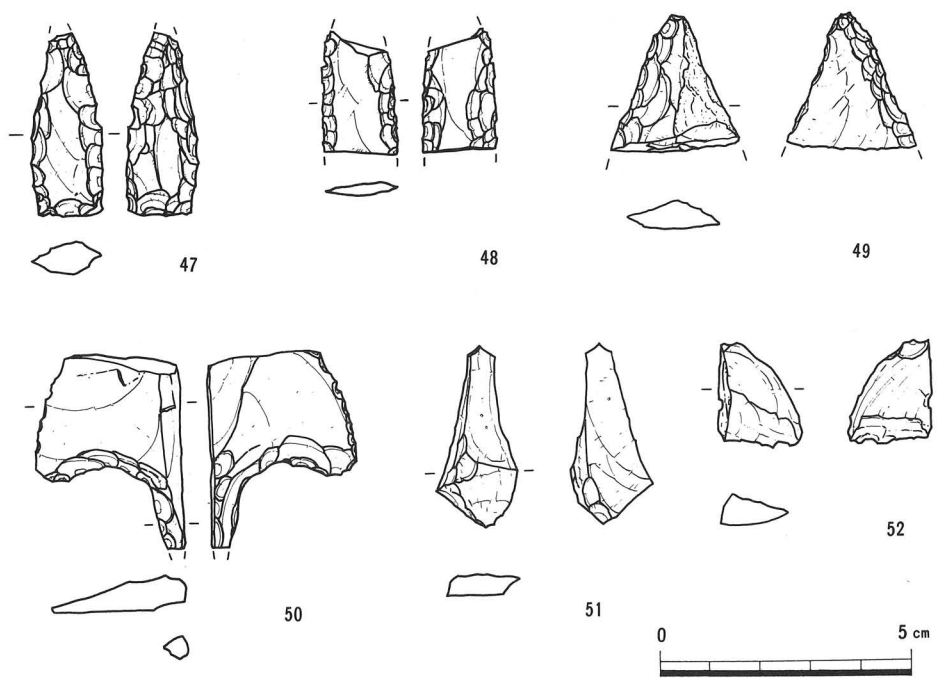


第49図 S K 1002出土石器実測図

ように調整加工を施し、刃部を作出している。51・52はR. F. である。風化が著しく、旧石器時代の遺物であると思われる（第51図）。



第50图 遺物包含層出土石器実測図 (1)



第51图 遺物包含層出土石器実測図 (2)

## 注

- (1) 床面に草等を敷代としていたものと思われる。
- (2) 擬凹線文の呼称については、「壺形土器・甕形土器・器台形土器の口縁部などに凹凸のある施文具で直線的に引いた場合などの紋様が擬凹線紋と呼ばれている。」という使用が一般的であるが徳島県内では鳴門市光勝院寺内遺跡の分類以来、「ヨコナデによる起伏で凹線状を呈する」文様と捉えられている場合が多い。本書でも後者に従った。
- (3) 野上丈助 編 『陶邑Ⅳ』 (財)大阪文化財センター 1988
- (4) 杉原荘助・麻生 優・加藤 稔 編 『日本の旧石器文化 2・3』 雄山閣 1975
- (5) 底部周縁に環状の平底面を有するものを主として指し、底部輪台技法との連関が議論されている。

## 参考文献

- 石野博信 『日本原始・古代住居の研究』 吉川弘文館 1990
- 佐原 真・金関 恕 編 「弥生集落」『弥生文化の研究 7』 雄山閣 1986
- 菅原康夫・高橋正則 『光勝院寺内遺跡』 徳島県教育委員会 1984
- 寺沢 薫・森岡秀人 編 「近畿編Ⅰ・Ⅱ」『弥生土器の様式と編年』 木耳社 1989
- 平井 勝 他 『野原遺跡群 早風A地点』 岡山県教育委員会 1979
- 正岡睦夫 「凹線文・擬凹線文」『弥生文化の研究 3』 雄山閣 1986



## 4 まとめ

### (1) 赤坂遺跡 (I)・(II)・(III) の年代と性格について

以上、前章までは各々の遺跡で検出された遺構と遺物について述べた。赤坂遺跡 (I)・(II)・(III) は、長峰台地と呼ばれる平坦な台地上にほぼ同時期に形成された一連の小規模な集落であると思われる。ここでは、本遺跡の営まれた年代と性格についてまとめておきたい。

赤坂遺跡 (I) の出土土器の器種構成として壺形土器・甕形土器・高杯形土器・鉢形土器があるが、図化し得なかったものも含め、その大半を甕形土器が占めるという傾向を示している。一方、赤坂遺跡 (III) においては壺形土器が器種構成の大半を占めており、その他の器種はごくわずかに出土しているにすぎない。

本遺跡は出土点数におよび遺存状態に恵まれず、土器の詳細な検討は困難である。しかし比較的遺存状態の良好な土器を観察すれば、本遺跡の弥生土器は口縁部端部が肥厚・上方または上下に拡張されて、外面に2～3条の凹線文を施しているものが多いという傾向を示す。赤坂遺跡 (I) では凹線文がほとんどの甕形土器の口縁部に施されている。弥生土器の編年観では、凹線文の盛行期は弥生時代中期後半（畿内第IV様式併行期）の時期とされている<sup>(1)</sup>。

県内で確認されている中期後半の弥生土器が出土した遺跡は多く、鳴門市光勝院寺内遺跡<sup>(2)</sup>、土成町北原遺跡<sup>(3)</sup>、北原～大法寺遺跡<sup>(4)</sup>、分銅型土製品の出土した阿波町西長峰遺跡<sup>(5)</sup>、桜ノ岡遺跡 (I)・(III)<sup>(6)</sup>、日吉谷遺跡<sup>(7)</sup>、赤坂遺跡 (I)・(III)、徳島市庄遺跡<sup>(8)</sup>、南庄遺跡<sup>(9)</sup>、名東遺跡<sup>(10)</sup>、矢野遺跡<sup>(11)</sup>、銅鐸型土製品の出土した石井町高川原遺跡<sup>(12)</sup>、高地性集落とされる阿南市正福寺山遺跡<sup>(13)</sup>などがあり、今後さらに資料の増加が見込まれる。

ここで、比較的遺存状態の良好な赤坂遺跡 (I) の出土土器について詳細に見ていきたい。本遺跡で検出された遺構の中で、最も多くの土器を出土した土坑 8 出土の土器 (13～24) についてみると、これらはすべて同時期に投棄されたものと認められるものである。14・16～18の甕形土器は口縁部を上方につまみあげ、端部外面に凹線文または擬凹線文が施されている。北原遺跡では甕B<sub>1</sub>に、香川県吉原町矢ノ塚遺跡<sup>(14)</sup>では甕<sub>3</sub>に、香川県詫間町紫雲出山遺跡<sup>(15)</sup>では甕<sub>2</sub>に形態分類され、紫雲出山Ⅱ式（中期3・新）以降出現するとされている。内面下半はタテヘラケズリ、上半はヨコヘラケズリが施され、煮沸効率を高めるためか器壁は3～5mm程度にまで薄く仕上げている。外面の調整技法はほとんどがハケのちナデ調整で

仕上げている。15・19は体部全体をナデたのち部分的に粗雑なヘラミガキを施しており、若干後期的な様相をみせている。

また他の出土土器についても同様であり、口縁部の形状は上方に拡張またはわずかに上下に拡張しており、端部には凹線文が施されている。外面の調整はナデがほとんどを占め内面は全面にわたってヘラケズリで仕上げている。ただし土坑1出土の高杯形土器(1)は杯部底面を円板充填技法が認められ、また土坑3出土の甕形土器(2)は器体外面全体にハケで調整されており、弥生時代後期の様相を呈しているものも認められる。

以上のように、赤坂遺跡(I)の出土土器は、数量的に口縁端部外面に2~3条の凹線文が施され、体部外面をナデ調整で仕上げているものが主体であるが、凹線文が退化したもの(9・14・15・26など)もあり、無文化の傾向も見られる。一方、赤坂遺跡(III)ではさらに無文化が進み、後期の土器にみられるドーナツ状のあげ底(12・40)を呈するものがみられる。

したがって、本遺跡の出土土器は弥生時代中期末~後期初頃(第IV様式~第V様式)の様相を呈しているものとみて大過ないものと思われる。

遺構については、赤坂遺跡(I)からは土坑9、ピット75が検出され、赤坂遺跡(III)からは、住居跡2、溝状遺構2、土坑5、ピット95が検出された。最初に述べたように赤坂遺跡(I)は標高66~66.5mに、赤坂遺跡(III)は標高80~85mに位置しており、麓の平野部からの比高差は赤坂遺跡(I)が約20m、赤坂遺跡(III)が約30mを測る。したがって、本遺跡は緩やかに傾斜した丘陵先端部に立地する高位台地性集落<sup>(16)</sup>ととらえることができる。

赤坂遺跡(I)で検出された9基の土坑のうち、土坑3・5・8・9は柱穴をもたない非常に簡略な構築物の可能性がある。これらを住居跡とするならば、1辺3m未満の小規模な住居跡である。平面プランは土坑9が楕円形状、その他は方形状を呈している。しかし、上屋構造等については推定しうる資料に欠け不明である。これらは奈良県唐古遺跡から検出された第IV様式期の堅穴の27・68・83号跡の事例と類似しており、非常に簡略な上屋構造をもつ施設、例えば畑作経営に関わる簡略な構造の作り小屋<sup>(17)</sup>的なものであると思われる。これらの土坑内からは石庖丁の出土点数が多く、このことは本遺跡が農耕集落であったことを示唆するものといえるだろう。

その他の土坑については、そのいずれにも床面直上に炭化物が薄く堆積しており、用途としては貯蔵穴であると解釈することが妥当であろう。

赤坂遺跡(III)では、住居跡と認められるものが2基検出された。両者共弥生時代中期後半に属すると思われる円形の堅穴住居跡であり、平面プラン、規模、構造など近似性をしめしている。また出土遺物に関しても、1号住居跡・2号住居跡ともに土器の出土点数は少なく、石庖丁・磨製石斧などの石器類の出土が多い。

徳島県内で現在までに判明している弥生時代の竪穴住居跡の出土例は、約110例を数える。このうち弥生時代中期後半に属するものは、徳島市矢野遺跡変電所内地点3例、矢野遺跡養護学校内地点1例、南庄遺跡12例、名東遺跡（天神地区）4例、名東遺跡7例、名西郡石井町高川原遺跡1例、鳴門市光勝院寺内遺跡2例、板野郡土成町北原遺跡2例、北原～大法寺遺跡1例、椎ヶ丸～芝生遺跡3例<sup>(18)</sup>、西谷遺跡1例<sup>(19)</sup>、前田遺跡4例<sup>(20)</sup>阿波郡市場町上喜来蛭子～中佐古遺跡1例<sup>(21)</sup>、阿波郡阿波町西長峰遺跡16例、桜ノ岡遺跡（Ⅰ）11例、赤坂遺跡（Ⅲ）2例、三好郡三好町土取遺跡1例<sup>(22)</sup>、円通寺遺跡1例<sup>(23)</sup>、大柿遺跡2例<sup>(24)</sup>の75例を数える。

竪穴住居跡の平面プランは、いずれも円形または不整形円形を呈し、徳島県の弥生時代全時期を通して類例の大部分に共通する<sup>(25)</sup>。赤坂遺跡（Ⅲ）の2号住居跡の床面積は32.9㎡であり、徳島県における中期の竪穴住居跡の床面積の傾向に合致するものである<sup>(26)</sup>。

2基の住居跡からは石器が多く出土しており、開墾に使用したと思われる大型の磨製石斧や農耕具である石庖丁やスクレイパー等の出土点数は33点を数える。器種別に分類すれば狩猟具（武器）、農耕具、加工具と大別することができる。狩猟具は2号住居跡から石鏃が5点まとまって出土している。農耕具は結晶片岩製の石庖丁が多いが、その他開墾などに使用されたとみられる大型の両刃の磨製石斧がある。加工具ではスクレイパーの他に楔形石器や石錐などがみられる。

また検出された5基の土坑からは炭化物および焼土は検出されていない。これらの土坑は貯蔵穴と捉えておきたい。

以上、出土土器および住居形態などから、本遺跡は弥生時代中期末～後期初頭（第Ⅳ様式～第Ⅴ様式）にかけて台地上に営まれた1～4棟の竪穴住居と貯蔵穴と思われる数基の土坑で構成される、きわめて小規模な集落であるといえる。本遺跡の遺構の性格として、出土遺物などから台地上に営まれた畑作経営に関わる管理小屋あるいは食料採集のためのベースキャンプ的な小集落であったと捉えられよう。

赤坂遺跡（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）における成果は、以上述べてきた通りである。赤坂遺跡（Ⅲ）においては形態的に弥生時代中期後半に属すると思われる竪穴住居跡2基が検出され、弥生時代の集落研究の一つの資料を提示することができた。

しかし、本遺跡からは明らかに一括といえる弥生土器は出土しておらず、弥生土器の様式と年代についても十分に明らかにすることはできなかった。

赤坂遺跡（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）の立地する曾江谷川左岸、吉野川に張り出した長峰台地を中心とする段丘先端には東西約2kmの範囲に西長峰遺跡、日吉谷遺跡、桜ノ岡遺跡（Ⅰ）など継続時期の微差はあるが、ほぼ同時期の弥生時代の遺構が存在している。とくに西長峰遺跡では大規模な堀立柱建物跡を囲む形で多数の竪穴住居跡が検出されており<sup>(27)</sup>、長峰台

地遺跡群の中心的存在であったことをうかがわせている。これら一連の遺跡は各台地上に営まれた枝集落として把握する必要があり、それぞれの枝脈での土地利用形態の分析を通して、当該地域の集落構造を検討していく必要があろう。

## 注

- (1) 正岡睦夫 「凹線文・擬凹線文」『弥生文化の研究 3』 雄山閣 1986  
寺沢 薫・森岡秀人 編 「近畿編Ⅰ・Ⅱ」 『弥生土器の様式と編年』 木耳社 1989
- (2) 菅原康夫・高橋正則 『光勝院寺内遺跡』 徳島県教育委員会 1984
- (3) 林 慎二・谷 匡人 『土成町北原遺跡』 徳島県教育委員会 1988
- (4) (助)徳島県埋蔵文化財センター 『徳島県埋蔵文化財センター年報V o l . 2』 1991
- (5) 徳島県教育委員会 『西長峰遺跡現地説明会資料』 1990
- (6) 前掲注(4)
- (7) 前掲注(4)
- (8) 「弥生時代の徳島市」 埋蔵文化財資料展 徳島市教育委員会 1983  
「庄遺跡人々のくらしと文化」 第6回埋蔵文化財資料展 徳島市教育委員会 1985
- (9) 森 直樹 編 『南庄遺跡』 徳島県教育委員会 1989  
一山 典・滝山雄一 他 「南庄遺跡発掘調査現地説明会資料」徳島市教育委員会 1985
- (10) 松永住美・森 直樹 編 『名東遺跡(天神地区)』 徳島県教育委員会 1990  
一山 典 編 『徳島市文化財だよりNo.27』 徳島市教育委員会 1992
- (11) 小林勝美・松永雅行 「矢野国府変電所緊急発掘調査概報」『徳島県文化財調査概報』  
徳島県教育委員会 1976  
徳島県教育委員会 『矢野遺跡現地説明会資料』 1983
- (12) 高川原遺跡発掘調査委員会 『高川原遺跡発掘調査報告書』 石井町教育委員会 1980
- (13) 伊藤勇輔 「四国地方の弥生系高地性集落遺跡の資料」『古代学研究』66 古代学研究会  
1973
- (14) 薦田耕作 編 『矢ノ塚遺跡』 香川県教育委員会 1987
- (15) 小林行雄・佐原 真 『紫雲山』 詫間町文化財保護委員会 1964
- (16) 小野忠熙 『高地性集落論』 学生社 1982  
佐原 真・金関 恕 編 「弥生集落」『弥生文化の研究 7』 雄山閣 1986
- (17) 例えば琵琶湖東地域にみられる収穫時における耕作現地での倉庫としての機能を持つ「ホシ小屋」と呼ばれる簡略な構築物のようなものであると思われる。石野博信氏はこれを「簡略な伝統的構造原理」として住居の原初形態を示すものと着目している。石野博信 『日本原始・古代住居の研究』 吉川弘文館 1990 所収。

- (18) 前掲注(4)
- (19) 前掲注(4)
- (20) 前掲注(4)
- (21) 前掲注(4)
- (22) 森 浩一 編 『土取遺跡調査概況報』 徳島県教育委員会・三好郡三好町教育委員会  
1973
- (23) 小林勝美 編 『徳島県文化財調査概報』 徳島県教育委員会 1980
- (24) 小林勝美・松永住美 『大柿遺跡発掘調査概報』 1976
- (25) 前掲注(2) 徳島県における弥生時代の中期の住居形態は円形の平面プランをもち、後期になっても原則として住居形態は円形を踏襲している。これらのことは近接する、紀伊、讃岐、播磨地方の弥生時代の中期の様相と共通している。
- (26) 前掲注(2)
- (27) 前掲注(5)

#### 参考文献

- 井守徳男 編 『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書』 兵庫県教育委員会 1983
- 岡本健児 「入門講座・弥生土器－四国4・5」 『考古学ジャーナル92・93』 ニュー・サイエンス社 1974
- 佐原 真 「弥生土器の製作技術 1. 粘土から焼き上げまで」 『弥生文化の研究 3』 雄山閣
- 菅原康夫 『黒谷川郡頭遺跡Ⅰ』 徳島県教育委員会 1986
- 菅原康夫 「吉野川中流域」 『日本の古代遺跡 37 徳島』 保育社 1986
- 寺沢 薫・森岡秀人 編 「近畿圏Ⅰ・Ⅱ」 『弥生土器の様式と編年』 木耳社 1989
- 長井数秋 「農耕文化の形成と発展」 『愛媛県史 原始古代Ⅰ』 愛媛県史編纂委員会 1982
- 安田喜憲 「Ⅳ 水田稲作農業の文化－弥生時代－」 『環境考古学事始 日本列島2万年』 日本放送出版協会 1980
- 渡辺光 「竪穴住居」 『百間川兼基遺跡1 百間川今谷遺跡1』 岡山県教育委員会 1982

第1表 赤坂遺跡（I）遺構一覧表

遺構名	出土地点	規模（cm）			出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ		
S K 1001	E-5	160	138	12	高杯、甕等	
S K 1002	D-7, E-6, 7	220	90	18	無	
S K 1003	F-8	300	180	38	甕、叩き石、砥石等	住居跡？
S K 1004	D-10	100	60	26	弥生土器片、石庖丁等	
S K 1005	F, G-7	270	210	24	壺、甕口縁～底部、鉢等	
S K 1006	F, G-8	100	100	20	弥生土器片	
S K 1007	G-7	120	76	28	甕口縁～底部、台石等	
S K 1008	G, H-7, 8	210	200	28	甕口縁～底部、石鏝等	
S K 1009	F, G-6	244	154	14	甕口縁～底部、台石等	住居跡？
S P 1004	D-5	36	25	10	無	
S P 1007	D-6	25	-	12	無	
S P 1011	D-6	(70)	50	26	無	
S P 1013	D-6	100	60	20	無	
S P 1014	D-6	42	32	10	無	
S P 1015	D-6	50	44	12	無	
S P 1016	E-6	74	64	14	無	
S P 1019	E-6	30	30	10	無	
S P 1020	E-6	38	34	12	無	
S P 1021	E-6	44	44	18	無	
S P 1023	F-6	50	46	20	無	
S P 1024	F-6	50	38	20	無	
S P 1025	F-6	32	27	17	無	
S P 1027	E-7	60	40	24	弥生土器片	
S P 1029	E-7	48	42	16	弥生土器片	
S P 1030	E-7	53	41	14	無	
S P 1031	E-7	76	-	12	無	
S P 1032	E-7	59	50	10	無	
S P 1033	E-7	42	36	10	無	
S P 1037	E-7	32	-	14	無	
S P 1042	E-7	36	29	11	無	
S P 1044	F-7	54	42	10	無	
S P 1045	F-7	78	58	12	無	
S P 1046	F-7	38	30	10	無	
S P 1049	F-7	52	40	15	無	
S P 1050	F-7	42	32	16	無	
S P 1053	E-8	32	32	10	無	
S P 1055	F-8	30	30	17	無	
S P 1060	F-8	32	30	11	無	
S P 1061	F-8	32	28	14	無	

遺構名	出土地点	規模 (cm)			出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ		
S P 1063	F-8	26	23	10	無	
S P 1065	F-9	30	28	16	無	
S P 1067	F-9	32	28	24	石庖丁	
S P 1069	F-9	47	36	18	無	
S P 1070	F-9	28	26	23	無	
S P 1071	E-10	24	22	12	無	
S P 1072	E-9	42	34	13	無	
S P 1075	E-10	40	28	26	無	
S P 1076	E-10	27	25	13	無	
S P 1078	E-10	40	31	21	無	
S P 1079	D-9	(50)	33	16	無	
S P 1080	D-10	34	28	13	無	
S P 1081	D-10	75	72	22	無	
S P 1082	D-10	53	36	20	無	
S P 1084	D-10	-	-	24	弥生土器片	
S P 1087	C-10	88	54	10	無	
S P 1088	C-10	72	52	16	弥生土器片	
S P 1091	G-8	22	21	10	無	
S P 1093	G-9	47	27	12	無	
S P 1094 95	G-9	103	29	12	無	
S P 1096	G-9	32	25	21	無	
S P 1097	G-9	40	33	24	無	
S P 1098	G-9	120	58	22	無	
S P 1099	G-8	35	30	23	無	
S P 1100	G-9	31	26	21	無	
S P 1101	G-9	33	22	16	無	
S P 1102	G-9	41	40	20	無	
S P 1103	G-8	46	31	19	無	
S P 1104	G-8	40	34	18	無	
S P 1105	G-8	26	20	10	無	
S P 1106	G-8, 9	50	41	18	無	
S P 1107	G-9	56	34	20	無	
S P 1108	G-9	44	34	26	無	
S P 1109	G-9	40	30	18	無	
S P 1110	G-9	86	32	16	無	
S P 1111	G-9	(37)	30	24	無	
S P 1112	G-8	30	25	24	無	
S P 1113	G, H-9	72	34	23	無	

遺構名	出土地点	規模 (cm)			出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ		
S P 1114	H-9	110	70	14	無	
S P 1116	G-8	30	24	26	無	
S P 1117	H-8	30	26	17	無	
S P 1118	H-8	42	36	10	無	
S P 1119	H-8	40	28	10	無	
S P 1121	H-7	33	32	12	無	
S P 1122	I-7	60	54	20	無	

第2表 赤坂遺跡(Ⅲ)遺構一覽表

遺構名	出土地点	規模 (cm)			出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ		
S B 1001	I-14, 15	479	-	18	壺底部、磨斧、砥石等	
S B 1002	G, H-17, 18	680	500	25	壺、甕磨斧、石鏃等	
S D 1001	D-15	169	66	14	無	
S D 1002	D-14, 15	207	58	19	無	
S K 1001	F-12, 13	169	-	14	弥生土器片	
S K 1002	F-19, 20	208	-	28	壺口縁～底部、石庖丁等	
S K 1003	G-8	160	80	25	無	S B 1002内
S K 1004	F, G-18	258	190	14	無	
S K 1005	E-12	260	175	11	無	
S P 1001	H-17	54	53	13	無	
S P 1002	H-16	71	46	21	無	
S P 1003	I-16	45	29	21	無	
S P 1004	H, I-16	38	31	19	無	
S P 1005	I-16	29	27	17	無	
S P 1006	I-16	51	34	17	無	
S P 1007	H-15	44	30	20	無	
S P 1008	H, I-15	30	22	39	無	
S P 1009	I-15	54	22	20	無	
S P 1010	H, I-14, 15	34	33	10	無	
S P 1011	I-14	-	48	20	無	
S P 1012	I-14	26	20	23	無	
S P 1013	I, J-14	38	29	17	無	
S P 1014	I-14	30	26	16	無	
S P 1015	I-14	32	25	18	無	
S P 1016	I-14	35	29	19	無	
S P 1018	I-14	30	25	18	無	
S P 1021	H, I-14	26	21	31	無	
S P 1022	H-14	36	17	17	無	



遺構名	出土地点	規模 (cm)			出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ		
S P 1023	I - 14	96	67	34	無	
S P 1024	I - 13, 14	102	81	27	無	
S P 1025	I - 13, 14	52	47	22	無	
S P 1026	H, I - 13	26	24	21	無	
S P 1027	H - 13	39	34	10	無	
S P 1028	H - 13	33	26	25	無	
S P 1030	H - 13	31	24	20	無	
S P 1032	H - 13	43	30	27	無	
S P 1033	H - 13	33	30	21	無	
S P 1034	H - 13	88	56	24	無	
S P 1035	H - 13	52	44	26	無	
S P 1036	H - 12, 13	33	29	20	無	
S P 1037	H - 12	48	38	43	無	
S P 1038	H - 13	34	24	31	無	
S P 1039	I - 13	32	31	23	無	
S P 1040	I - 13	38	37	20	無	
S P 1041	I - 13	69	57	20	無	
S P 1042	I - 12, 13	69	54	25	無	
S P 1043	I - 13	58	47	24	無	
S P 1044	I - 12	36	28	14	無	
S P 1045	I, J - 12	84	60	15	無	
S P 1046	E - 16	40	29	15	無	
S P 1047	E - 15, 16	40	31	20	無	
S P 1048	E - 15	42	34	11	無	
S P 1049	E - 15	54	31	15	無	
S P 1050	E - 15	44	38	22	無	
S P 1051	E - 15	34	28	24	無	
S P 1052	D - 15	38	33	10	無	
S P 1053	D, E - 15	84	36	12	無	
S P 1054	D - 13	26	20	33	無	
S P 1055	D - 13	20	18	14	無	
S P 1056	D - 13	25	16	19	無	
S P 1057	D - 13, 14	82	64	11	無	
S P 1058	D - 14	54	36	16	無	
S P 1059	E - 14	74	66	21	無	
S P 1061	F - 14	38	27	17	無	
S P 1062	F - 14	29	25	25	無	
S P 1063	F - 14	21	20	20	無	
S P 1064	F - 14	24	19	13	無	

遺構名	出土地点	規模 (cm)			出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ		
S P 1065	F - 14	34	26	11	無	
S P 1066	F - 14	43	40	13	無	
S P 1067	F - 14	35	29	10	無	
S P 1068	F - 14	22	19	19	無	
S P 1069	F - 14	27	24	15	無	
S P 1071	F - 13, 14	41	36	21	無	
S P 1072	F - 13	46	40	30	無	
S P 1073	F - 13	70	25	11	無	
S P 1074	F - 13	110	105	16	無	
S P 1075	G - 14	21	20	33	無	
S P 1076	G - 14	36	32	28	無	
S P 1077	G - 13	38	34	14	無	
S P 1078	G - 14	37	30	20	無	
S P 1079	D, E - 13	59	51	16	無	
S P 1080	E - 13	48	38	11	無	
S P 1081	D, E - 12, 13	69	56	22	無	
S P 1082	F - 15	26	24	14	無	
S P 1083	E - 12, 13	54	44	19	無	
S P 1084	F - 12	63	50	13	無	
S P 1085	E - 11, 12	73	50	22	無	
S P 1086	F - 12	53	38	14	無	
S P 1087	I - 12	38	35	16	無	
S P 1088	I - 12	46	36	27	無	
S P 1089	I - 12	30	28	17	無	
S P 1090	E - 11	88	60	15	無	
S P 1091	E, F - 11	140	62	40	無	
S P 1092	F - 11	54	36	13	無	
S P 1093	F - 11	36	32	48	無	
S P 1094	F - 11	67	58	10	無	
S P 1095	G - 12	38	35	21	無	
S P 1096	G - 11	33	26	21	無	
S P 1097	G - 11	92	52	15	無	
S P 1098	E - 10	56	42	28	無	
S P 1099	I - 15	34	24	38	無	
S P 1100	F - 14	70	60	17	無	
S P 1101	H - 12	31	28	23	無	
S P 1102	I - 14	38	29	20	無	

第3表 赤坂遺跡（Ⅰ）出土遺物観察表（土器）

番号	器種	地点 層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
1	高杯	S K 1001	口径 20.0 脚台部径8.7 器高 13.1	杯部 直線的に外方へのびる。 口縁端部 内彎し、丸くおさめる。 脚部 ゆるやかに外下方にひろがる。 脚端部 方形状におさめる。	内外面 損傷激しく調整不明。 杯部底面門板充填技法。	石英 チャート 雲母	明赤褐色	
2	甕	S K 1003	口径 14.0 底径 6.4 体部最大径19.4	口縁部 外反。 口縁端部 わずかにつまみあげる。 口縁端部外面に2条の凹線文を施す。 体部 内彎気味に立ちあがり上方へのびる。	口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面全体に7条/cmの粗いハケ。 一部ナデ。体部上位～下位 タテハケ。のち体部中位ヨコハケ。 体部 内面 幅1.7cmのヘラケズリ。 体部内面上位 ヨコヘラケズリ。 体部内面中位～下位 タテヘラケズリ。	緻密 片岩	黒褐色	
6	壺	S K 1005	口径 15.6	頸部 直立気味に立ち上がる。 口縁部 外反 口縁端部 上方につまみあげる。	内外面損傷激しく調整不明	石英 チャート 雲母	橙色	
7	甕	S K 1005	口径 19.1	口縁部 外反。 口縁端部 上方につまみあげ丸くおさめる。 口縁端部外面に2条の凹線文を施す。	口縁部 外面タテハケのちヨコナデ。 口縁部内面ヨコハケのちヨコナデ。	石英 雲母	明赤褐色	
8	甕	S K 1005	口径 11.0	口縁部 外反 口縁端部 わずかに下方に拡張する。 口縁端部 外面に1条の凹線文を施す。	口縁部～体部外面ナデ 口縁部内面ヨコナデ。 体部内面幅1.5cmのヨコヘラケズリ。	石英 チャート 雲母	にぶい赤褐色	
9	甕	S K 1005	口径 15.4	口縁部 外反。 口縁端部 方形状におさめる。 口縁端部わずかに拡張。	内外面損傷激しく調整不明	石英 チャート	明褐色	
10	甕	S K 1007	口径 15.2	口縁部 外反。 口縁端部 上下に拡張。 口縁端部の栓は鋭い 口縁端部 外面に2条の凹線文を施す。	口縁部 内外面ヨコナデ	石英 チャート	内面 黒褐色 外面 明赤褐色	
11	甕底部	S K 1007	底径 5.8	底部直立し、内彎気味に立ちあがり上方へのびる。 わずかにあげ底	底部 外面に7条/cmのタテヘラミガキ。 底部 内面ユビオサエのちナデ。 底面 外部ユビナデ	石英 チャート 雲母	内面 にぶい赤褐色 外面 橙色	
13	甕	S K 1008	口径 14.2 体部最大径29.6	口縁部 わずかに内傾して立ち上がる。 口縁部 外反。 口縁端部 上下に拡張して、丸くおさめる。 口縁端部 外面に2条の擬凹線文を施す。 体部 中位に最大径。	口縁部 内外面ヨコナデ。 体部外面3条/cmのヘラミガキ。 体部外面上位ヨコヘラミガキ。 体部外面中位タテヘラミガキ。 体部内面幅1.7cmのヘラケズリ。 体部内面上位～下位タテヘラケズリ。 体部内面中位 ヨコヘラケズリ。	石英 チャート 雲母 結晶片岩	内面 暗赤褐色 外面 明赤褐色	
14	甕	S K 1008	口径 13.4 体部最大径 22.0 復元器高 27.0	口縁部 外反。 口縁端部 上下に拡張。 体部中位に最大径。 倒卵形の体部。	口縁～体部中位下部外面ナデ。 体部中位外面に一部ハケ残存。 口縁部内面ヨコナデ。 体部内面 幅2cmのヘラケズリ。 体部内面上位ヨコヘラケズリ。 体部内面中位～下位 タテヘラケズリ。	石英 チャート 雲母 結晶片岩	明赤褐色	口縁～底部 外面に黒斑。
15	甕	S K 1008	口径 14.4 体部最大径19.4	口縁部やや立ち上がり外反。 口縁端部方形状におさめる。 口縁端部外面やや凹みをもつ。 体部上位やや肩が張る。	口縁部内外面ヨコナデ。 口縁部と体部の境にユビオサエ。 体部外面全体ナデのち体部外面上位～中位に5条/cmのヨコヘラミガキ。 体部内面幅1.6cmのヘラケズリ。 体部内面上位ヨコヘラケズリ。 体部内面中位～下位タテヘラケズリ。 内面ケズリ明瞭。	石英 チャート 雲母	内面 にぶい 赤褐色 外面 明赤褐色	

番号	器種	地点 層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
16	甕	S K 1008	口径 17.2	口縁部やや立ち上がり、短く外反する。 口縁端部上方に拡散し、外面に平坦面を作出。 口縁端部外面に3条の凹線文を施す。 体部上位やや肩が張る。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面約幅1cm単位のイタナデ。 体部内面幅1.7cmのヘラケズリ。 体部内面上位ヨコヘラケズリ。 体部内面中位タテヘラケズリ。 内面ケズリ明瞭。	石英 チャート 雲母	明赤褐色	
17	甕	S K 1008	口径 15.8	口縁部「く」の字状に外反。 口縁端部つまみ上げて、丸くおさめる。 口縁端部外面に2条の凹線文を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ヨコ・ナメハケのちナデ。 体部内面幅1.8cmのヨコヘラケズリ。 内面ケズリ明瞭。	石英 チャート 雲母	内面 黄褐色 外面 明赤褐色	
18	甕	S K 1008	口径 16.4 体部最大径24.4	口縁部「く」の字状に外反。 口縁端部つまみ上げて、丸くおさめる。 口縁端部外面に3条の凹線文を施す。 体部中位に最大径。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ナデ、一部タテハケ残存。 体部内面幅1.8cmのヨコヘラケズリ。 内面ケズリ明瞭。	石英 チャート 雲母	内面 赤褐色 外面 橙色	
19	甕底部	S K 1008	底径 6.2	底部 やや直立して、上方に外反。平底。	底部外面4条/cmのタテヘラミガキ、のち底部最下位ヨコナデ。 底部内面幅1.6cmのタテヘラケズリのち、底面内部ユビナデ。 底面外部ユビナデ。	石英 チャート 雲母 結晶片岩	内面 にぶい赤褐色 外面 明赤褐色	
20	甕底部	S K 1008	底径 7.2	底部内面ユビオサエまたはナデ。平底。	底部外面7条/cmのタテヘラミガキ、のち底部最下位ヨコナデ。 底面外部ナデ。	石英 チャート 雲母	内面 にぶい褐色 外面 明赤褐色	
21	甕底部	S K 1008	底径 6.4	底部内面ユビオサエまたはナデ。平底。	底部外面6条/cmのタテヘラミガキ、のち底部最下位ヨコナデ。	石英 チャート 雲母	内面 にぶい橙色 外面 にぶい赤褐色	
22	鉢	S K 1008	口径 15.1 底径 7.2 器高 6.8	口縁端部内彎し方形におさめる。 体部直線気味に外上方にひろがる。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面イタナデ。 体部内面5条/cmのヨコヘラミガキ。	石英 チャート 雲母 結晶片岩	橙色	
23	高杯 (脚部)	S K 1008	底径 8.0	脚楕部 外下方にひろがる。 脚端部方形におさめる。 脚楕部外面に3条の沈線文 その下に鋸歯状の沈線文を施す。 脚端部外面に1条の沈線文を施す。	脚部外面ヨコナデ。 脚部内面ヨコヘラケズリのち脚端部内面ヨコナデ。	石英 チャート 精緻	明赤褐色	
24	高杯 (杯部)	S K 1008	口径 25.0	杯部直線的に外方へのびる。 口縁端部上方へ立ち上がり、内彎する。 口縁端部丸くおさめる。 口縁端部肥厚な粘土帯貼り付け。	内外面損傷激しく調整不明	石英 チャート 雲母	にぶい 橙色	
26	甕	S K 1009	口径 14.0 体部最大径20.2	口縁部外反。 口縁端部つまみ上げる。 口縁端部外面平坦、やや凹みをもつ。 球形に近い体部。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面タテ、ヨコハケのちナデ。 体部内面幅2cmのヘラケズリ。 体部内面上位～中位ヨコヘラケズリ。 体部内面中位～下位タテヘラケズリ。 内面ケズリ明瞭。	石英 チャート 雲母	内面 暗赤褐色 外面 明赤褐色	

番号	器種	地点 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
27	甕	S K 1009	口径 14.6	口縁部外反。 頸部直立気味に短く立ち上がる。 口縁端部肥厚。 口縁端部外面に2条の凹線文を施す。 口縁部内面に2条の凹線文を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。	チャート 雲母 結晶片岩	橙色	
28	甕底部	S K 1009	底径 7.4	底部直線的にひろがる。 平底。	底部外面4条/cmのタテヘラミガキ。 底部最下位ヨコナデ。	石英 チャート 雲母 精緻	明赤褐色	
29	壺底部	S K 1009	底径 4.1	底部直線的にひろがる。 あげ底。	底部外面3条/cmのタテヘラミガキ。 底部外面最下位ユビナデ。 底面内外面ユビナデ。	石英 チャート 雲母	内面 赤灰色 外面 にぶい 橙色	
32	壺	遺物包含層 (2層)	口径 14.6	口縁部ゆるやかに外反。 口縁端部肥厚し、方形におさめる。 口縁端部外面に1条の凹線文を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。	石英 雲母 結晶片岩	橙色	
33	壺	遺物包含層 (2層)	口径 12.6	口縁部ゆるやかに外反。 口縁端部上方に拡張し、丸くおさめる。 口縁端部外面に2条の凹線文を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。	石英 雲母	明赤褐色	
34	壺	遺物包含層 (2層)		頸部と体部の境に櫛描直線文、その上下に櫛描波状文を施す。	体部外面ナデ。 体部内面(頸部と体部の境)ユビオサエ、のちユビナデ。	石英 雲母	黄橙色	
35	甕	表土層 (1層)	口径 18.8	口縁部外反(如意形)。 体部直立し、内彎気味に下方へおさめる。 口縁部と体部との境に2種類の櫛描波状文を施す。	口縁～体部内外面ナデ。	石英 雲母 結晶片岩	明黄褐色	
36	甕	遺物包含層 (2層)	口径 12.0	口縁部「く」の字状に外反。 口縁端部上下に拡張し、丸くおさめる。 口縁端部外面に2条の擬凹線文を施す。	口縁部内外面ナデ。	石英 雲母	橙色	
37	甕	遺物包含層 (2層)	口径 15.0	口縁部やや直立して外反。 口縁端部つまみ上げて丸くおさめる。 口縁端部外面に2条の凹線文を施す。	口縁部内外面ナデ。	石英 チャート 雲母	明赤褐色	
38	甕	表土層 (1層)	口径 14.0	口縁部「く」の字状に外反。 口縁端部上下に拡張し、丸くおさめる。 口縁端部外面に3条の凹線文を施す。 口縁部と体部の境に粘土紐痕が残存。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ヨコハケのちタテハケ。 体部内面ヨコハケ。	石英 チャート 雲母	内面 橙色 外面 明赤褐色	内面に黒斑

番号	器種	地点 層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
39	甕	試掘第8 トレンチ (2層)	口径 19.2	口縁部外反。 口縁端部上下に拡張し、鋭くおさめる。 口縁端部外面に3条の凝凹線文を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。	石英 チャート 雲母	明赤褐色	
40	高杯 (脚部)	試掘第8 トレンチ (2層)	脚台部径4.8	脚部外面杉目状の文様。	脚部外面ヘラミガキ。 脚部外面無調整	石英 雲母	赤褐色	
41	無蓋高杯 (杯部)	G-9 遺物包含層 (2層)	口径 14.2	口縁部やや外反。 口縁端部丸みをもつ 口縁部と底部を分ける稜は鋭い。 稜線の下には櫛描波状文を巡らす。	ミズビキ成形。 杯部内外面回転ナデ調整。 杯底部外面回転ヘラケズリ調整。	精緻	灰色	硬質須恵器
42	高杯 (脚部)	G.H-9.10 遺物包含層 (2層)	脚台部径8.7	外下方へ開き、裾付近でさらに外 下方に開く。 脚端部はやや肥厚し、やや内彎す る。 脚端部の段は鋭く尖る。 二方に透し窓を有する。	ミズビキ成形。 脚部外面カキ目調整。 脚端部外面回転ヨコナデ調整。 脚部内面回転ヨコナデ調整。	精緻	明緑灰色	硬質須恵器
43	須恵質土 器 (釜口縁)	ブドウ濠 掘北(2層)	口径 11.5	罎は口縁端部より幅1.3cmで横方 向にのびる。	口縁部内外面ヨコナデ。	密	灰白色	
44	火鉢	遺物包含層 (2層)	口径 12.2	口縁外反。 口縁端部直立。 口縁部外面に櫛状工具による列点 文を施す。	口縁部内外面および口縁部外面ヨコ ナデ。	石器 長石 雲母 赤色砂粒	明赤褐色	近世焼き締め陶器

第3表 赤坂遺跡（Ⅰ）出土遺物観察表（石器）

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	特徴・備考
3	叩き石	SK1003	10.9	7.2	6.1	710	完形	砂岩	卵形の円礫を使用。 敲打痕は顕著にみられない。
4	砥石	SK1003	27.6	16.2	17.4	9950	完形	砂岩	砂岩の巨礫を使用。 表面には研磨の使用痕による窪みが見られる。
5	石庖丁	SK1004	9.6	3.8	0.8	39.3	完形	結晶片岩	薄手の剝片を素材とする。 両側縁に調整加工を施し、直線状の刃部を作成。
12	台石	SK1007	23.4	20.4	7.5	5200	半分欠損	砂岩	砂岩の自然礫を使用。 礫の表面中央部および稜部に激しい敲打痕がみられる。 被熱を受け一部変色している。
25	石鏃	SK1008	2.5	1.1	0.35	1.0	完形	サヌカイト (石質 良)	円基。 やや細身の木葉形を呈する。(涙滴形) 最大幅が器体の下位1/3にくる。 両面押圧剥離による二次加工を施す。
30	石庖丁	SP1067	8.8	3.4	0.6	30.9	完形	石英片岩	幅広で薄手の剝片を素材とする。 一側縁に直線状の刃部を作成。
31	石庖丁	SP1067	5.5	2.6	0.6	15.0	半分欠損	緑泥片岩	幅広で薄手の剝片を素材とする。 両側縁に直線状の刃部を作成。
45	石核	G.H-9.10 遺物包含層 (2層)	4.5	10.1	2.7	79.8	完形	サヌカイト	横長剝片石核(旧石器)。 風化著しい。
46	石核	試掘第4 トレンチ 遺物包含層 (2層)	3.7	8.5	2.0	48.7	完形	サヌカイト	横長剝片石核(旧石器)。 打撃痕明瞭。
47	石鏃	F-6 表採	3.0	2.5	0.5	4.0	完形	サヌカイト (石質 良)	半基。 やや細身の二等辺三角形を呈する。 両面押圧剥離による二次加工を施す。
48	スクレイパー	遺物包含層 (3層)	3.5	4.8	1.0	11.5	完形	サヌカイト (石質 良)	幅広の剝片を素材とする。 剝片のほぼ全周縁に調整加工を施す。
49	石庖丁	試掘第8 トレンチ 遺物包含層 (3層)	5.2	2.8	0.7	11.7	完形	サヌカイト (石質 良)	幅広の剝片を素材とする。 両端および上端を折断し、器形を整える。 粗雑な調整加工により刃部を作成。
50	楔形石器	試掘第4 トレンチ 遺物包含層 (2層)	3.7	2.2	1.2	11.0	完形	サヌカイト (石質 良)	厚手の横長剝片を素材とする。 両端を折断し、器形を整える。 縦断面は凸レンズ状を呈する。 横断面は台形を呈する。
51	楔形石器	G.H-9.10 遺物包含層 (2層)	3.4	1.9	0.85	8.4	完形	サヌカイト (石質 良)	厚手の横長剝片を素材とする。 両端を折断し、器形を整える。 縦断面は扁平な凸レンズ状を呈する。 横断面は四角形を呈する。
52	石庖丁	遺物包含層 (2層)	11.8	4.6	1.1	85.0	完形	結晶片岩	幅広の剝片を素材とする。 一側縁に直線状の刃部を作成。
53	石庖丁	G.H-5.6 遺物包含層 (2層)	3.7	6.5	0.9	35.7	半分欠損	結晶片岩	幅広の剝片を素材とする。 両端縁に直線状の刃部を作成。
54	石庖丁	G.H-5.6 遺物包含層 (2層)	8.7	5.5	0.5	37.9	半分欠損	結晶片岩	幅広で薄手の剝片を素材とする。 両端縁に直線状の刃部を作成。

第3表 赤坂遺跡（Ⅰ）出土遺物観察表（その他）

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	材質	特徴・備考
55	鈴	H-4 遺物包含層 (1層)	2.0	1.5	1.2	6.5	完形	青銅	時期不明。(近世以降) 正面及び裏面に雷文。
56	磚	表土層 (1層)	14.5	6.6	5.6	600	部分	粘土	時期不明。(近世以降) 正面および側面にヘラ状工具による格子目文様を裝飾。

第4表 赤坂遺跡（Ⅱ）出土遺物観察表（土器）

番号	器種	地点 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
1	杯蓋	試掘第1 トレンチ 遺物包含層 (2層)	口径 15.4	口縁部 直立し、端部は尖り内面に面を有する。 天井部の稜は鋭く、断面形は三角形を呈する。	ミズビキ成形。 内外面回転ナデ調整。	密	緑灰色	焼成良好 硬質

第4表 赤坂遺跡（Ⅱ）出土遺物観察表（石器）

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	特徴・備考
2	石核	試掘第2 トレンチ 遺物包含層 (2層)	2.2	3.4	2.1	15.7	完形	チャート	サイコロ状の形態を呈する。 打面転移により剥片剥離が行われる。 一部自然面残存。
3	ナイフ形 石器	試掘第1 トレンチ 遺物包含層 (2層)	2.9	2.3	6.0	3.7	上半分欠損	サマカイト	薄手の横長剥片を素材とする。 裏面側より打点側の側縁に調整加工を施す。

第5表 赤坂遺跡（Ⅲ）出土遺物観察表（土器）

番号	器種	地点 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
1	壺底部	S B1001	底径 9.4	底部より上外方へのびる。 平底。	内外面損傷激しく調整不明。	石英 チャート 雲母 結晶片岩	橙色	
12	壺底部	S B1002	底径 6.2	底部 やや直立して上外方へのびる。 ややあげ底。	内外面ナデ。 輪合技法。	石英 チャート 雲母 結晶片岩	にぶい 赤褐色	
13	甕底部	S B1002	底径 4.4	体部 底面から直立し、やや内彎しながら上外方へのびる。 平底。	内外面ナデ。	石英 雲母 結晶片岩	内面 黒色 外面 明黄褐色	内面に黒斑
36	壺	S K1002	口径 16.4	口～頸部 ゆるやかに外方にひろがる。 口縁端部方形におさめる。	内外面損傷激しく調整不明。	石英 チャート 雲母	明黄褐色	
37	壺底部	S K1002	底径 8.4	体部 底部よりやや内彎しながら上方へひろがる。 わずかにあげ底。	外面ナデ。 内面損傷激しく調整不明。	石英 チャート 雲母	内面 橙色 外面 にぶい 橙色	
38	壺底部	S K1002	底径 14.0	底部よりやや内彎しながら外上方にひろがる。 平底。	内外面ナデ。 底面外面ユビヒデ。	石英 チャート 雲母 結晶片岩	内面 黒色 外面 黄褐色	内面および底面外面に黒斑。
39	壺底部	S K1002	底径 11.2	体部 底部より直立して上外方へのびる。 わずかにあげ底。	底部 外面ユビオサエのちナデ。 底部内面ナデ。	石英 チャート 雲母 結晶片岩	内面 黒褐色 外面 明赤褐色	内面および底面外面に黒斑。
40	壺底部	S K1002	底径 8.4	底部より上外方へひろがる。 あげ底。	内外面ナデ。 輪合技法。	石英 チャート 雲母 結晶片岩	橙色	



第5表 赤坂遺跡(Ⅲ) 出土遺物観察表 (石器)

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	特徴・備考
2	エンド・スクレイパー	S B 1001	3.4	1.6	1.0	6.5	完形	サヌカイト	厚手の横長剥片を素材とする。 両端を折断し、器形を整える。 剥片の端部に急斜度な調整加工を施し刃部を作出。
3	楔形石器	S B 1001	2.6	2.9	1.0	7.1	完形	サヌカイト	厚手の剥片を素材とする。 折断により器形を整える。 縦断面形は三角形を呈する。
4	楔形石器	S B 1001	3.0	2.0	0.6	3.0	完形	サヌカイト	両極打法により素材となる剥片を作出。 一部自然面残存。
5	石錐	S B 1001	1.7	0.7	0.3	0.3	刃部のみ	サヌカイト	細かな調整加工により、鋭い刃部を作出。 横断面形は菱形を呈する。
6	石庖丁	S B 1001	4.6	3.3	1.1	27.1	両端欠損	結晶片岩	厚手の剥片を素材とする。 剥片の側縁に刃部を作出。 断面形は凸レンズ状を呈する。
7	局部磨製石ノミ	S B 1001	5.9	1.5	1.1	14.7	完形	結晶片岩	厚手の剥片を素材とする。 片岩の片理面と直交する表裏面を研磨。 横断面形は四角形を呈する。
8	磨製ノミ状石器	S B 1001	8.7	2.5	1.0	44.1	完形	結晶片岩	器体全面を研磨。 先端部は両面とも丁寧に研磨されており、鋭利な刃部を作出。
9	磨製石斧	S B 1001	5.1	2.8	0.8	17.8	半分欠損	結晶片岩	器体前面を研磨。 正面は短軸方向に、側面は長軸方向に研磨。 裏面側欠損。
10	柱状石斧	S B 1001 pit No5	16.0	4.0	1.7	230	刃部欠損	結晶片岩	器体表面は激しい敲打状態。 石斧未製品。
11	砥石	S B 1001	27.0	20.7	7.8		一部欠損	砂岩	砂岩の自然礫を使用。 表面には研磨の使用痕による直径3cm程度の窪みが見られる。
14	石鏃	S B 1002	1.9	1.7	0.4	1.0	下半分欠損	サヌカイト	両面押圧剥離による調整加工。 横断面形は凸レンズ状を呈する。
15	石鏃	S B 1002	1.4	1.2	0.2	0.25	一部欠損	サヌカイト	無茎の凸基。 両面押圧剥離による調整加工。
16	石鏃	S B 1002	2.3	1.0	0.3	0.6	一部欠損	サヌカイト	無茎。 最大幅が器体の1/2より上にくる。 涙滴を逆にしたような形状を呈する。 両面押圧剥離による調整加工。
17	石鏃	S B 1002	3.1	1.1	0.5	1.5	完形	サヌカイト	無茎。 最大幅が器体上位1/3にくる。 偏平な菱形を呈する。 両面押圧剥離による調整加工。
18	石鏃	S B 1002	4.6	1.1	0.4	1.9	完形	サヌカイト	無茎。 最大幅が器体上位1/4にくる。 細身の柳葉形を呈する。 両面押圧剥離による調整加工。
19	石庖丁	S B 1002	3.6	3.7	1.0	13.9	半分欠損	サヌカイト	剥片の両側縁に細かな剥離を施し、刃部を作出。
20	石庖丁	S B 1002	6.1	4.1	0.6	23.7	半分欠損	結晶片岩	薄手で幅広の剥片を素材とする。 側縁に直線状の刃部を作出。
21	石庖丁	S B 1002	5.5	2.4	0.6	10.3	半分欠損	結晶片岩	剥片の側縁に刃部を作出。 自然面一部残存。
22	石庖丁	S B 1002	4.9	2.6	0.8	14.6	両端欠損	結晶片岩	薄手で幅広の剥片を素材とする。 両側縁に直線状の刃部を作出。

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	特徴・備考
23	石庖丁	S B1002	10.7	3.7	0.8	53.0	完形	結晶片岩	厚手の剥片を素材とする。 両側縁に直線状の刃部を作出。 一部自然面残存。
24	石庖丁	S B1002	8.4	3.4	0.9	29.2	一部欠損	結晶片岩	薄手で幅広の剥片を素材とする 一側縁に直線状の刃部を作出。
25	エンド・スクレイパー	S B1002	2.8	1.6	0.8	3.3	完形	サヌカイト	厚手の横長剥片を素材とする。 打点側を折断し器形を整える。 剥片端部に急斜度な調整加工を施し刃部を作出。
26	スクレイパー	S B1002	2.4	1.6	0.3	1.3	一部欠損	サヌカイト	薄手の横長剥片を素材とする。 縁辺に刃部を作出。
27	スクレイパー	S B1002	2.9	1.9	0.4	3.0	一部欠損	サヌカイト	薄手の横長剥片を素材とする。 全周縁に調整加工を施し刃部を作出。
28	エンド・スクレイパー	S B1002 pit Na1	2.2	3.0	0.7	3.8	一部欠損	サヌカイト	厚手の剥片を素材とする。 剥片の周縁に調整加工を施す。
29	スクレイパー	S B1002	2.2	3.6	0.5	3.9	一部欠損	サヌカイト	薄手の横長剥片を素材とする。 端部に鋸歯状の刃部を作出。
30	楔形石器	S B1002	2.8	2.1	0.8	4.2	完形	サヌカイト	両極打法による剥片剥離。 厚手の剥片の両端を折断し器形を整える。 縦断面形は凸レンズ状を呈する。
31	U-フレーク	S B1002	3.5	5.1	1.2	13.9	完形	サヌカイト	厚手の横長剥片(旧石器)。 端部に使用痕がみられる。
32	磨製太形蛤刃石斧	S B1002	9.3	8.0	4.4	410	基部欠損	砂質片岩	厚手の礫を素材とする。 両面を研磨し刃部を作出。
33	磨製石斧	S B1002	15.0	6.6	3.2	640	刃部欠損	結晶片岩	偏平な楕円礫を素材とする。 全面長軸方向に研磨。 一部敲打痕が残存。 叩き石としても使用された可能性あり。
34	磨石	S B1002	17.0	8.1	5.1	790	完形	砂岩	偏平な楕円礫を使用。 ほぼ全面に長軸方向に擦痕がみられる。 礫の正面および両側面には叩き石としても使用したと思われる激しい敲打痕がみられる。
35	砥石	S B1002	13.6	13.5	4.2	850	一部欠損	砂岩	偏平な自然礫を使用。 表裏面とも研磨の使用痕による直径2~3cmの窪みがみられる。
41	石庖丁	S K1002	9.4	4.6	1.2	79.3	一部欠損	結晶片岩	片岩の円礫を分割して生じた剥片を素材とする。 一側縁に直線状の刃部を作出。 自然面残存。
42	石庖丁	S K1002	5.7	4.1	1.0	34.9	半分欠損	結晶片岩	幅広の剥片を素材とする。 両側縁に直線状の刃部を作出。
43	石庖丁	S K1002	7.2	2.3	0.6	17.3	一部欠損	結晶片岩	薄手の剥片を素材とする。 一側縁に刃部を作出。
44	磨製不明石器	S K1002	9.1	1.9	0.9	16.6	完形	結晶片岩	器形は槍先状を呈する。 器体の2/3に調整加工が施され、細身に仕上げられている。 先端部研磨。 一部自然面残存。
45	石庖丁	遺物包含層 (2層)	13.6	6.4	1.4	160	完形	結晶片岩	大形で薄手の剥片を素材とする。 剥片の端部を折断し器形を整える。 両側縁に直線状の刃部を作出。 一部自然面残存。
46	石庖丁	遺物包含層 (2層)	6.7	2.8	0.8	24.8	半分欠損	結晶片岩	薄手の剥片を素材とする。 一側縁に直線状の刃部を作出。自然面残存。

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	特徴・備考
47	石鏃	遺物包含層 (2層)	3.6	1.4	0.7	3.3	先端部一部 欠損	サヌカイト	無茎の平基。 厚手の剥片を素材とする。 両面押圧剥離による調整加工。 細身の木葉形を呈する。 横断面形は凸レンズ状を呈する。
48	石鏃	遺物包含層 (2層)	2.5	1.5	0.3	1.3	先端部および 基部欠損	サヌカイト	薄手の横長剥片を素材とする。 縁辺に細かな押圧剥離による調整加工。 横断面形は扁平な凸レンズ状を呈する。
49	石鏃 (未製品)	I-9 遺物包含層	2.7	2.5	0.6	3.4	下半部欠損	サヌカイト	横長剥片を素材とする。 一側縁に押圧剥離による調整加工。 一部自然面残存。
50	石錐	遺物包含層 (2層)	3.9	2.9	0.6	7.1	先端部一部欠 損。	サヌカイト	横長剥片を素材とする。 剥片の縁辺を抉るように調整加工を施し、刃部を 作出。
51	R-フレー ク	G-8 遺物包含層 (2層)	3.6	1.7	0.5	2.1	完形	サヌカイト	横長剥片を素材とする。 一部に調整加工を施す。
52	R-フレー ク	I-9 遺物包含層 (2層)	2.0	1.2	0.7	1.8	完形	サヌカイト	一部に調整加工を施す。 風化著しく旧石器の可能性あり。





調査区遠景 (1. 赤坂遺跡 (I) 2. 赤坂遺跡 (II) 3. 赤坂遺跡 (III)) (南より)



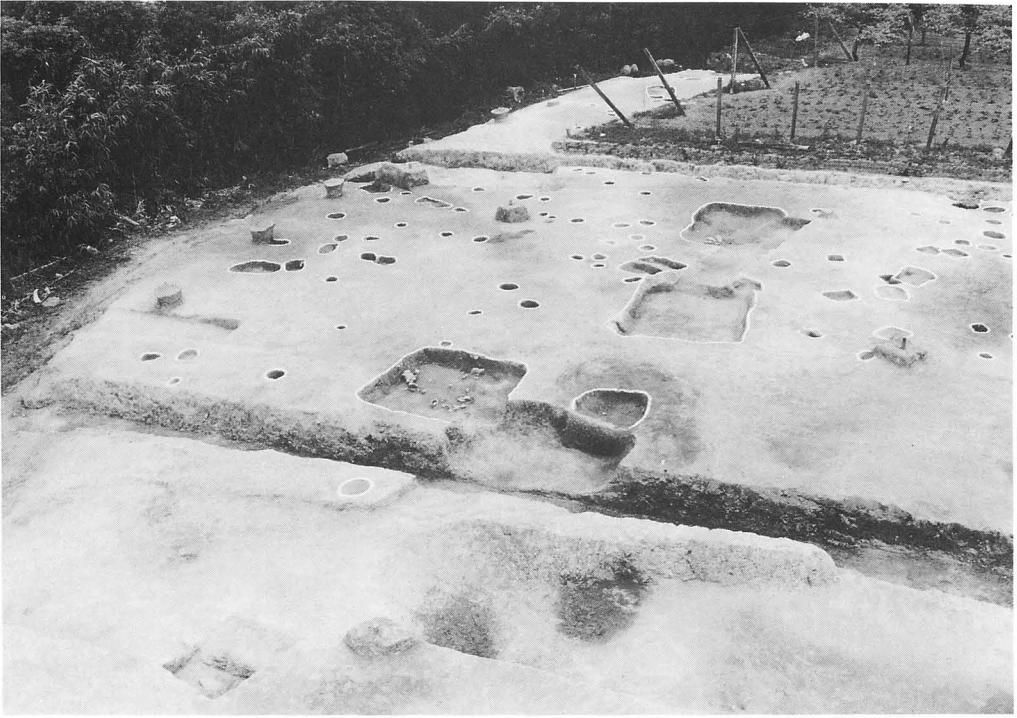
赤坂遺跡 (I) 調査前風景



赤坂遺跡（Ⅱ）調査前風景



赤坂遺跡（Ⅲ）調査前風景

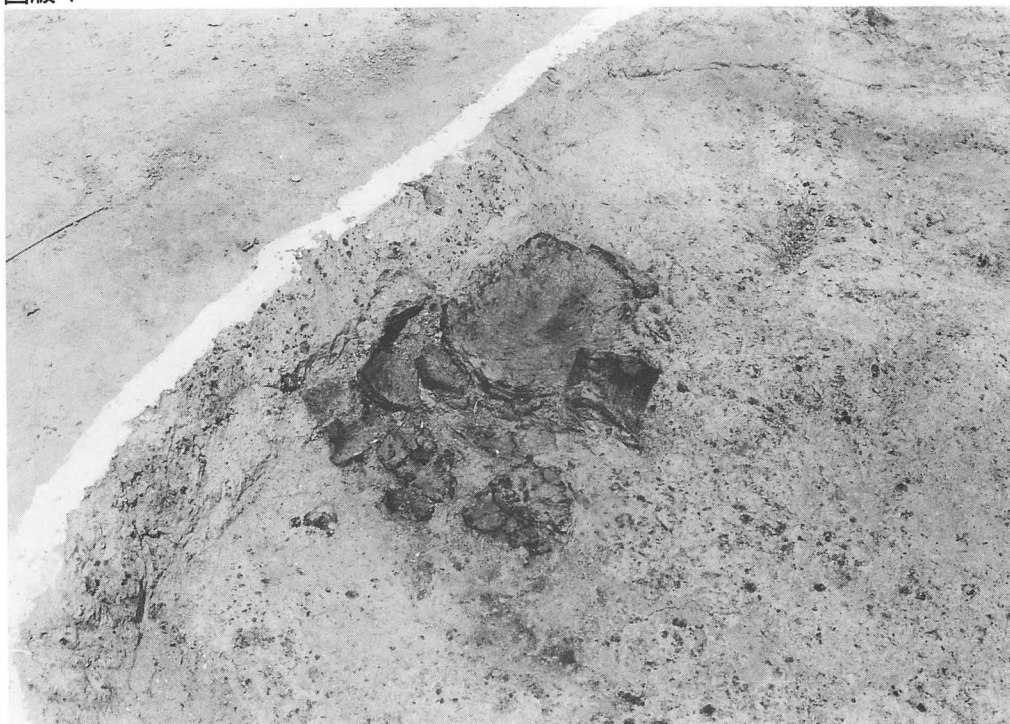


赤坂遺跡（Ⅰ）遺構検出状況全景



S K 1001全景

图版 4



S K 1001遺物出土状況



S K 1003全景





S K 1003遺物出土状況



S K 1005全景

図版 6



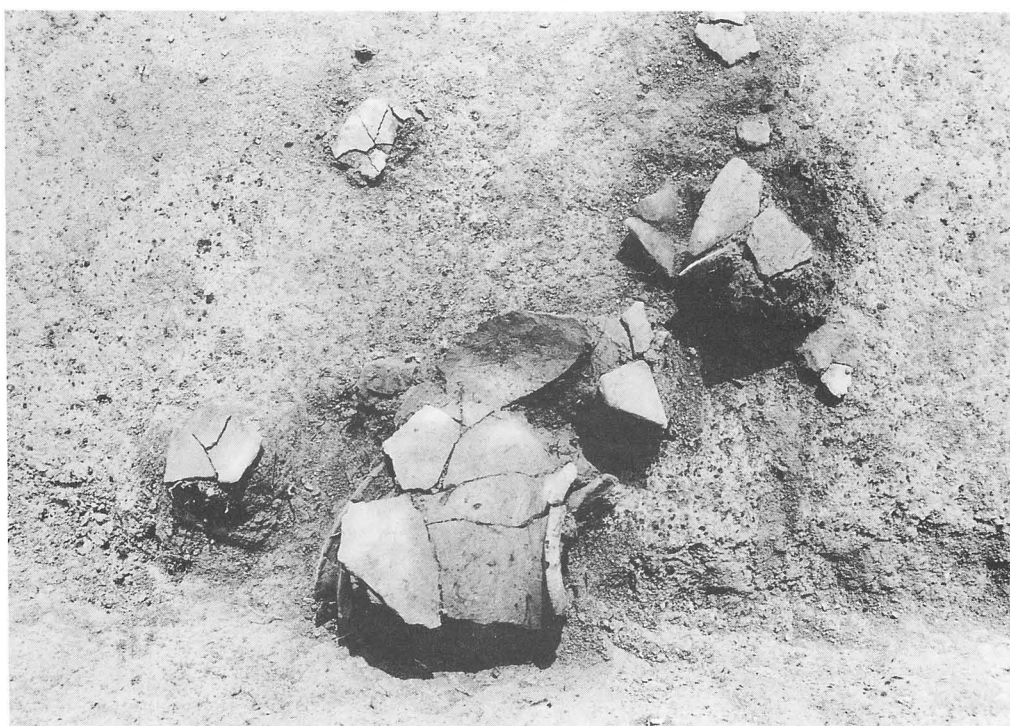
S K 1007全景



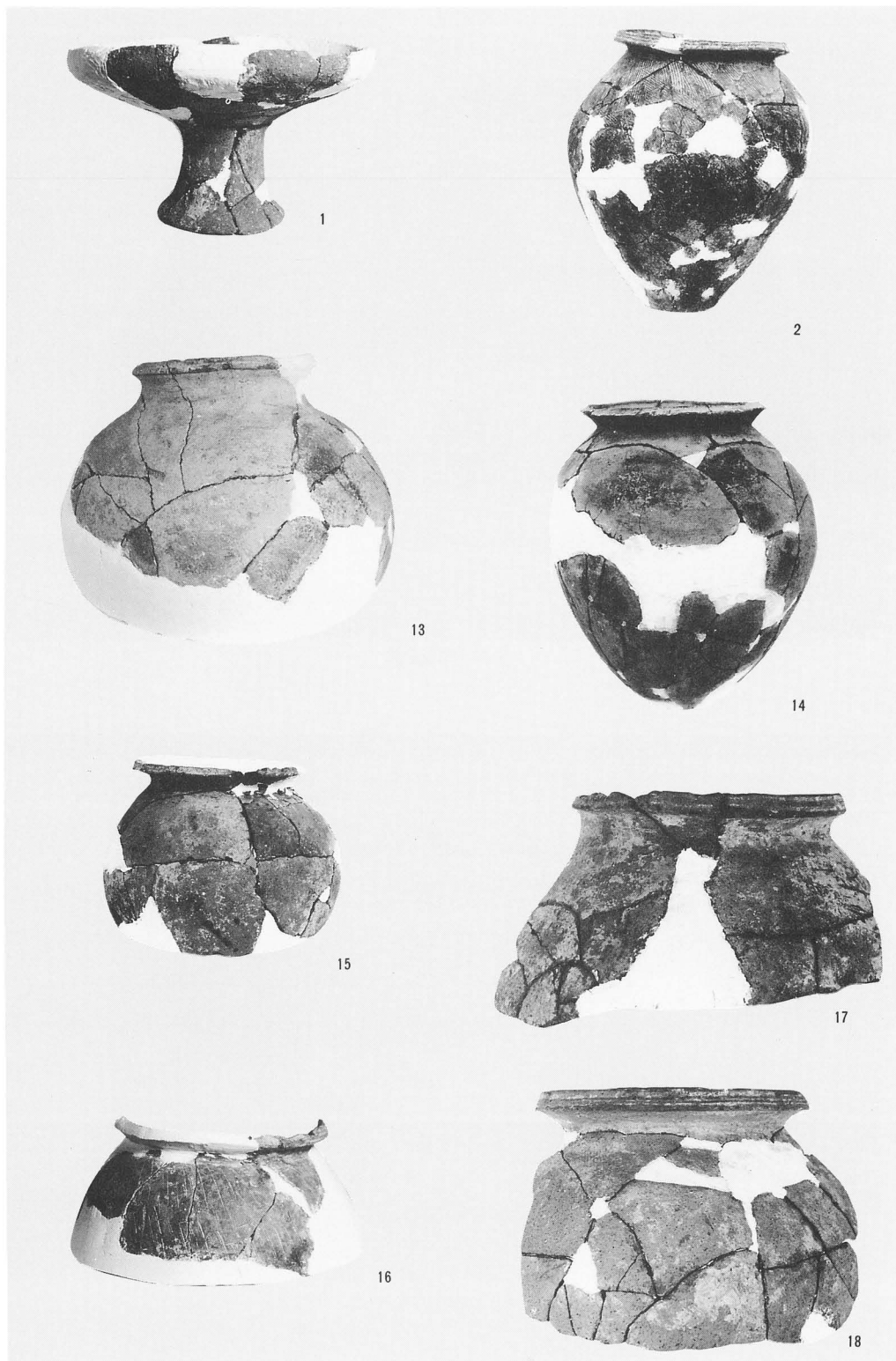
S K 1007遺物出土状況



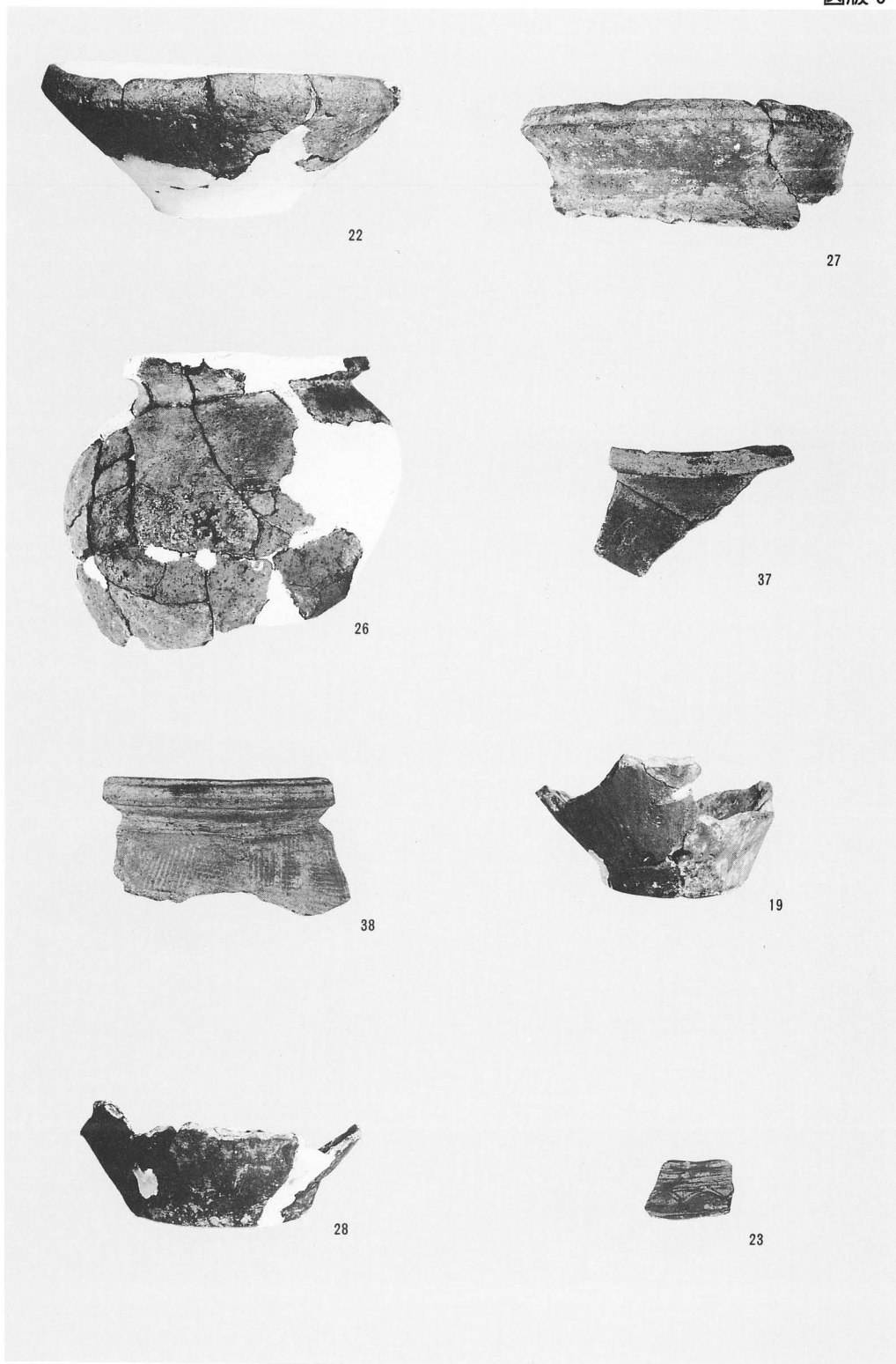
S K 1008全景



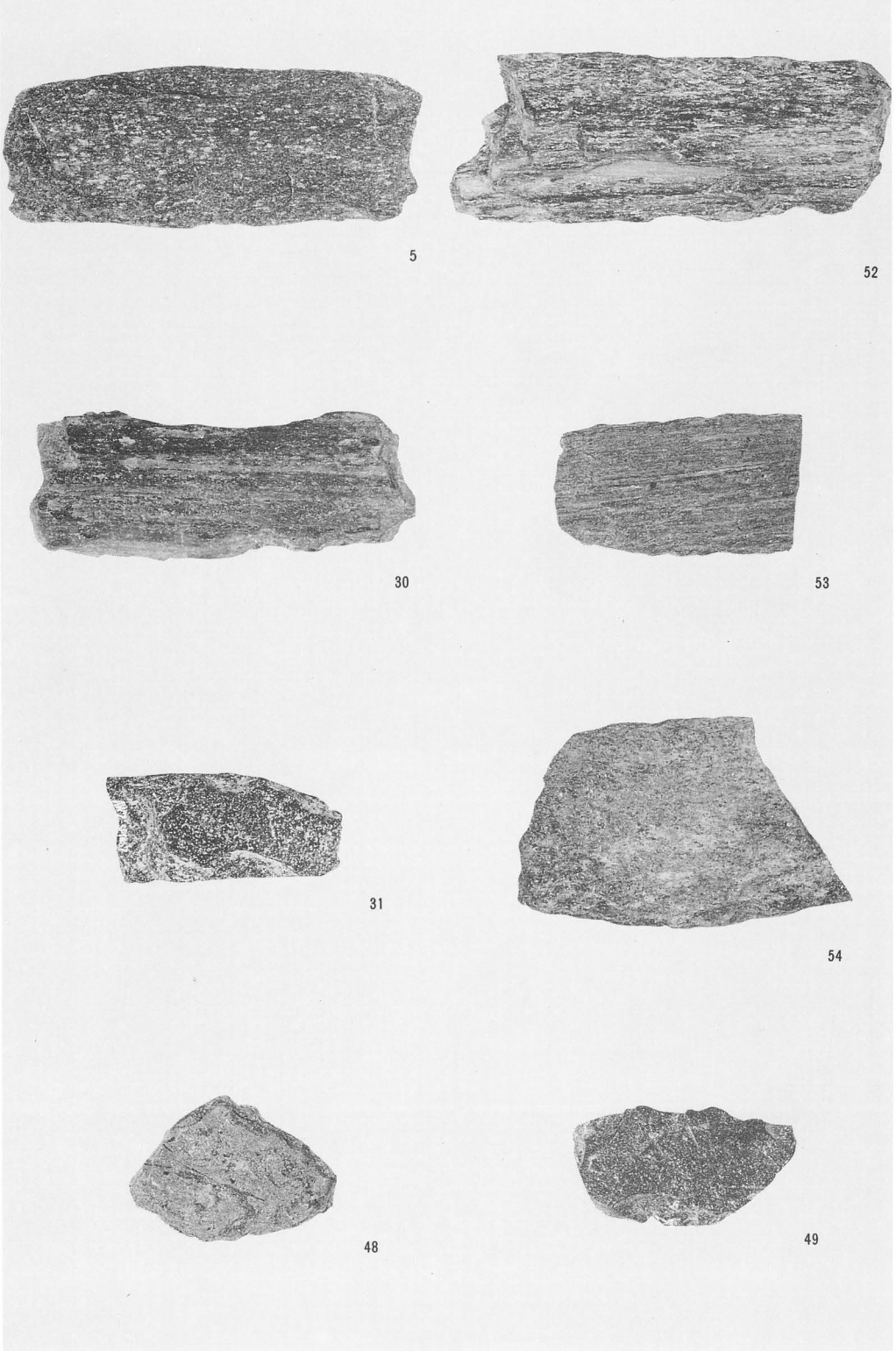
S K 1008遺物出土狀況



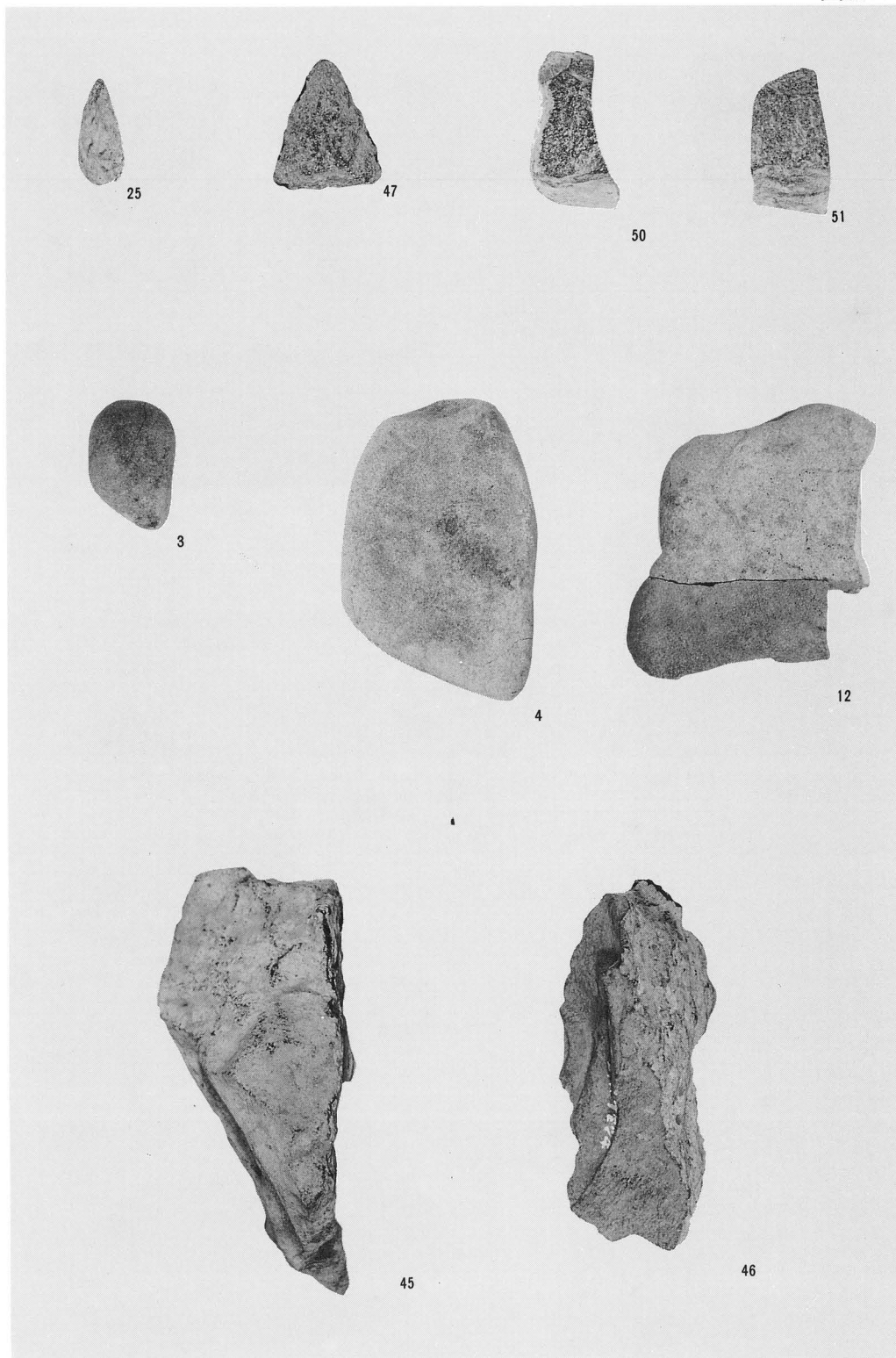
出土遺物 (1)



出土遺物 (2)

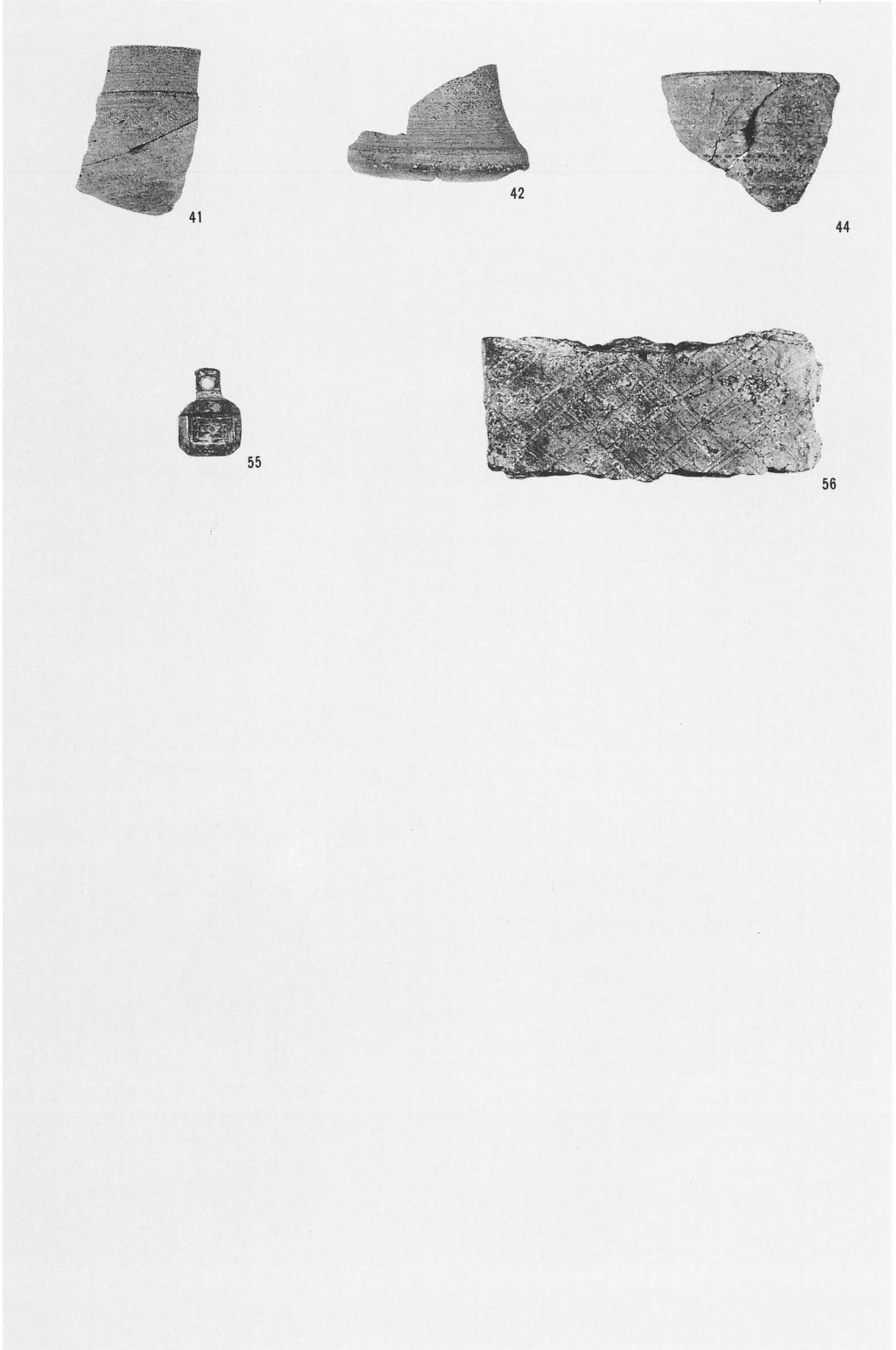


出土遺物 (3)



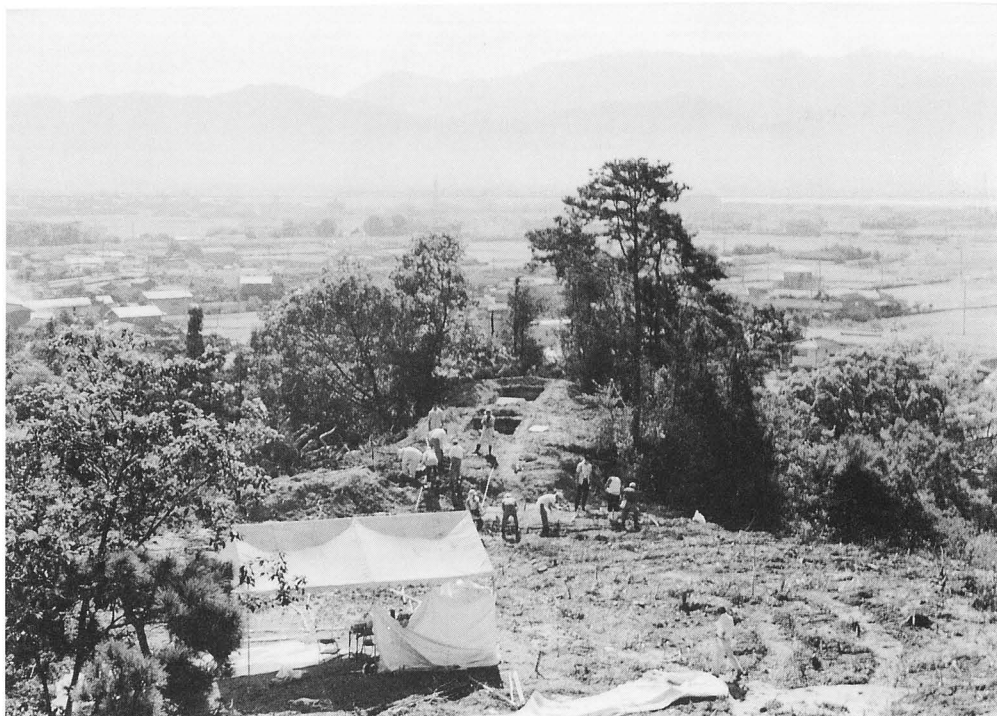
出土遺物 (4)

图版12

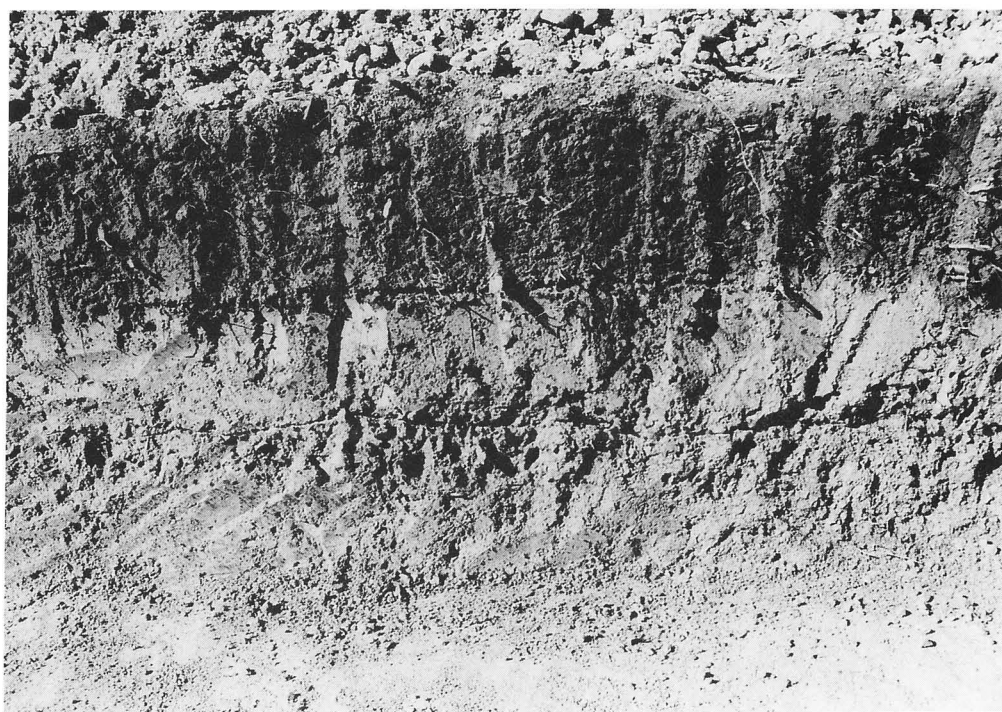


出土遺物 (5)

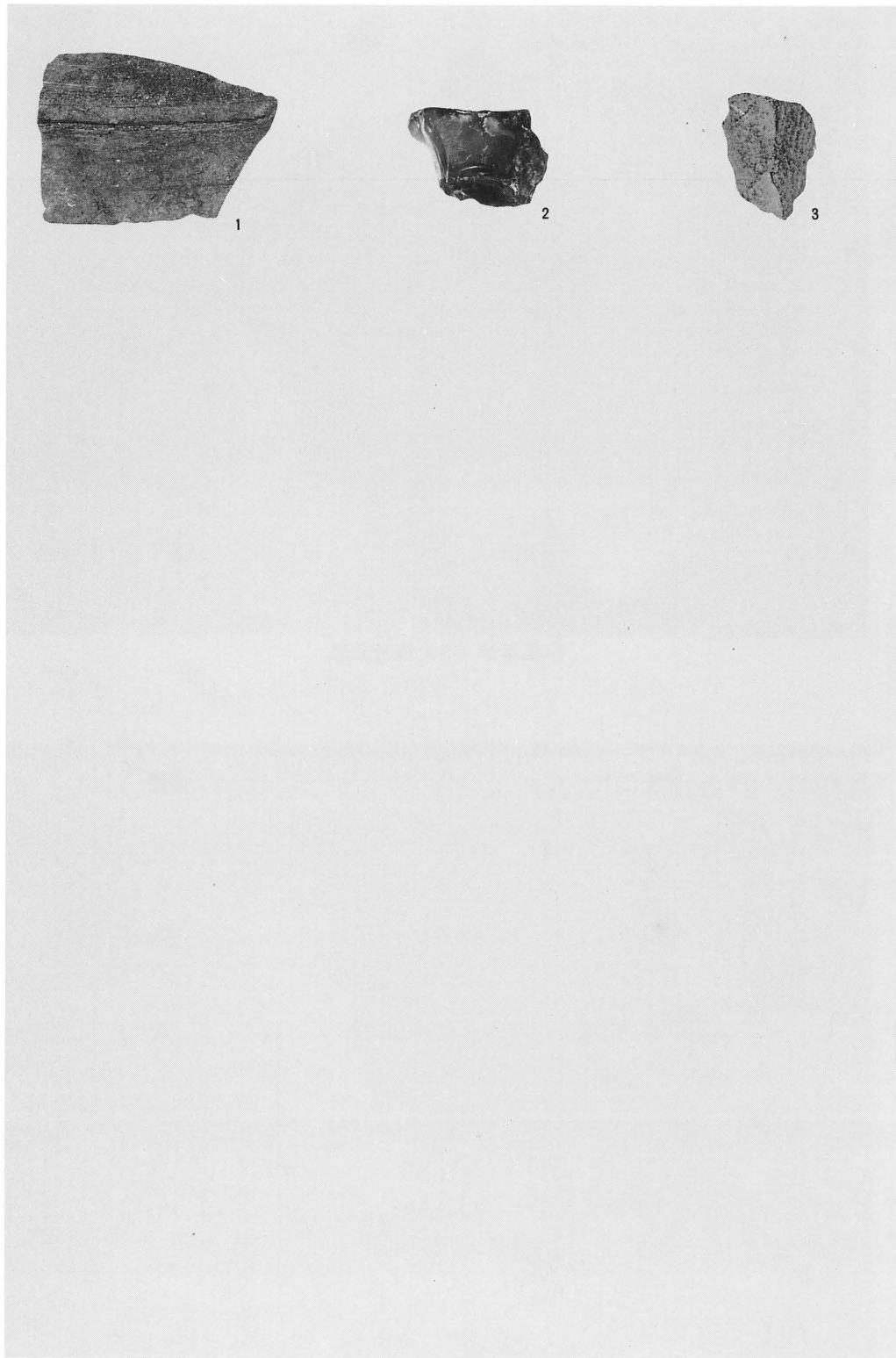




赤坂遺跡（Ⅱ）調査風景



土層推積状況



出土遺物



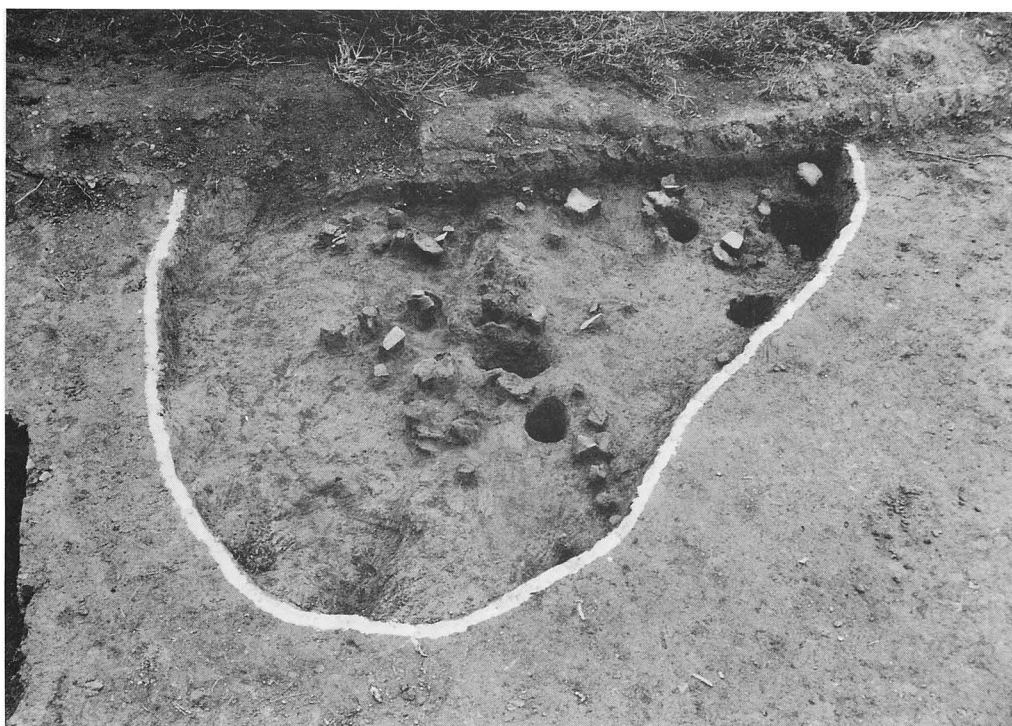
赤坂遺跡（Ⅲ）遺構検出状況全景



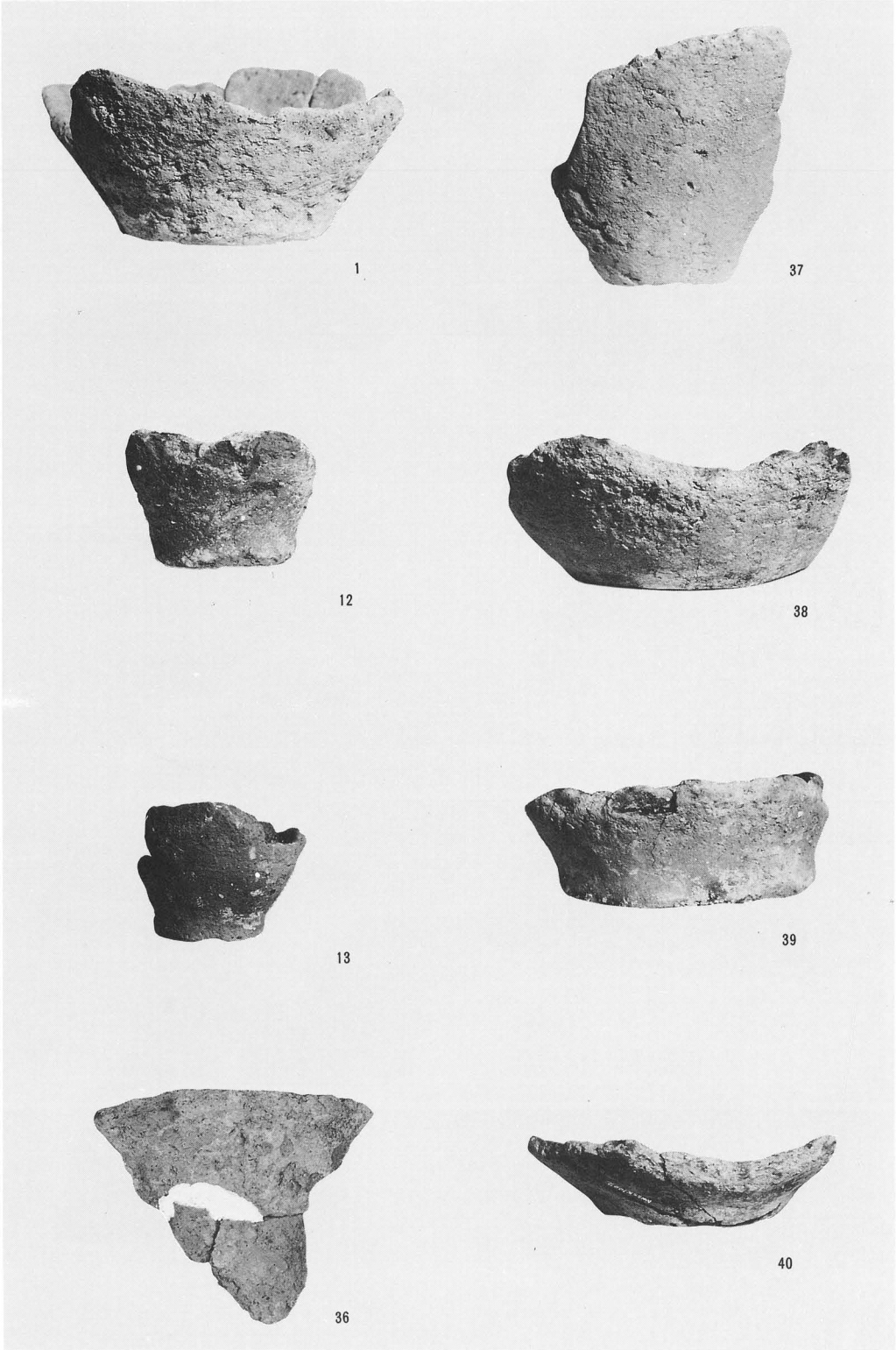
S B 1001全景



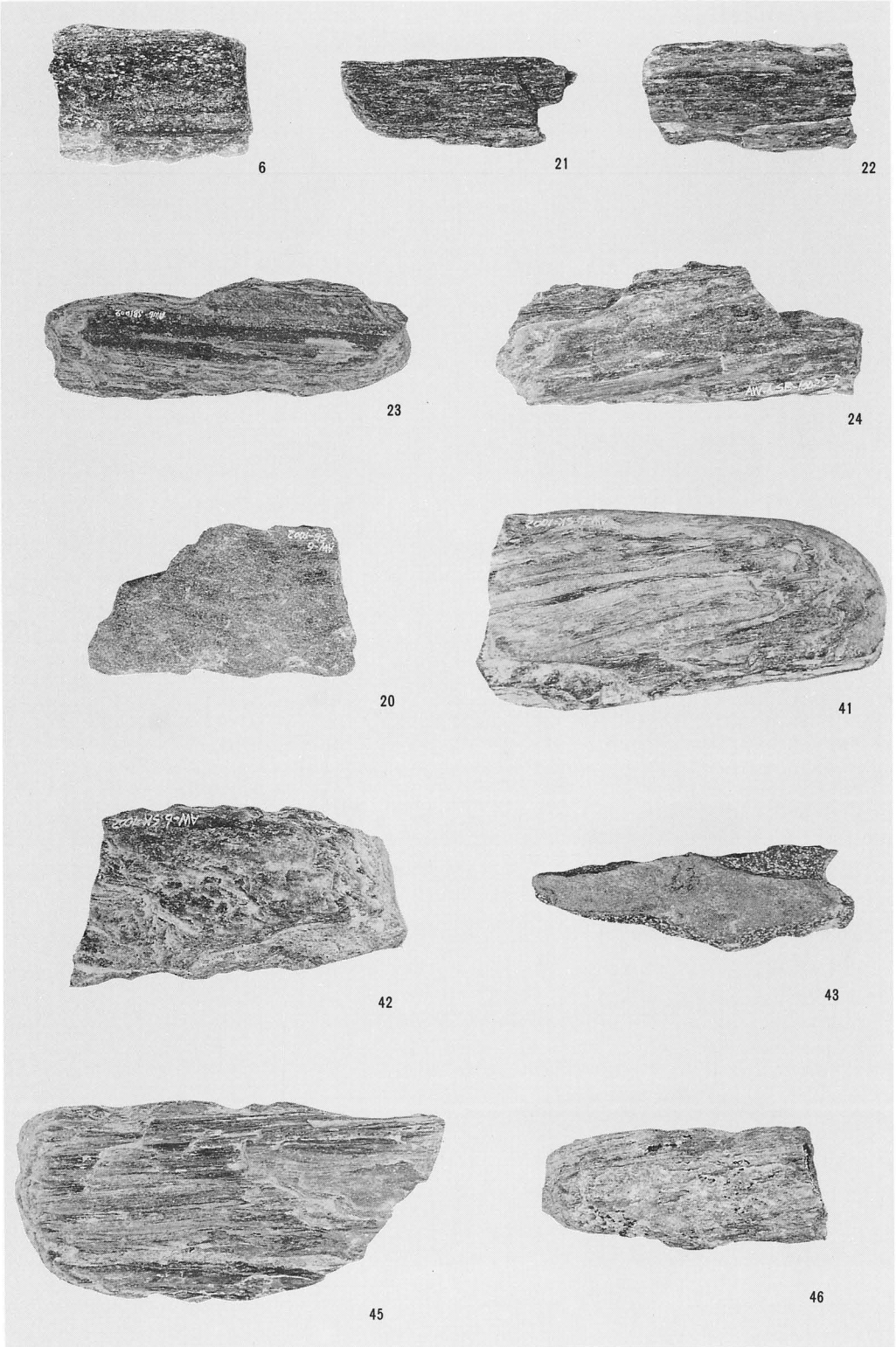
S B 1002全景



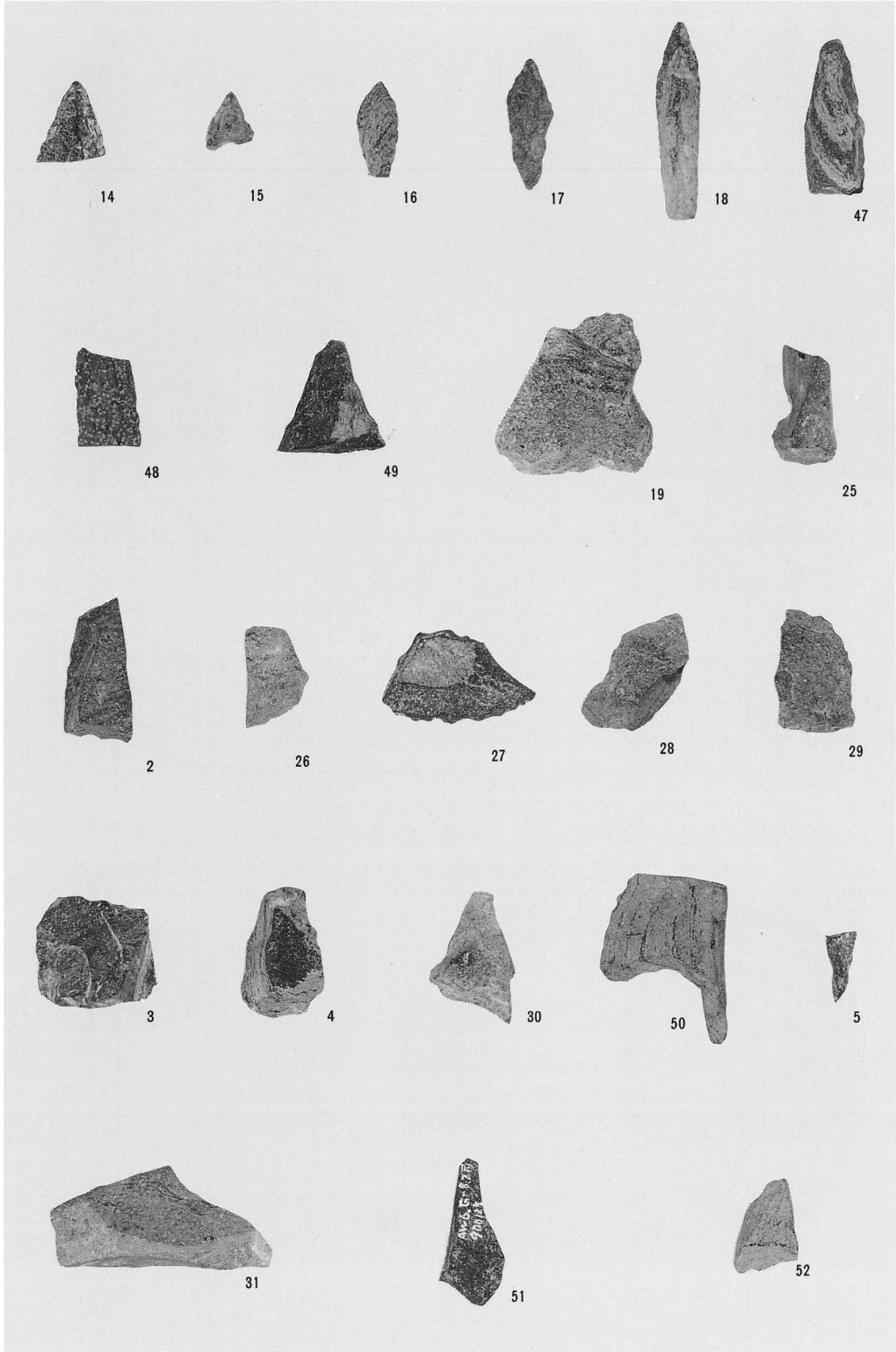
S K 1002全景



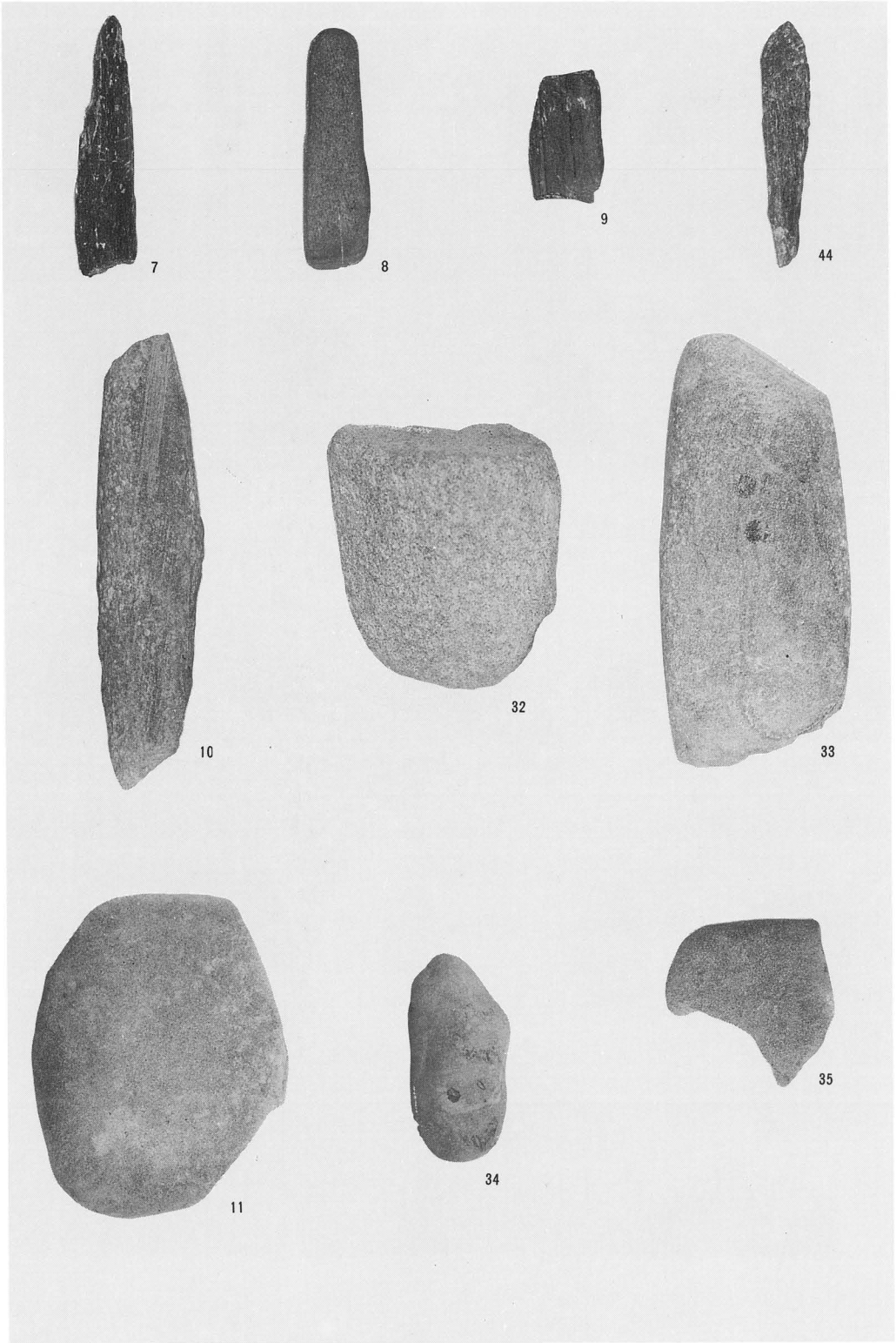
出土遺物 (1)



出土遺物 (2)




出土遺物 (3)




出土遺物 (4)





Ⅲ 金蔵～上井遺跡



1 本章は四国縦貫自動車道建設に伴う金蔵～上井遺跡の発掘調査報告である。

2 発掘調査期間及び報告書作成の実施期間は次のとおりである。

調査期間 平成元年 8 月 1 日～10月16日

整理期間 平成 4 年 4 月 1 日～平成 5 年 3 月31日

3 遺物番号、挿図番号はすべて通し番号とした。

4 第 2 図の地形図は建設省国土地理院登録の 1 / 25, 000 の地形図 「市場」を転載したものである。

#### 遺跡抄録

遺 跡 名	金蔵～上井遺跡
読 み	こんぞう～うわえ
所 在 地	板野郡土成町浦池字金蔵～上井1575他
種 別	散布地
時 代	旧石器・縄文・弥生・古代・中世
主な遺構	土坑・溝・炭窯
主な遺物	旧石器・縄文石器・弥生土器・石器・土師器・須恵器・陶磁器

# 1 調査の経過

## (1) 調査の経過

金蔵～上井遺跡は、分布調査によって7,620㎡が試掘の調査対象面積としてあげられていた。試掘は、対象地域内に25箇所の試掘坑を設け、1990年6月1日から20日にかけて実施された。この結果、本調査の面積を2,530㎡に決定し7月14日入札、8月1日より本調査を開始し、10月16日調査を終了した。

## (2) 発掘調査の方法

調査の基準となるグリッドの位置は、発掘調査統一基準にならい第4系国土座標を基準とし、5mメッシュを1グリッドの大きさとして調査区を覆い、南西の隅を基準として北にはアルファベット、東にはアラビア数字を記号として順にふりグリッド名とした。またこれとは別に、3カ所に分散している調査区に北からABCの記号つけて地区名とした(第1図)。

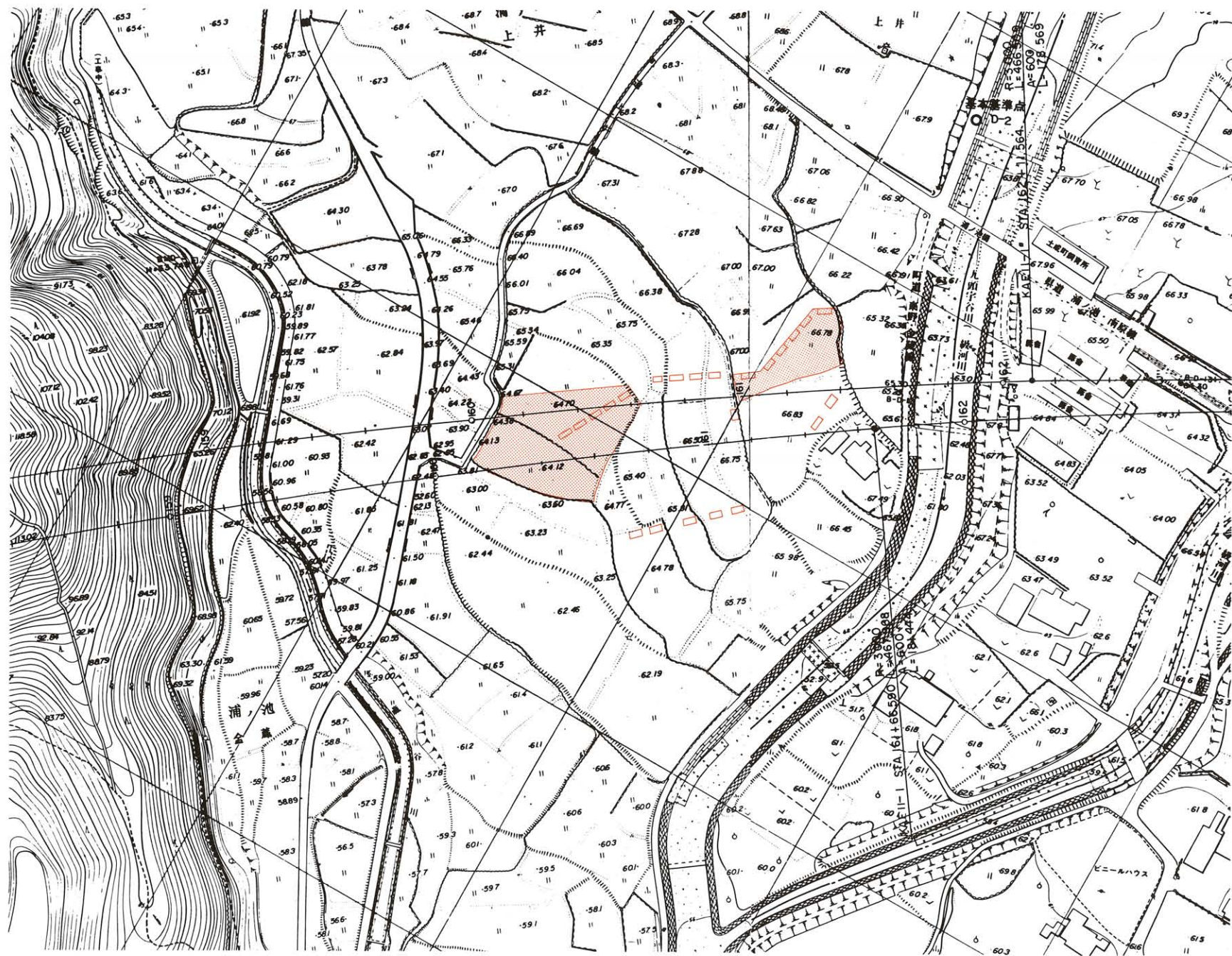
## (3) 調査日誌抄

1989年		9月5日	査にはいる。 C地区の遺構検出作業を終了。
8月3日	発掘調査開始。機械掘削によるA地区の表土除去作業終了。		遺構検出状況の写真撮のため、午前中で作業中止。
8月4日	B地区の表土除去開始。	9月9日	B地区の遺構掘り下げ作業を終了。
8月7日	A地区の遺構面精査開始。B地区の表土除去終了。	9月12日	C地区の遺構掘り下げ作業を終了。空撮のため清掃とライン引きの作業にはいる。
8月10日	A地区の精査終了。B地区の人力掘削開始。	9月13日	今日、第一遺構面の空撮を予定していたが雨天のため中止。16日に延期する。
8月11日	A地区の写真撮影。		
8月18日	A地区の土層図作成開始。B地区の遺構面精査を開始。	9月16日	第一遺構面の空撮と、遺構の完掘状況写真の撮影を終了。
8月22日	B地区の遺構検出作業終了。C地区の人力掘削開始。	9月18日	B・C地区の人力掘削作業を再開。第一遺構面下のシルト層から弥生土器が出土し始める。
8月24日	B地区の遺構検出状況写真を撮影後、遺構の掘り下げを開始。		
8月29日	C地区の人力掘削終了。すぐ精		

- |       |   |        |                                 |
|-------|---|--------|---------------------------------|
| 9月21日 | B地区の土層図作製を開始。   | 10月9日  | C地区の土層図作製。                      |
| 9月23日 | B・C地区の弥生時代の遺物包含層の掘り下げを継続。                                 | 10月12日 | B地区の弥生時代の遺構掘り下げを終了。図化作業と写真撮影。   |
| 9月27日 | B・C地区の弥生時代の遺物包含層の掘り下げを終了。                                 | 10月13日 | C地区で石核出土。B・C地区の旧石器の包含層の掘り下げを完了。 |
| 9月28日 | A地区再掘削中、焼土の広がり<br>と弥生土器を検出。<br>B地区では弥生包含層下の掘削<br>中旧石器が出土。 | 10月16日 | 土層図の追加事項の記載を終え<br>調査終了。         |
| 9月29日 | A地区の焼土溜まりの精査。B<br>地区の旧石器出土地点の精査。<br>包含層を確認する。             |        |                                 |
| 10月2日 | B・C地区の旧石器包含層の掘り<br>下げ開始。                                  |        |                                 |
| 10月6日 | A地区の焼土だまりの精査を終<br>了。土層図作製にかかる。<br>B地区の一角で弥生時代の遺構<br>を検出。  |        |                                 |
| 10月7日 | A地区の調査を終了。  |        |                                 |



写真1 試掘調査風景



第1図 調査地位置図

- 本調査区
- 試掘トレンチ



## 2 遺跡の立地と環境

### (1) 地理的環境

本遺跡は、阿讃山脈南麓を流れる九頭宇谷川によって形成された扇状地上に位置する遺跡である。北と南をそれぞれ阿讃山脈と吉野川に挟まれ、東を宮川内谷川、西を切幡丘陵によって区切られたこの地域では、九頭宇谷川をはじめ、檜原谷川、鈴川谷川、宮川内谷川の各河川がそれぞれ扇状地を形成しているが、それらは合流して県下最大の合流扇状地を形造るとともに、宮川内扇状地は御所神社付近で段丘面を作出している。また、おなじ合流扇状地上には、四国を東西に横切る中央構造線の影響によって引き起こされたと考えられている北池から浦池の間にのびる地溝状地や、御所神社から土成中学校の間に見られる断層崖など特異な地形が存在している。

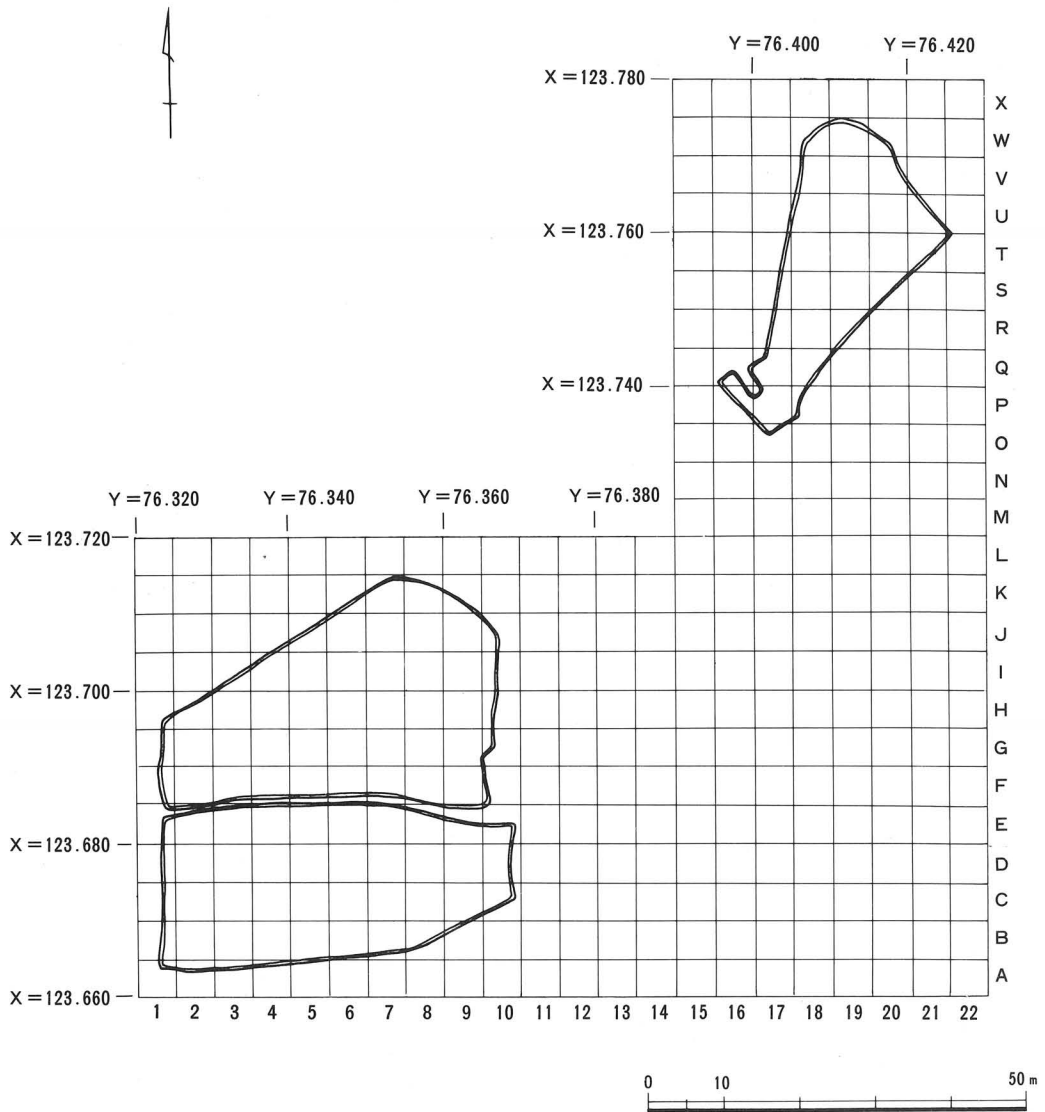
### (2) 歴史的環境

本遺跡の位置する九頭宇谷川と東を流れる宮川内川によって形成された広大な土成の扇状地上には、前田遺跡をはじめとして、北原遺跡、大木峰延遺跡などの遺跡が点在している。これらは主に弥生時代中期から後期にかけての時期を中心とする遺跡であるが、その他にも、旧石器が前田遺跡から、縄文土器や平安から鎌倉時代にかけて



第2図 金蔵～上井遺跡周辺主要遺跡分布図

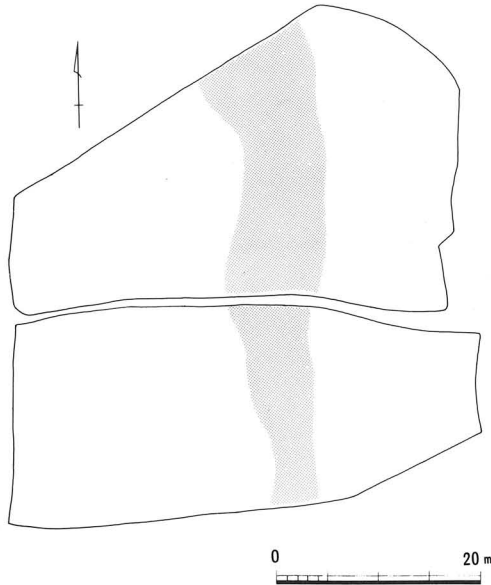
ての掘立柱建物群が前田、大木峰延の両遺跡で検出されている。この扇状地の扇中央部から扇端部近くにかけては姫塚古墳、遊塚古墳、穴薬師古墳等の古墳が築かれ、背後の段丘上には県下有数の旧石器の散布地である椎ヶ丸遺跡が位置している。また、遺跡のすぐ北側には、平安時代に山田古嗣によって築かれたと伝えられる浦池が位置し、西側の切幡丘陵にはかつて赤田山古墳が存在していた事が知られている他、旧石器時代の遺跡として金地遺跡が報告されている。



第3図 グリッド配置図

### 3 調査成果

#### (1) 基本層序



第4図 B・C地区内低湿地分布範囲略図

調査区の設定されたA・B・Cの各地点は、先述したようにいずれも扇状地上に位置しているが、九頭宇谷川に面したA地区と、それより50m南西の緩斜面上に設定されたB・C地区では、堆積の状況が若干異なっている。A地区の場合、1層から10層までの水田土壌下に11層以下の礫混じりのシルトが堆積しているが、部分的に水田土壌直下に泥岩または砂岩の岩盤が露出する地点がある。これは扇状地の下に埋没している中央構造線の一部が部分的に地表近くにまで持ち上がってきたものだと考えられる。これに対して、B・C地区では、それぞれ1層から8層までの水田土壌の堆積の下に何枚かのシルト層が見られたが、岩盤の存在は認められなかった。ここでは記述が煩雑になることを避けるため、B地区の層序を用いて説明を行うが、B地区とC地区のシルト層の対応関係は、B地区の第14層がCの11層に、第15層が12層、第16層が14層にそれぞれ対応する。B地区の第16層は、調査区の東側から西にむかって一端下がったのち再び上がり、調査区の東側に南北に延びた浅い溝状の窪地を形成している。この窪地のなかに堆積している14層は弥生時代の遺物包含層であるが、層中に葦科植物の根の痕跡が点在しており、当時は湿地であったと考えられる。これは14層と16層の間に見られる薄い粘土層が水を透し難かったためと考えられる。また、16層の上に堆積している15層からは、旧石器時代の遺物が少数ながらまとまって出土しているが、同じ層の上部からは縄文時代の遺物が僅かながら検出されており、旧石器時代から縄文時代にかけての遺物包含層と考えられる。



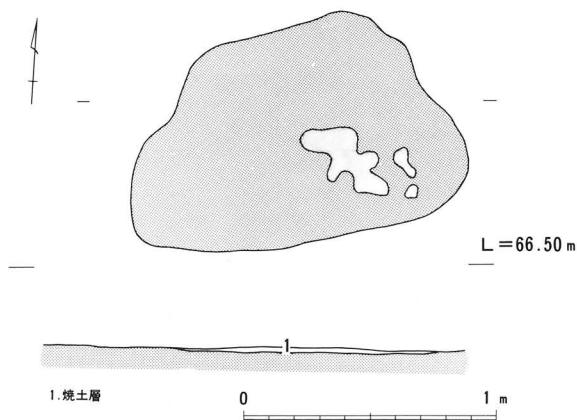
## (2) 遺構と遺物

### A地区

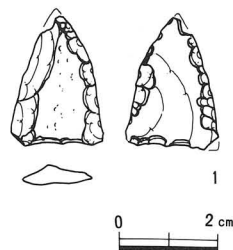
#### 性格不明遺構 S X 1001 (第5図)

調査区の北東側の九頭宇谷川に面した緩斜面上で検出された遺構で、東西1.3m、南北1.9mの範囲に焼土の広がりが出された。焼土は部分的にかなりの厚みをもっているものの全体的に薄く、掘り込みの痕跡などは認められなかった。この焼土に伴ってサヌカイ

ト製の打製石鏃(第6図)が1点出土している他、周辺からは二次加熱を受けてぼろぼろになった少量の弥生土器の破片が出土している。出土した土器の残りが悪く正確な年代は明らかではないが、弥生時代に属することはまちがいないものと考えられる。



第5図 A地区 S X 1001実測図

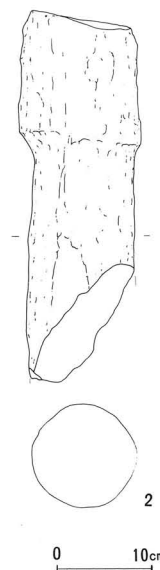


第6図 S X 1001出土石鏃実測図

### 包含層出土の遺物

#### 石棒(第7図)

S X 1001と同じ北東の緩斜面部の水田土壌直下から単独で出土したもので、周辺には遺構の痕跡らしきものはなら確認することはできなかった。石棒の大きさは、長さ39cm、胴部の最大径11cmを計り、緑色片岩製で全面に敲打痕が残されているが研磨は行われていない。素材は大形の転石が用いられているらしく、部分的に自然面がのこされている。



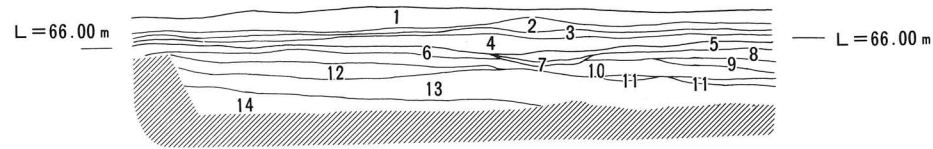
### B・C地区

#### ①第1遺構面の遺構と遺物

水田土壌直下の第9層上面で検出された遺構である。

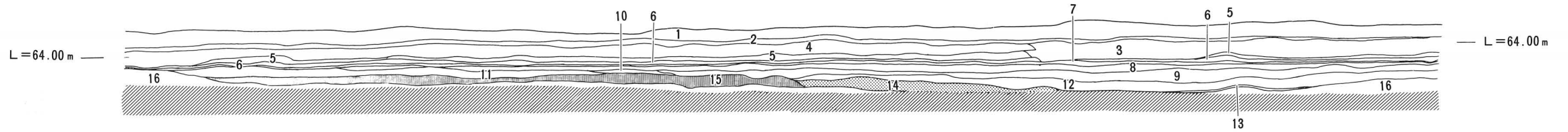
#### 溝(S D 1001)(第10図)

B・Cの調査区西側をほぼ北から南に向かって走る遺構で、第7図 A地区出土石棒実測図



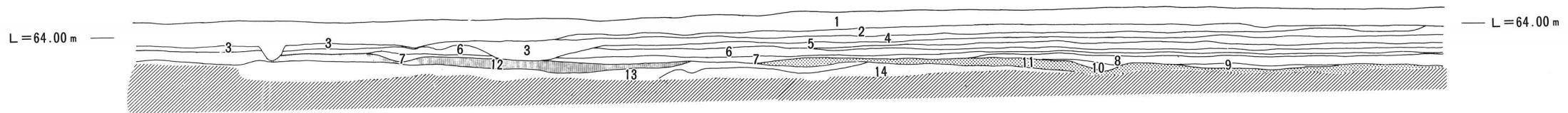
A 地区北西壁土層図

1. 暗灰黄色シルト層 2.5 Y 4/2
2. 明黄褐色シルト層 2.5 Y 6/6
3. 灰白色シルト層 5 Y 7/2
4. 黄褐色シルト層 2.5 Y 5/4
5. 灰黄色シルト層 2.5 Y 6/2
6. 黄褐色シルト層 2.5 Y 5/3
7. 灰黄色シルト層 2.5 Y 6/2
8. 浅黄色シルト



B 地区南壁土層図

- |                       |                        |
|-----------------------|------------------------|
| 1. 暗灰黄シルト層 2.5 Y 4/2  | 9. 灰オリーブ色シルト層 5 Y 5/2  |
| 2. 黄褐色シルト層 10 Y R 5/8 | 10. 灰オリーブ色シルト層 5 Y 5/2 |
| 3. 黄褐色シルト層 10 Y R 5/8 | 11. 浅黄色シルト層 2.5 Y 7/4  |
| 4. 黄褐色シルト層 2.5 Y 5/4  | 12. 灰オリーブ色シルト層 5 Y 5/2 |
| 5. 暗灰黄色シルト層 2.5 Y 5/2 | 13. 褐灰色粘土層 10 Y R 4/1  |
| 6. 灰オリーブ色シルト層 5 Y 5/3 | 14. 灰黄色シルト層 2.5 Y 5/2  |
| 7. 灰オリーブ色シルト層 5 Y 5/3 | 15. 灰色シルト層 2.5 Y 7/2   |
| 8. 暗灰黄色シルト層 2.5 Y 5/2 | 16. 淡黄シルト層 2.5 Y 8/3   |

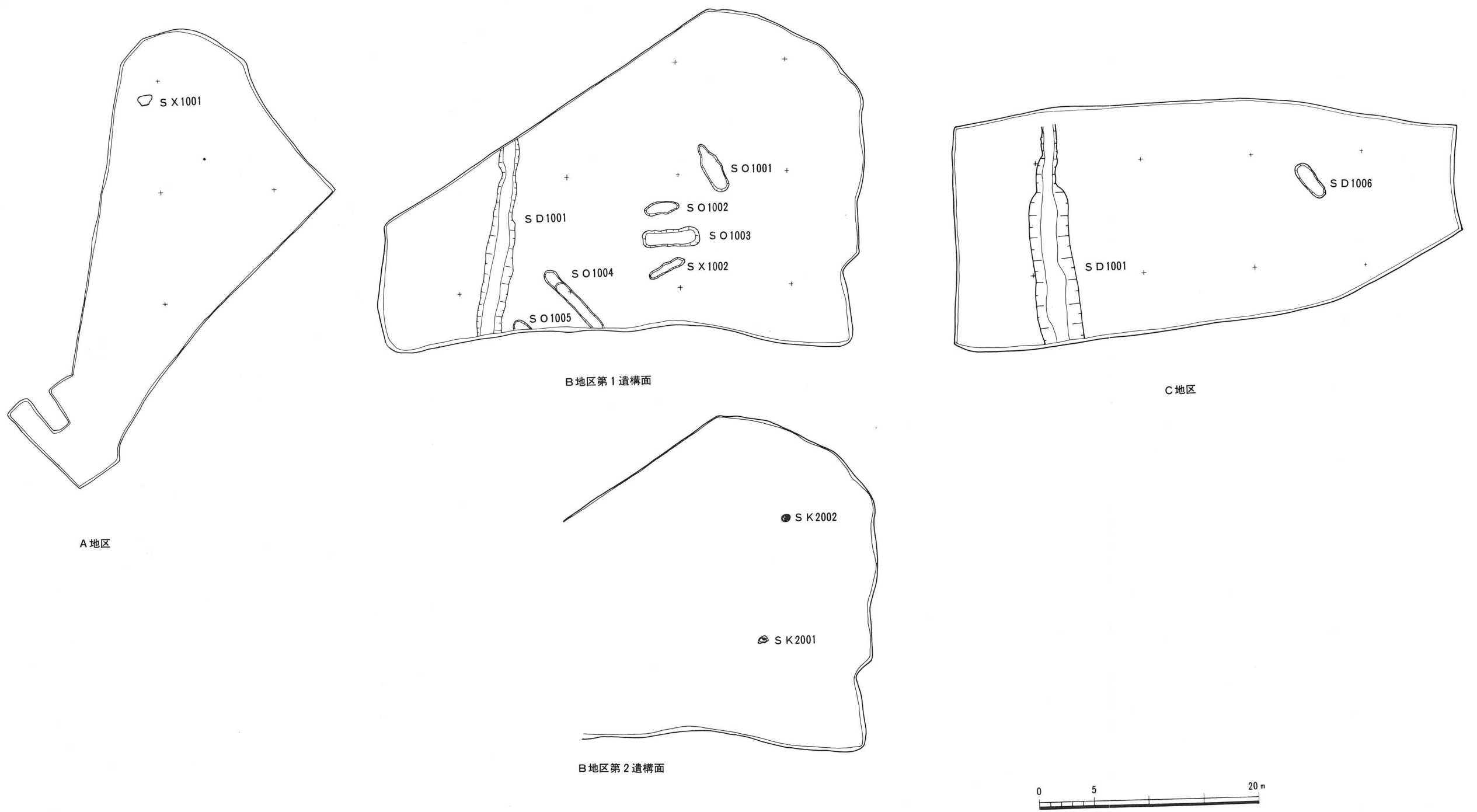


C 地区南壁土層図

- |                         |                          |
|-------------------------|--------------------------|
| 1. 暗灰色シルト層 2.5 Y 4/2    | 8. 暗灰黄色シルト層 2.5 Y 5/2    |
| 2. 黄褐色シルト層 2.5 Y 5/4    | 9. 灰褐色粘土層 10 Y R 4/1     |
| 3. オリーブ褐色シルト層 2.5 Y 4/3 | 10. にぶい黄色シルト層 2.5 Y 6/4  |
| 4. 暗灰黄色シルト層 2.5 Y 5/2   | 11. 灰黄色シルト層 2.5 Y 6/2    |
| 5. 灰オリーブ色シルト層 5 Y 5/3   | 12. 灰色シルト層 2.5 Y 7/2     |
| 6. 灰オリーブ色シルト層 5 Y 5/3   | 13. 淡黄色シルト層 2.5 Y 8/3    |
| 7. 灰オリーブ色シルト層 5 Y 5/3   | 14. 黄灰色黄灰色シルト層 2.5 Y 4/1 |



第8図 基本層序



第 9 図 遺構配置図